



14.611
97



始



欠

學術的報告

本市立傳染病院ニ收容セル一種ノ傳染病ニ關スル略報	四四一
時流行ノ發疹室扶私ニ就テ	四五一
チフス患者及ヒ感染動物ノ血液變化ニ就テ	四六二
病原ニ關スル實驗	四八七
臨床的知見	五三三
內地方ニ流行スル發疹熱ノ實驗	五五〇
發生及ヒ傳播ノ狀態	六一〇
橫濱市ニ於テ流行セル發疹チフス中市立萬治病院患者ニ就テ	六二六
剖記事	六三六
行セル發疹室扶私	六四四
球菌ニ就テ	六四四

10-57

大正三年發疹瘰癧扶私流行誌

第一章 沿革

發疹瘰癧扶私ハ上古ヒボクラテス時代既ニ特種ノ傳染病トシテ認識セラレタリシカ其後十六世紀ノ中葉ニ至ルマテ再ヒ「ペスト」ト混同セラレタリ然ルニフラスカトリウス復タ之ヲ「ペスト」ト區別シ獨立シタル傳染病トナセリ。爾來歐洲ニ於テハ相踵テ起ル戰役ニ伴ヒ猛威ヲ逞シ或ハ凶作ニ乘シテ烽火ノ如ク爆發シ全歐ヲ靡捲スルコト數回遂ニ英蘭土愛蘭土露獨ノ國境等ニ病芽ノ根蒂ヲ培ヒ未タ絶滅ニ至ラス。歐洲以外ノ地ニ於テモ亞佛利加ノ海岸地方埃及波斯東印度墨西哥北米等又本病ノ跳梁スル所トナレリ。

其ノ支那ニ侵入セシ時代ハ詳ナラスト雖モ東京方面ハ古ヨリ本病ノ侵襲ヲ蒙リタルモノ、如シ

本邦ニ於ケル本病ノ起源ハ之ヲ知ルニ由ナキモ疫病ハ神祇時代ニ始リ爾來戰役又ハ飢饉ニ際シ屢々流行セリ或ハ其中ニ本病ヲ包含セシヤ計ルヘカラスト雖

モ今日之ヲ證明スルハ殆ト不可能ナリ、醫學ノ智識ヲ以テ本病ノ存在ヲ證明シタルハ明治十四年ニシテ、其ノ前後ニ發生セルモノハ發疹多キ腸室扶私トナセリ、然レトモ其以前安政六年既ニ弘前方面ニ本病ノ流行セシ傳説アルノミナラス、明治十年刊行セシ衛生局年報中ニモ發疹室扶私ハ頻年流行シ殆ト風土病ノ觀ヲナストセルヲ以テ見レハ、明治十四年以前既ニ業ニ本病存在シタルモノ、如ク又其以後ニ於テモ明治十四五年ノ頃露國船ニ依リ山形縣ニ新ニ病毒ヲ輸入シ、又日清日露ノ戰役ニ際シテモ還送兵ニ依リ本病毒ヲ齎シタル實歴アルニ徴セハ今回ノ流行以前ニ於テ病毒ノ侵襲ヲ蒙リタルコトハ疑ナシトス

第二章 外國ニ於ケル流行

歐洲ニ於ケル發疹室扶私ハ遠ク上古ヨリ存在セシモノ、如ク其載籍ノ如キヒボクラテスニ濫觴シ、希臘羅馬ノ醫師間ニハ當時既ニ特殊ノ傳染病トシテ認識セラレタリ、然レトモ爾來十六世紀ノ中葉ニ至ルマテ再ヒ他ノ疾病ト混同シタル者ノ如ク、現ニ一五〇五—二八年伊太利ニ蔓延シタル所謂「ペスト」ハ「フラスカトリウ」スノ記録ニ依リ本病ナリシコト疑ナク、又一五六六年洪牙利、及一五七四年マイセ

ンニ於テ流行セシ「ペスト」モ、其多數ハ本病ナリシコトヒルシユノ證明スル所ナリ、又一七五七年澳太利殊ニ其首府ウインナニ大流行ヲ來セル熱病モ主トシテ本病ナリシト言フ

爾來十九世紀ノ終リニ至マテ、或ハ戰役ニ伴ヒ或ハ飢饉ニ際シ、到ル處烽火ノ如ク爆發シ殆ト全歐ヲ席捲セリ、今戰役ニ伴フ主ナル流行ヲ數フレハ、一五二二年カール第五世ノメツツ城ヲ攻ムルヤ、其包圍軍ニ本病發生シ頗ル猖獗ヲ極メタルモノ、如ク、又一八〇六年普露兩軍ノエーナ及アイラウニ敗滅シ、其傷病兵ヲケーンヒスベルヒニ集合スルヤ、市民ノ熱性病ニ襲ハル、者忽チ七千ニ達シ、二十七名ノ軍醫ト二百七十六名ノ病院吏員ハ確實ナル發疹室扶私ニ罹レリト言フ、就中慘劇ヲ極メシハ奈翁ソ露國遠征ナリ、即チ一八一二年ノ春奈翁ノ師ユル佛軍中ニ腸室扶私及ヒ赤痢ト共ニ本病發生シ、莫斯科ニ到着シタル時ハ既ニ全軍ノ三分ノ一ハ所謂熱病ニ犯サレ、其戰敗レテ退却スルヤ、スモレンスク、ウイルナ等ニ殘サレタル病死者ノ數ハ二萬五千ニ上レリト言フ之レ等病死者ノ衣類ヲ奪ヒ、或ハ賣買シタル猶太人等モ病芽ノ侵ス所トナリ、三萬人中八千ノ犠牲者ヲ出シ、ウ井ルナ附近ニ於テハ、同年六月ヨリ翌年ノ始メニ至ル迄、五萬五千ノ死體ヲ葬リタリト云フ、更ニ

敗餘ノ佛軍ハケ―ニヒスベルヒニ一萬人以上ノ患者ヲ殘シタルヲ始メトシ、途中到ル處夥シキ患者ヲ殘シテ退却シタルヲ以テ、獨國中到ル處怒濤ノ寄スルカ如ク病毒四圍ニ瀰蔓セリ、バイエルン軍モ亦佛軍ニ加ハリシヲ以テ、同一ノ運命ニ陥リ二萬八千ノ兵士中歸還セシモノ僅カニ四千五百餘人ニ過キサリキ、敗走セル佛軍ヲ追撃シタル露軍モ亦同シク之カ侵襲ヲ蒙リ、戰ニ於テハ一兵ヲ損セサリシ軍隊モ十月二十日ヨリ十二月十四日ニ至ル僅々五十餘日間ニ全兵力ノ五分ノ三ヲ失ヒ、加之病毒ハ遂ニ全露ニ瀰蔓セリト言フ、以テ如何ニ傳染力ノ猛烈ナリシカヲ知ルニ足ラン

一八一三年四年ノ自由戰爭ニ於テモ、佛國第四軍ハ敗走ノ途上三萬ノ兵卒中其半數ハ本病ノ奪フ所トナレリ、同盟軍ハ勿論、敵軍中ニモ、本病發生シ、總兵員ノ五分ノ三以上ヲ失ヒ、サクセン國ノ市街地ニ於ケル醫師ハ殆ト全部本病ノ犠牲トナレリ、又三十年戰役ニ於テモ本病死者ハ遙カニ戰死者ノ數ヲ超過セリト云フ

一八五四―五六年ニ亘ル「クリミア」戰爭ニ於テハ露國軍ニ依リ地方病的ニ存在セル病芽ハ英佛同盟軍ニ放タレセバストポール駐屯軍ノ如キハ三萬五千ノ患者ト一萬七千五百十五人トノ死者ヲ出セリ、此患者數ハ全軍ノ一割二分ニ、死者ハ五

分ニ該當セリ、又一八七七、八年ノ露土戰爭ニ於テハ「ニードネル」ノ調査シタル所ニ依レバ「ドナウ」軍隊中本病ニ侵サレタル者三萬二千四百五十一人ニシテ全員ノ五四・八〇%ニ相當シ、高加索軍ニ於テハ其數一萬五千六百六十人ニ及ヘリ

更ニ凶歳又ハ戰役ノ餘波ト見做スヘキ大流行ハ一七七二、二年獨國ノ凶作ニ乘シ、病毒發生シテ殆ト全獨逸ヲ風靡シタルヲ始メトシ一七九三―九六―九七年ニモ亦大流行ヲ招來セリ、一八〇五年ハ「アウステルリッツ」戰役ノ餘波トシテ、病芽全澳ニ漲リ、公共ノ建物ハ悉ク患者ノ收容所ニ充テラレタリト言フ希臘、洪牙利ノ流行モ亦此時ナリ

就中飢饉時流行ノ顯著ナルハ英蘭土、愛蘭土、及南部獨逸ノ流行ナリトス、即チ一八一五―一六一八年英蘭土及愛蘭土ノ流行ハ愛蘭土、最モ劇甚ヲ極メ、住民ノ八分ハ悉ク本病ノ犯ス所トナリ、約四萬人ノ死者ヲ出シ、更ニ、一八二六―二八年及一八四六―四八年ニモ又大ナル流行ヲ反覆セリ是等數度ノ流行ニ於テ英蘭土ハ總計百萬人以上愛蘭土ハ三十萬人以上ノ患者ヲ出セリ、南獨逸ノ流行ハ一八四七、八年ニシテ病毒ハ上シユレージエン地方ニ發生シ、最モ旺ナル六ヶ月間ニ出シタル患者ハ七萬人ニ達シ、死者一萬六千人ヲ算シタリト言フ

斯ノ如ク流行ノ反覆セル結果露國ハ其東海岸及ガリチエン地方ニ愛蘭土、英蘭土、匈牙利、伊太利等ハ其ノ一地方ニ佛蘭西、西班牙、葡萄牙等ハ散在的ニ病芽侵淫シテ根蒂ヲ作り未タ其迹ヲ絶ツニ至ラス、然レトモ近時ハ衛生施設ノ完備ト共ニ大ナル流行ヲ見タルコトナシ

歐洲以外ニ於ケル最近ノ流行地ハ亞佛利加ノ東海岸、波斯、埃及及北印度、墨西哥等ニシテ、北亞米利加ノ落機山熱モ本病ニ類似スルモノ、如シ

支那ニ於ケル本病ノ起原ハ之ヲ知ルコト能ハス、古キ醫書ニ載スル陽毒ト稱スルモノ又ハ斑爛隱疹ト名クルモノ發疹室扶私ナルヘシト言ヒ、或ハ熱毒斑疹ヲ以テ本病ニ擬スル説アルモ共ニ信スル能ハス、然レトモ東京地方ニ於テハ疾ク本病ノ侵襲ヲ蒙リ、今尙病蒂ヲ有スルノミナラス日清、日露戰役當時我軍隊中罹病者ヲ出セル所ヲ以テ見レハ北清地方ニモ亦本病芽ノ撒播セルヤ論ナキナリ

第三章 本邦ニ於ケル既往ノ流行

疫疾ノ始メテ本邦史籍ニ現ハレタルハ 神武天皇ノ五十八年紀ナルモ流行蔓延ノ嚆矢ト認ムヘキハ紀元五百六十九年即チ崇神天皇ノ五年ナリ當時國中瘟疫

流行シ死スルモノ大半ナリシト言フ爾來明治ノ初年ニ至ルマテ約二千年間或ハ戰亂ニ伴ヒ飢饉ニ乘シ或ハ是等特殊ノ關係ナクシテ流行ヲ反復セルコト百ヲ以テ算フヘク中ニハ燎原ノ勢ヲ以テ數國ニ跨リ數年ニ亘リテ流行シ死スル者數萬爲メニ國內ニ令シテ疫神ヲ祭り、寺堂ヲ建立シ改元ヲ行フ等上下擧ケテ疫疾ノ防遏ニ狂奔セシカ如キ大ナル流行ヲ見タルコト屈指ニ遑アラス是等ノ流行病中ニハ或ハ發疹室扶私ヲ包含セシヤ計ルハカラスト雖モ遡リテ立證スルハ容易ノ業ニアラサルナリ

富士川游著

日本醫學史

我邦ニアリテハ神武天皇五十八年紀ノ疫ヲ初メトシ戰役又ハ飢饉ニ際シテ疫邪ノ流行セシコト史籍ニ見ユ其中ニハ或ハ今日ノ發疹室扶私ヲ包含セシヤモ知ルベカラズト雖モ醫學ノ智識ヲ以テ本病ヲ我邦ニ見タルハ明治十四年マルツ、ブツケマンノ兩人ニ始マル爾後各地ニ小流行アリシト雖モ果シテ眞ノ發疹室扶私ナリシヤ否ヤハ疑問ノ裡ニ在リ

始メテ本症ノ存在ヲ證明シタルハベルツナリ氏ハ明治十四年東京市ヶ谷監獄署内ニ於テ甚シキ流行ヲ極メ更ニ同監獄署ヨリ兵庫姫路ノ兩監獄ニ送りタル囚人ニ依リ彼ノ地ノ監獄及ヒ市中ニ發生シタル疾病並ニ明治二十五年東京本所避

病院ニ於テ醫員三名看護婦九名ヲ襲ヒタル疾病ハ確ニ發疹室扶私ニシテ病毒恐
ラク其以前ヨリ存在セシモノナラントセリ然レトモ内務省衛生局年報ニ舉クル
年々ノ散發性患者ハ診斷ノ錯誤ヨリ來ルモノト推察スルヲ至當トス何トナレハ
散發性發疹室扶私ハ容易ニ來ルモノニアラサレハナリトセリ

ベルツ著

內科學

往時本症ノ日本ニ於テ存在セシヤ否ヤ之ヲ證明スルヲ得スト雖モ恐クハ存在セシ者
ナラシ予ハ明治十四年(西曆一八八一年)東京市ヶ谷監獄在勤醫士二名ヨリ發疹室扶私
ニ罹レル者アルノ報告ヲ得全ク本症タルヲ確認シタリ
是レ實ニ日本ニ於テ始メテ本症ノ存在ヲ認メタル症例ナリトス而シテ其發生ニ就テ
ノ檢索ヲ遂ケシニ始メ石川監獄署ヨリ遷サレタル囚人之レニ罹リ同監獄署ニハ一時
甚シキ流行ヲ極メタルコトアリ又該署ヨリ囚人ヲ兵庫及姫路監獄ニ送りタルニ依リ
病毒ヲ彼ノ地ニ齎シ市中ニ傳播セシコトアリシモ幸ニ大流行ヲナスニ至ラザリキ。
次ニ明治二十五年(西曆一八九二年)東京ニ於テ發疹室扶私ノ再流行ヲ來セシコトアリ
テ本所區遮病院ニ於テハ五名ノ醫師中三名十名ノ看護婦中九名之レニ感染セシコト
アリ
蓋シ換氣法ノ良好ナル病院ニ患者ヲ收容シタランニハ曾テ斯ノ如キ異例ハ見ルヲ得
サリシナラン
又内務省衛生局ノ報告ニ依レハ年々殆ト本症ノ多少散發セサルコトナシト雖モ予ノ

推察シル所ニ依レハ仔細ニ之レヲ檢索センニハ大ニ診斷ノ錯誤セルモノナルコトヲ
證スルニ足ル何トナレハ散發性ノ發疹室扶私ハ容易ニ來ルモノニアラサレハナリ

斯ノ如クベルツハ日本ニ於ケル確實ナル發疹室扶私ハ前後只二回ニシテ他ハ
皮疹多キ腸室扶私ノ誤診ナリトセリ然ルニ當時ノ學者間ニハ更ニ之レヲ否認シ
ベルツノ所謂發疹室扶私ト唱ヘシモノハ恐クハ發疹多キ腸室扶私ニ過キサレヘ
シトセリ誰カ烏ノ雌雄ヲ辨スルモノソ然レトモ這般ノ論争ハ畢竟近時本邦ニ發
疹室扶私ノ稀有若クハ絶無ナリシヲ證シテ餘リアリト言ハサルヘカラス

從テ當時以降本邦人ノ發行セシ著書ハ多ク本病ノ記載ヲ省略シ甚シキハ本邦
ニ於テ發疹室扶私ト稱スルハ皮疹多キ腸室扶私ノ誤診ニ因ルハ夙ニ識者ノ認ム
ル所ナリト記セリ只僅カニ橋本節齋著近世內科書同新內科書竹中成憲著日本小
內科學醫學博士井上善次郎著井上內科新書中ニノミベルツノ認識シタル明治十
四年市ヶ谷監獄内ノ流行ト明治二十五年本所遮病院内ノ發生トヲ引證セシニ過
キス只博士井上ハ岡山縣並ニ他ノ府縣ニ於テ小流行アリタリトセルモ其府縣年
代及患者數等ヲ詳ニセス

學者ノ所說斯ノ如クナルニ拘ハラヌ明治十年十二月發行衛生局第一第二報告

(自明治八年七月)中ニハ傳染病ノ本邦ニ行ハル、モノ發斑室扶私腸室扶私痘瘡赤痢惡性咽喉炎ノ如キ其性慘惡ニシテ頻年時ヲ以テ流行シ殆ト風土病ノ觀ヲ爲スモノアリ』ト記載シ又明治十三年ニハ本病ノ腸室扶私ト混同スルヲ憂ヘ内務省衛生局報告第十五號ヲ以テ發疹室扶私及腸室扶私兩症ノ鑑別法ヲ公ニセリ

(内務省衛生局報告第十五號 明治十三年 月發行 博士三宅秀藏)

發疹室扶私及腸室扶私兩症ノ辨識

發疹室扶私及腸室扶私ノ二病ハ其病候ヲ同クスル所アルヲ以テ從來此二病ヲ辨別スルヲ得サリシニ二三十年以來病屍剖檢及診斷學ノ進歩セシヲ以テ其病ノ診微及剖觀ノ大異アルト其傳染性ノ劇易アルトナ知ルヲ得タリ今此ノ二病ハ全然其性ヲ異ニスルヲ知ラスシテ唯其名稱ノ略相似タルヨリ診斷ノ際彼此ヲ辨別セサルトキハ幸ニシテ其治療ノ法ヲ誤ルコトナシト雖モ其豫防ノ方法ニ至リテ大ニ異ナル所アリ故ニ若シ腸室扶私ノ患者ニ發疹室扶私豫防ノ嚴法ヲ遵守セシメハ音ニ其目的ヲ達スル能ハサルノミナラス徒ニ病家ノ困苦ヲ招クコト多カルヘシ因テ二病ノ相異ル所ヲ略記シテ茲ニ報告ス

發疹室扶私 腸室扶私

- (一) 傳染ノ性最モ強烈ナリ
- (二) 一回發スレハ蔓延流行スルヲ常トス

- (一) 傳染ノ性甚々弱シ
- (二) 流行ニ至ラスシテ不斷散在シ又時々大流行ヲ致スヲアリ

- (三) 此病ニ罹ルハ其年齒ノ長幼ニ拘ハラズト雖モ亦時アリテ多ク老若ヲ徒スコトアリ
- (四) 發病ニ先チ前兆至テ短ク大概寒戰シテ後病候ヲ頓發ス
- (五) 顔面潮紅眼目赤色ヲ呈ス
- (六) 病初ヨリ臍語及精神痲鈍症ヲ發ス
- (七) 發疹ノ色暗紅ニシテ全身ニ布滿ス
- (八) 體力大ニ虛脱ス
- (九) 腹部ノ發疹ナシ大抵便秘ス
- (十) 肺充血及肺炎ヲ併發ス
- (十一) 治癒ニ赴ク者ハ病候頓ニ減退シ臍症モ亦速ニ輕快ス
- (十二) 本病ノ經過三週ヲ出ツルハ稀ナリ
- (十三) 初週ノ終ニ死スル者少ナカラス多クハ二週以前ニ斃ル
- (十四) 死體剖觀特異ノ微ナシ血液暗色ニシテ流動シ心肉軟化ス但腸ニ病患ノ微ナシ

- (三) 此病ニ罹ル者ハ通常十八年ヨリ三十五年ニ至ルノ間ヲ多シトス
- (四) 發病ニ先チ前兆アルコト數日間ニシテ且病候ノ増進モ亦緩徐ナリ
- (五) 面貌初メハ赤色ナレトモ後ニハ忽チ蒼白トナリ且赤目微著シカラス
- (六) 臍症漸次ニ發シ來ル
- (七) 發疹淡色ニシテ通常四肢ニ及ボスコトナシ
- (八) 身體大ニ羸瘦ス
- (九) 腹部鼓脹シ或ハ下利シ屢下血ス
- (十) 氣管支炎及肋膜炎ヲ合併ス
- (十一) 治ニ赴ク者ト雖モ諸症徐ニ退消ス
- (十二) 輕過必ス三週ヲ費シ或ハ四週ヲ過クル者アリ
- (十三) 二週以前ニ死スル者ハ稀ニシテ通常三週乃至三週ノ後ニ斃ル
- (十四) 腸ノ集腺腫起シ或ハ潰爛シ腸間膜腺モ亦腫脹シ脾臟軟腫ス

上文記スルカ如ク此二病ノ診候自ラ區別アリト雖モ亦其二症候交互錯雜シテ病初發疹室扶私ノ狀ヲナシ末期ニ及ンテ腸室扶私ノ經過ヲ取ル者又發疹モ初メニ暗紅色ノ者ヲ生シ後ニ淡色ノ者ヲ發シ來ルコトアリ又或ハ腸室扶私ノ患者便秘シ發疹室扶私ノ患者下利スル者アルカ如キ實ニ彼此ノ辨識至難ナルモノ亦往々無キニ非ストス更ニ明治十二年以來刊行スル衛生局年報ニハ年々發疹室扶私患者及死者ヲ或ハ發

大正三年度發疹室扶私流行誌

生月別ニ或ハ府縣別ニ區分シ詳細ナル統計ヲ掲ケタルコト疾ク人ノ識ル所ナリ今明治十二年ヨリ大正二年ニ至ル三十五ケ年間ノ統計ヲ綜合表示スレハ

第一表

至明治十二年 自大正二年 發疹室扶私患者及死亡者府縣別表

府道縣及	明治十二年	十三年	十四年	十五年	十六年	十七年	十八年	十九年	二十年	二十一年	二十二年	二十三年	二十四年	二十五年	二十六年	二十七年	二十八年	二十九年
北海道	一六九	二七九	三五五	三三六	三二六	二八二	二七九	二八六	二八六	二八六	二八六	二八六	二八六	二八六	二八六	二八六	二八六	二八六
東 京	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二
大 阪	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二
神 奈 川	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二
兵 庫	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二
長 崎	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二
新 潟	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二
埼 玉	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二
群 馬	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二

千 葉	茨 城	栃 木	奈 良	三 重	愛 知	靜 岡	山 梨	滋 賀	岐 阜	長 野	宮 城	福 島	岩 手
一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇

香川	德島	和歌山	山口	廣島	岡山	鳥取	島根	富山	石川	福井	秋田	山形	青森
			二七							一六		六九	八四
			九七	六七	二二		五四			八三		四七	二
			六八	三四	一三		二六			六七		五三	四
										五九	三七		二五
										一一	三四		二二
										二二	一一	四二	二二
										一一	三四		一一
										一一	三四		一一
										一一	三四		一一
										一一	三四		一一
										一一	三四		一一
										一一	三四		一一
										一一	三四		一一
										一一	三四		一一
										一一	三四		一一
										一一	三四		一一
										一一	三四		一一
										一一	三四		一一
										一一	三四		一一
										一一	三四		一一

大正三年度發疹室扶私流行誌

愛媛	高知	福岡	大分	佐賀	熊本	宮崎	鹿兒島	沖繩	合計	患者死者百者
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五
六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六
七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七
八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八
九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九
一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
一二	一二	一二	一二	一二	一二	一二	一二	一二	一二	一二
一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三
一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五
一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六
一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七
一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八
一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九
二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一
二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
二三	二三	二三	二三	二三	二三	二三	二三	二三	二三	二三
二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四
二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五
二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六
二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七
二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八
二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九
三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇

第一〇 自治十二年 發疹室扶私患者及死亡者表

(續)

第三 本邦ニ於ケル既往ノ流行

府道 廳縣及	北海 道	東 京	大 阪	神 奈 川	兵 庫	長 崎	新 潟	埼 玉	群 馬	千 葉	茨 城	栃 木
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
明治 三十年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 三十一年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 三十二年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 三十三年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 三十四年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 三十五年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 三十六年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 三十七年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 三十八年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 三十九年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 四十年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 四十一年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 四十二年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 四十三年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 四十四年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 大正元年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
大正 二年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

秋 田	山 形	青 森	岩 手	福 島	宮 城	長 野	岐 阜	滋 賀	山 梨	靜 岡	愛 知	三 重	奈 良
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
明治 三十年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 三十一年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 三十二年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 三十三年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 三十四年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 三十五年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 三十六年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 三十七年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 三十八年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 三十九年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 四十年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 四十一年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 四十二年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 四十三年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 四十四年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
同 大正元年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
大正 二年	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

第三 本邦ニ於ケル既往ノ流行

福	高	愛	香	德	和	山	廣	岡	島	島	富	石	福
岡	知	媛	川	島	山	口	島	山	根	取	山	川	井
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

第二表 發疹室扶私患者每五年間表

年 別		患者數	死者數	百分比	一 夕 年 平均	
至	自				患者數	死者數
至自	至自					
同明	同明					
治	治					
二十	十六	一七、六〇四	一、六一〇	二五・五三	一、二六一	三三二
七年	二年	三、〇四二			三、五二二	
年	年				六〇八	

第三 本邦ニ於ケル既往ノ流行

第三 本邦ニ於ケル既往ノ流行

年次	同二十一年	同二十二年	同二十三年	同二十四年	同二十五年	同二十六年	同二十七年	同二十八年	同二十九年	同三十年	同三十一	同三十二年	同三十三年	同三十四年	同三十五年	同三十六年	同三十七年	同三十八年	同三十九年	同四十年	同四十一年	同四十二年	
一月	三	二	二	二	一	二	三	八	二	三													
二月			一	一	九	三	八	四	六	二	八												
三月	三	八	三	七	三	八	五	二	〇	七	三	八											
四月	七	五	三	四	二	四	三	九	一	二	三	二	〇	三	四	三	七	五					
五月	七	四	三	二	三	三	二	六	四	三	三	七	〇	二	九	六	三	二	八	三	七	四	
六月	四	二	二	三	四	三	二	七	一	〇	八	七	五	四	四	四	三	三	二	〇	九	一	
七月	九	五	六	五	四	三	二	九	八	七	六	五	四	三	二	一	〇	九	八	七	六	五	
八月	三	八	七	七	三	三	二	七	五	五	三	二	二	一	八	四	九	九	二	六			
九月	六	二	二	一	六	二	三	三	二	一	八	四	九	九	二	六							
十月	五	五	二	八	五	二	八	五	五														
十一月	一	一																					
十二月	四	三	四	四	三	四																	
合計	二五二	一九四	二八一	二二八	一三九	一三八	二二八	一八一	一九九	一三九	一八六	二〇六	二七五	四二七	五一〇	二二七	三〇二	三〇八	二五八	三三八	四二二	三三三	

第三表

發疹室扶私發生月別表

年次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	合計	備考
明治十二年	一												一、三三九	外不明
同十三年	一、六八	一、五五	一、六七	二〇六	一九六	二〇〇	二七八	二九六	一九六	一九六	二二六	一、四一	一、五五一	外不明
同十四年	一、二八	一、一四	一、五九	二〇六	二〇二	二〇二	二六五	二四一	一、五〇	一、九〇	三三六	二、〇〇	一、三三九	外不明
同十五年	一、八二	一、二八	一、六八	二〇六	二〇二	二〇二	二六五	二四一	一、五〇	一、九〇	三三六	二、〇〇	一、三三九	外不明
同十六年	一、八二	一、二八	一、六八	二〇六	二〇二	二〇二	二六五	二四一	一、五〇	一、九〇	三三六	二、〇〇	一、三三九	外不明
同十七年	一、八二	一、二八	一、六八	二〇六	二〇二	二〇二	二六五	二四一	一、五〇	一、九〇	三三六	二、〇〇	一、三三九	外不明
同十八年	一、八二	一、二八	一、六八	二〇六	二〇二	二〇二	二六五	二四一	一、五〇	一、九〇	三三六	二、〇〇	一、三三九	外不明
同十九年	一、八二	一、二八	一、六八	二〇六	二〇二	二〇二	二六五	二四一	一、五〇	一、九〇	三三六	二、〇〇	一、三三九	外不明
同二十年	一、八二	一、二八	一、六八	二〇六	二〇二	二〇二	二六五	二四一	一、五〇	一、九〇	三三六	二、〇〇	一、三三九	外不明
合計	一、三三九	一、五五一	一、六七一	二〇六一	二〇二	二〇二	二六五	二四一	一、五〇	一、九〇	三三六	二、〇〇	一、三三九	外不明

大正三年度發疹室扶私流行諸

至自	至自	至自	至自	至自	至自
大明正治二十年	同治二十二年	同治二十三年	同治二十四年	同治二十五年	同治二十六年
一、一二	二、二五四	一、七九	五、一六	四、七六	二、一〇
八三・三三	一、七・三二	二、二・九一	二、八・六八	二、一・一一	四、五・一一
二	一〇	三六	一〇三	九五	二〇

同四十二年	同四十三年	同四十四年	同四十五年	大正元年	同二年
1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30
31	32	33	34	35	36
37	38	39	40	41	42
43	44	45	46	47	48
49	50	51	52	53	54
55	56	57	58	59	60
61	62	63	64	65	66
67	68	69	70	71	72
73	74	75	76	77	78
79	80	81	82	83	84
85	86	87	88	89	90
91	92	93	94	95	96
97	98	99	100	101	102
103	104	105	106	107	108
109	110	111	112	113	114
115	116	117	118	119	120
121	122	123	124	125	126
127	128	129	130	131	132
133	134	135	136	137	138
139	140	141	142	143	144
145	146	147	148	149	150
151	152	153	154	155	156
157	158	159	160	161	162
163	164	165	166	167	168
169	170	171	172	173	174
175	176	177	178	179	180
181	182	183	184	185	186
187	188	189	190	191	192
193	194	195	196	197	198
199	200	201	202	203	204
205	206	207	208	209	210
211	212	213	214	215	216
217	218	219	220	221	222
223	224	225	226	227	228
229	230	231	232	233	234
235	236	237	238	239	240
241	242	243	244	245	246
247	248	249	250	251	252
253	254	255	256	257	258
259	260	261	262	263	264
265	266	267	268	269	270
271	272	273	274	275	276
277	278	279	280	281	282
283	284	285	286	287	288
289	290	291	292	293	294
295	296	297	298	299	300

備考 本表中明治十二年乃至十四年ノ患者數ト第一表府縣別表ノ同年間ノ患者數ト一致セザル第一表ハ前年七月一日ヨリ翌年六月三十日マテノ患者ヲハ計算シタル等ノ關係ニ依ル

即チ既往三十五ケ年間ノ患者數ハ實ニ二萬六千九百二十一人、死者五千三百三十六人、此ノ死亡百分比例一九・八二ニシテ一ケ年平均患者七百六十八人、死者百五十三人ヲ出シタル割合ナリ。就中明治十九年ノ如キハ一ケ年ノ患者實ニ八千二百二十五人、死者千五百七十七人ヲ算シ現住人口一萬ニ對シ患者二・一四ヲ出シタル割合ナリ

而已ナラス明治十四年ニハ獨リ市ケ谷監獄ノ囚人間ニ流行シタルノミナラス汎ク蔓延ノ兆アリタルモノ、如ク同年六月五日深川本所兩區ノ開業醫及衛生事務ノ責任者等江東小學校ニ會合シ中央衛生會委員東京大學醫學部醫學教授三宅秀氏ヲ招聘シ發疹室扶私ノ診斷法及豫防法ニ關スル講筵會ヲ開キシニ傳ヘ聞キ

テ遠ク他ノ地方ヨリ來會スル者頗ル多ク約三百人ニ達シタルト云フ當時千葉縣人押田俊三ハ該講演ヲ手記シ發疹室扶私診斷法及衛生講場筆記抄ト命名シ同年七月之レヲ上梓發行セリ

(衛生法講場紀事抄)

押田俊三記

明治十四年吾カ東京府下發疹室扶私流行ス是ニ於テ深川本所兩區地方ノ開業醫及衛生事務ノ責任アル者相與ニ議リ六月五日ヲ以テ江東小學校ニ會シ本病ニ關スル衛生法ヲ講究ス是ノ日中央衛生會委員會東京大學醫學部醫學教授三宅秀先生本會ノ請ニ應シ場ニ臨メリ因リテ左ノ一篇ヲ獲タリ

○三宅秀先生演述發疹室扶私豫防ノ指導

夫レ醫師ト衛生吏トハ固ニ其職ヲ異ニセサル者トス何トナレハ甲ハ一患者アレハ直ニ之ヲ治療シ乙ハ遍ク公衆ノ病ヲ未發ニ救フヲ以テナリ然リ而シテ今一地方ニ一ノ傳染病ヲ患フル者アルトキハ甲ハ必ス之ヲ乙ニ報スヘク乙ハ其報ヲ得テ先ツ病ノ他人ニ傳播センコトヲ豫防シ既ニシテ若シ一地方ニ蔓延スルニ至ラハ則チ其病毒ヲ驅除スルヲ勉ムヘシ故ニ甲ノ乙ニ報スルコト愈々早ケレハ乙ノ豫防法ヲ實施スルコト隨ヒテ亦愈々早ク且ツ完全ナルヲ獲ヘシ試ニ一地方ヲ以テ一患者ノ身體ト看做ストキハ其初ニ一ノ病者ヲ出スハ恰モ一指端ニ脱疽ヲ生シタルガ如ク早ク之ニ診斷法ヲ施スコト有ラハ則チ全身ヲ侵スノ患ナカルヘシ是レ其一傳染病者アルニ當リテ速ニ完全ナル豫防法ヲ施シ以テ其蔓延ヲ絶ツヘキコトノ喋々ヲ要セサル所以ナリ

第三 本邦ニ於ケル既往ノ流行

凡ソ流行性ノ傳染病ハ一タヒ之ヲ感受スルトキハ大概救療ノ法ナクシテ只其自然經過ヲ待ツヘキ者ナリ故ニ衛生吏ノ職ヲ勉メテ病ノ傳播ヲ防遏スルトキハ其効果ヤ醫治ノ右ニ出ツヘシ然レトモ豫防ニ從事スルカ爲ニハ必ス醫師ヲ以テ緊要ナリトス何トナレハ醫ハ善ク各病ノ性ヲ審ニシ傳染病ト認ムル者アルトキハ速ニ之ヲ衛生吏ニ報導シ且ツ其病者ヲ治療シ避病院アルトキハ其院ノ治療ヲ擔任シ又豫防ノ方法ヲ設定スルヲ以テ己ノ義務ト爲セハナリ是ニ於テ其設定シタル豫防ノ方法ヲ實施シ家屋、船舶、道路等ノ清潔法ヲ勉メ患者隔離法、汚穢物消毒法等ヲ行フハ以テ衛生吏ノ義務ト爲ス然シテ尙他製造所長、學校長等ノ如キ衆人ノ群集スル處ニ主管タル者ハ傳染病流行ノ時ニ當リテ若シ所管内ニ發病者アレハ則速ニ之カ報告ヲ爲シ且ツ適當ノ豫防法ヲ施スヲ以テ其義務ト爲スヘシ

抑々傳染病ノ豫防法ハ公衆衛生上ノ最緊要ナル者ナリ而シテ此法ノ實ニ行ハルハ專ラ衛生吏員ト開業醫トノ協戮ニ在ルヲ以テ復タ他人ノ之ヲ講究スルヲ要セスシテ可ナルカ如シト雖其施行ヲ受クル所ノ者ハ則公衆ナルヲ以テ公衆モ亦略々之ヲ曉ラサレハ必ス支吾梗滯シテ之カ舉ヲ達セシムルコト能ハサルコト有ラン故ニ公衆ノ之ニ與リ聞クハ亦大ニ益ヲ致ス者トス。

然リト雖モ創メテ衛生法ヲ公衆ノ間ニ説クハ尙ホ宗教ヲ布クノ初ニ於ケルカコトク恐ラクハ人々ヲシテ容易ニ感化セシムルコト能ハス況ヤ豫防法ニ於ケルカ如キハ或ハ反テ嘲諷ヲ受クルヲ免レサルコト有ラン然レトモ斯法ノ公衆ニ必須ナル固ヨリ論ナキハ吾カ明治政府ノ夙ク之ヲ設ケラレタルヲ視テ乃チ其實ニ缺クヘカラサル者タルコトヲ知ルヘク且ツ公衆ト雖一旦自用スル所アルニ於テハ心ス此法ノ復タ無カ

ル可カラサルヲ悟ルニ至ラン

凡ソ衛生法ハ其範圍甚々廣クシテ百事ヲ包容シ百物ヲ網羅シ事々物々皆此中ニ入ラサルコト無シ故ニ傳染病豫防ノ一事ニ於テモ亦人ノ思想外ニ在ル事物ノ之ト關涉ヲ有セルコト有リ以下説ク所ニ據リテ其一端ヲ知ルヘシ

傳染病ハ風土ニ隨ヒテ小異同アリ例之歐羅巴ニ在ル者ト亞細亞ニ在ル者ト同シカラス其故ハ蓋シ日常ノ飲食物及ヒ生活ノ狀態等其習俗ヲ異ニスルヲ以テナリ又推シテ考フルニ數百年前ニ在リシ所ノ者ト今日見ル所ノ者ト亦差異アラシク然ラハ則古昔ヨリ傳フル書ニ何等切要ナル救濟ノ方法ヲ載セタルコト有ルモ風土ノ異ナルト星霜ノ移ルトニ隨ヒ遂ニ弁髦ニ屬セル者亦多カラシ

今此ニ説カントスル所ノ豫防法ハ一般ノ傳染病ニ在ル者ニ非スシテ唯熱病ノ一即チ發疹室扶斯ニ關セル者ナリ夫レ發疹室扶斯ハ屬室扶斯ト共ニ俗間疫病ヲ以テ稱セラルル者ニシテ曾テ聞ク從前疫病ノ行ルハニ當リテハ一家閭鄰舉ケテ斃ルハニ至ルコト有リト然レトモ余生レテ而還未々之アララフ故ニ親シク之ヲ觀ルニ由ナシ且ツ昔ノ疫病ナル者果シテ猶ホ今ノ疫病ニ同シキヤ否ヤ亦以テ徵スヘカラス獨リ歐洲ノ書ニ據リテ求ムルニ曾テ疫病ト稱スル者アレトモ其病自ラ異ナリ且ツ此病ハ輒近已ニ衰ヘ腸室扶斯及ヒ發疹室扶斯之ニ代リテ盛ニ行ル此ヲ以テ之ヲ推スニ本邦ニ於テモ或ハ亦然ランカ吾カ政府明治十三年七月九日布告傳染病豫防規則中疫病(歐洲ノ疫病下同シ)ノ名稱ナキハ則疫病ノ今日ニ緩ナルヲ以テ姑ク之ヲ置キ而シテ他ノ急ナル所ノ六病ヲ舉ケタルナラシ

傳染病ヲ豫防スルニハ其各病ノ性狀ヲ明悉シテ而後之ニ從事スルヲ至良トス故ニ

第三 本邦ニ於ケル既往ノ流行

今先ツ此ニ要スル所ノ發疹瘰癧ノ性状ヲ詳説セシムルニ由リテ善ク其性状ヲ認識シ而シテ之ニ適用スヘキ所ノ豫防法ヲ實施セハ庶クハ公衆ヲシテ束手慘毒ニ侵虐セラルルノ歎ヲ免レシムルニ至ラン

發疹瘰癧扶斯ハ本邦曾テ無カリシニ今果シテ之アリヤ曰ク實ニ有リ現ニ東京府下ニ患者アルヲ視テ知ルヘシ其始メテ本邦ニ發生セシハ自發ナリヤ曰ク否海外ヨリ流傳セシナルヘシ故ニ往昔ハ無カリシニ今ハ之アリ夫レ本病發生ノ起原ハ其年代ヲ詳ニスルコト能ハスト雖歐洲ニ在リテ一千五百零一年ニ創メテ之ヲ發見シ凡ソ二十年間以太利國ニ於テ盛ニ流行シ其勢頗ル猖獗ヲ致セリ

凡ソ傳染病ノ始メテ一地方ニ入ルヤ其侵襲ヲ逞クスルコト必ス甚シキヲ常トス故ニ彼ノ麻疹ノ始メテ澳太利ニ流行セシ此發疹瘰癧扶斯ノ始メテ以太利ニ流行セシ皆猖獗ヲ極メタリ而シテ本病ノ一タヒ以太利地方ニ著クヤ類年根ヲ其上ニ絶タス途ニ佛國巴里ニ流傳シ尋テ匈牙利ニ流行セリ

一千七百年代ノ末ヨリ八百年代ノ初ニ至ル際ハ干戈歐洲ニ絶タスシテ本病其間ニ流行シ干戈息ムニ當リテ本病モ亦隨ヒテ止ミ歐洲大陸ニハ跡ヲ收ムト雖只獨リ英國ニ存留ス爾後一千八百四十七年一千八百五十年及ヒ一千八百六十年ニ於テ再ヒ歐洲大陸ニ流行セリ然レトモ愛爾蘭ニ在リテ其流行スル甚シクシテ一千七百九十七年ヨリ八百零八年ニ至リ一千八百十五年一千八百十七年ヨリ十九年ニ至リ一千八百二十一年及ヒ二十二年一千八百二十五年ヨリ二十七年ニ至リ一千八百三十四年ヨリ三十六年ニ至リ一千八百四十二年及ヒ四十四年一千八百四十六年ヨリ四十八年ニ至ルノ累次ニ及ヒ實ニ本病ノ淵源ヲ爲ス就中最モ慘害ヲ極メタルハ一千八百十七年ヨ

リ十九年ニ至ル流行ニシテ當時人口百萬中病ニ罹ル者八十萬ニシテ死亡者六萬五千人アリ蓋シ此死亡者ハ痲病或ハ飢餓ノ爲ニ斃レシ者亦之アリト雖大抵皆發疹瘰癧扶斯ナリ而メ愛爾蘭貧民ノ米國ニ移ルヤ之ヲ米國ニ傳ヘ英領地ニ移ルヤ加拿太ニ於テ亦此病ヲ發シタリ

本病ノ所在地ヲ究ムルニ歐羅巴中ニ在リテハ魯西亞、普魯士、波蘭、瑞典、丁抹、伯耳、荷蘭等ニ於テ時々大小ノ流行ヲ爲シ以太利ニハ地方病ト爲リテ常ニ巢窟ヲ其地ニ占メ時々出テ佛蘭西、瑞西ヲ侵襲ス土耳其格ニハ中古以降波及シ殊ニクリミアノ戰アリテ以來大流行ヲ致スニ至レリ其他亞非利加ニ在リテハ埃及ニ流行シ東洋ニ在リテハ英領印度ニ於テ地方病ト爲レリ二三年前新聞紙上ニ支那ノ北部滿洲地方及ヒ魯西亞ニ於テ大饑饉後疫病ノ行ルルコトヲ載セタルヲ見テ大ニ恐懼ノ心ヲ生セシコト有リシカ當時幸ニ我カ邦ニ波及セザリシ今ニ及ヒテ此病アルニ至リシハ何ノ地方ヨリ流傳シ來ル者ナルカ將タ流傳ニ係ルニ非スシテ自發セシ者ナルカ之ヲ確知スルニ由ナシ本病ヲ發生スルノ原因ハ傳染ト自發トノ二アリト曰フト雖衛生上豫防ニ從事スルニハ必ス自發スル所ノ因アリト爲シテ之ニ注目スルヲ其生トス乃チ其發生ノ理ハ狹隘ノ室ニ衆人雜居スレハ其室内ノ空氣ヲ不潔ニシ而シテ人之ヲ呼吸スルヲ以テ之カ因ト爲リ又衣服ノ不潔食物ノ不潔亦之カ因ト爲ル病者ノ汚穢ナル衣服ヨリ傳染ヲ致スハ固ヨリ論ナシト雖特ニ是ノミナラハ凡ソ汚垢ノ衣服ヲ被ル者ハ皆能ク病毒ヲ發生セシムルニ足ル故ニ囚徒ノ食糧ニシテ衣服ナル及ヒ城兵ノ或ハ糧食ニ乏シク且ツ隘處ニ密居セルハ最モ此病ニ罹リ易シ船艦中ニ發病スルカ如キモ亦其雜居粗食垢衣等ノ諸因ヲ兼メタル者ニシテ其發スルヤ一船盡ク死亡ヲ致スニ至ルコト往々之アリ

受爾蘭ノ曾テ貧民ヲ移スニ當リ其載スル所ノ船舶ニ本病ヲ發シテ甚タ慘害ヲ極メシカ如キ以テ視ルヘシ

本病ハ此ノ知ク發生スルヲ以テ軍陣疫、船舶疫、囚獄疫及ヒ飢饉疫ノ別名アリ今其名ニ基ツキ之カ例ヲ舉ケテ示サント欲スルニ本邦ノ未タ曾テ有ラサル所ナルヲ以テ遠ク之ヲ歐洲ニ取リ左ニ説述ス

〔軍陣疫〕一千七百九十九年佛軍以國ヨリ歸ルノ際本病ヲ發シ其經過ノ途中舍次スル所ノ十五村落ニ此病ヲ留メ終ニ國ニ到ルノ後全軍ノ兵相續キテ病ミシト雖獨リ衛生法ノ行ル、部下ニ在リテハ之ヲ患フル者無カリシト云フ又一千八百五十四年ヨリ五十五年ニ至ルクリミヤノ戰ニ於テ前年英ノ兵營ニ行レ次年ハ佛ノ兵營ニ行レタリ乃チ佛兵十二萬中本病ニ罹ル者一萬二千ニシテ六十人ノ死亡者アリ然レトモ英軍ニハ此年殆ント病ム者ナカリシハ是レ前年ノ營中衛生法不全ナリシニ懲リ低地ヲ避ケテ營ヲ高阜ニ移シ而シテ勉メテ空氣ノ通暢ヲ充分ナラシメタルニ由レリ之ニ反シテ佛軍ハ天幕中ニ多數ノ兵ヲ群居セシメタルヲ以テ此流行ニ罹リシナリ故ニ當時佛軍ノ軍醫其實驗スル所ニ據リ言テ曰ク發疹瘰癧ハ人工ヲ以テ造出シ又人工ヲ以テ拒絶スルヲ得ヘキ所ノ病ナリト凡ソ兵營ニ本病一タヒ行ハル、トキハ獨リ營中ニ止ラスシテ其地ノ居民ニ傳フルコト亦疑ヲ容レサルハ則上ニ述ヘタル佛軍ノ例ヲ視テ之ヲ知ルヘシ

〔船舶疫〕一千八百六十一年二月英國リバプール港ニ於テ埃及ヨリ來レル船アリ其船ヲ檢スルニ甚タ不潔ナレトモ發疹瘰癧扶斯ヲ病メル者ハ一人ヲモ見ス只病病及ヒ肺病ニ罹レル者二三アリ故ヲ以テ敢ヘテ意ニ介セサリシカ市中居民ノ其船ニ交通セシ者

本病ニ罹リ之カ爲ニ死亡セリ又船中ノ者一人浴舖ニ來リシニ其舖ノ傭夫本病ヲ發シタリ次テ船中ノ某病者一人ヲ病院ニ移シタルニ此ヨリ其院中ニ本病ヲ發生セシ事有リ其他一軍艦ノ本病ノ曾テ流行セサル地方ヨリ開航シ數週間ヲ經ルノ後偶然本病ヲ發生セシコト有リ是ニ由リテ之ヲ見レハ不潔之カ胚種ト爲リテ其曾テ病毒ナキ處ニ新生スルコト自チ明ナリ今チ距ルコト凡ソ百年前ノ往時ハ船舶ニ衛生法ノ設ナク軍艦中ニ數々本病ヲ發スルヲ以テ最モ怖ルヘキノ事ト爲セリ一千七百七十九年ニハ乘組人八人ニ死亡者一人ノ比例ナリシカ後一千八百三十年ニ至リ衛生法ヲ設ケテ乘組ノ制限ヲ立テ空氣ノ通暢法ヲ改良セシ爾來其數減シテ七十二人ニ一人ノ比例ト爲ルニ至レリ因リテ考フルニ本邦ニ於テモ衆多ノ力役者ヲ航送スルカ如キ船舶ニ在リテハ亦大ニ注意ヲ加フヘキ者トス

〔囚獄疫〕一千八百七十七年英國ノ囚獄未タ衛生法ノ設アラズ其構造甚タ狹隘ニシテ不潔ヲ極メ且少當時窓稅ノ制アルヲ以テ之ヲ免レンカ爲ニ窓扉ヲ設ケルコト少シ此ヲ以テ動モスレハ獄中ニ發疹瘰癧扶斯ヲ發生スルニ至レリ夫レ囚徒ノ如キハ固ヨリ其己ニ良民ト齒スルヲ許サ、ル者ナルヲ以テ之ヲ處スル亦厚キニ過キシム可カラスト雖若シ衛生法ヲ省ルコト無クシテ一朝此病ヲ囚獄ニ發セシムルニ及ヒテハ則此ヨリ獄丁等ニ傳ヘ或ハ暗ニ病毒ヲ帶ヘル囚徒ヲ牽キテ法庭ニ上ラシムルコト有ルヤ法官若クハ證據人之ヲ感染ヲ被ルコト無キヲ保シ難ク殊ニ此等ノ人ハ皆市街ニ住セル者ナルヲ以テ途ニ病毒ヲ良民ノ間ニ蔓延セシムルノ媒介ヲ爲スコト亦疑ヲ容レス又囚人ノ放免ニ遇ヒ其故居ニ復スルニ當リテハ最モ甚シキ傳播ノ媒介タルコト固ヨリ論ナシトス此ニ由リテ竊ニ想フニ今本邦ノ囚人ヲ外役ニ就カシムルカ如キハ其常ニ市

街ニ往來シ或ハ村落ニ舍宿スルヲ以テ病毒ノ胚種ヲ運搬スルノ虞ナキニ非サルヘシ又一例ハ蘇格蘭ノダブリンニ因アリ其囚獄徒ヲ澳太利ニ流スニ當リ之ヲ航送スル船ノ解纜ニ先キ必ス發疹瘰癧ノ市中ニ流行スルコト有ルヲ例トス是レ蓋シ囚徒十二月乃至二十月間獄舎ニ群居充満スルヲ以テ此病ヲ發生スルナリ又一千八百五十四年佛國ストラスブルグニ在ル囚獄ニ本病ヲ發生シタリ是レ其囚徒ノ俄ニ増加シテ平素ノ倍數ニ上リシニ由リ忽チ之ヲ發生シタルナリ抑々囚獄ハ恰モ病毒ヲ殖養スル苗場ノ如ク最モ善ク其ヲシテ發育セシムルニ適スルノ處ナリ況ヤ囚徒ハ各地方ヨリ來リ聚ル者ナルヲ以テ其何ノ地ヨリ病毒ヲ運搬シ來ルコト有ルカ亦知ルヘカラス

(飢饉疫)凶年ニ流行スルコト有ルヲ以テ此名稱アリ然レトモ本病ハ必スシモ凶年ニシテ始メテ之ヲ發スルニ非ス平時ト雖常食ヲ缺ク者多ケレハ則亦流行ヲ致スヘシ故ニ此名稱ハ甚々妥當ナラサルノミナラス却テ人ヲシテ凶年ニ非サルノ外ハ流行ヲ爲サハル者ト爲スノ迷ヲ起サシムルコト有リ宜シク其名ニ拘泥スルコト勿カルヘシ又本邦ノ往ニ聘セシ獨乙國ノ陸軍軍醫正諺爾列兒氏ハ曾テ本國ニ在リテ其政府ノ持命ヲ受ケ發疹瘰癧私ノ豫防法ヲ調査セシ人ナルカ當時其事ニ關スル著書アリ載セテ曰ク余カ見ル所ニ據レハ發疹瘰癧私ニ罹ルハ其體格強壯ニメ敢ヘテ滋養不足ニ非サル者頗ル多シト是ニ由リテ之ヲ觀レハ其因凶獄ニ在ルニ非スシテ多クハ衆人羣居ニ係ル者トス又愛爾蘭ニ流行スルカ如キハ其因多クハ貧困ニ歸スル者ニシテ人貧困ナルトキハ其住居狹隘不潔ナラサルコト無ク日常取ル所ノ食料モ亦粗惡ナリ加フルニ物價騰貴ノ時ヲ以テセハ則愈々之ヲ避クルノ路ナカルヘシ何トナレハ人生日常必須ノ物品中衣服ノ如キハ粗惡ナルモ以テ能ク寒暑ヲ凌クニ適スレハ則足ルヘシト雖食物

及ヒ住居ハ然ラシテ食物不潔ナレハ則以テ滋養ヲ資ルコト能ハス住居狹隘且チ不潔ナルハ則以テ健康ヲ保ツコト能ハサルコト固ヨリ論ナケレハナリ今此理ヲ推シテ考フルトキハ本病ノ必スシモ凶年ニシテ行ルハニ非サル者タルコト亦以テ知ルヲ得ヘシ

茲ニ吾カ東京府下ニ於テ發疹瘰癧私流行スルノ因ヲ考フルニ恐ラクハ府下近時數々大火ニ罹リシニ由ルカ今試ニ之ヲ説明セン凡ソ家屋ノ大小ハ一人ニ廣サ一坪ニシテ高サ七尺ナルヲ要シ其氣容ハ二百五十立方尺ナルヘキ者トス然ルニ貧人ノ居ノ如キハ甚々狹隘ニシテ一坪ニ二人半ヲ容ル、ニ至リ其氣容殆ト百立方尺ニ過キス其密居スル恰牢舎ニ異ナルコト無シ而シテ終日勞作シ不適ノ衣食ニ生活スルヤ實ニ本病ノ如キ傳染病ニ罹ラサルヲ得ス故ニ衛生法ニ於テハ地方一郡區ノ人口幾許アリテ家屋ノ坪數幾許アルカヲ調査スルヲ以テ一ノ急務ト爲ス然ルニ今府下ノ如キハ人口夥多戸數稠密ニシテ一旦大火ニ遇ヒ其家屋ヲ失フモ各人去テ他國ニ之クニ非ス猶ホ地方ニ在リテ他人ノ家ニ合居シ或ハ裡家ニ僑寓シテ雜聚密群スル猶ホ貧人ノ居ヲ同シ加之物價時ニ騰貴ナルヲ以テ或ハ充分ノ滋養ヲ獲サル者亦之アラン乃チ此ニ由リテ本病ヲ發スルノ因ヲ醸生セシム亦知ルヘカラス然レトモ此言ハ畢竟一ノ想像ニ歸スル所ニシテ更ニ他ノ一方ニ求メ最初熱病ノ石川監獄ニ發シテ囚徒ノ間ニ蔓延シ逐ニ獄丁獄醫等ニ傳染シタルノ事アルヲ視レハ府下發病ノ因モ亦此ニ關スルニ似タリ要スルニ到底此二因ノ外ニ出テサルヘシ反復シテ言ハンニ屋舎ノ廣狹ト居人ノ多寡トハ此病ノ發因ニ大關係アル者ニシテ若シ家狹ク人多ク加フルニ身體外圍ノ不潔ヲ以テスレハ則必ス病毒ヲ醸生スヘキコト何ソ音牢舎ノミナランヤ

更ニ進ミテ本病ノ傳染ヲ致ス景況ニ就テ言ハシ抑々本病ノ毒分ハ性甚タ頑固ニシテ容易ニ消滅セス其傳染ヲ受クルノ最モ甚シキハ則洗濯舖ニ在リ是レ蓋シ病者ニ汚レタル衣服、天幕等ニ觸接スルヲ以テナリ乃チ天幕ノ例ハ曾テ歐洲ニ於テ本病患者ノ使用セシ天幕ヲ補繕スルニ從事セシ者二十三人中十七人ニ傳染シ之カ爲ニ其命ヲ殞シ、コト有リ又本病ノ傳染スルハ壯年男子ノ力役者ニ多ク婦人及ヒ坐業者ニハ少ナシ然レトモ若シ病者ニ直接スルトキハ必ス老壯ヲ問ハズ貴賤ヲ論セス皆感染ス殊ニ醫師及ヒ看護人ハ最モ感染シ易キ者トス而シテ其直接病者ノ容易ニ識ル可キ者ハ人亦之ヲ避クルニ易カルヘシト雖不潔ノ空氣若クハ目視ル可カラサル他物ノ媒介ニ由リテ感染ヲ致スハ實ニ不測ノ間ニ在ルヲ以テ須ク最モ注意ヲ加フヘシ又醫師其他患者ノ家ニ交通セシ者ノ感染ノ媒介ヲ爲スコト有リ

本病ノ病者ハ氣狀ナルヲ以テ上行スルノ性ヲ有セリ故ニ樓屋ニ在リテ患者ヲ其上層ニ居ラシメハ下層ニハ傳フルコト無シト雖若シ之ニ反シテ下層ニ居ラシメハ則上層ニ傳フルコト甚シ避病院構造ノ平屋ニシテ上方ニ窓扉ヲ設ケルヲ善シトスルカ如キハ亦此カ爲ノ故ナリ又此氣狀毒ハ患者ノ身體及ヒ死屍ヨリ發シ衣服、臥具、家屋、船舶車輿及ヒ諸什具ニ附著シテ傳染ヲ致ス者トス之ヲ驅殺スル(即消毒法)ニハ石炭酸蒸氣及ヒ亞硫酸瓦斯ノ如キ氣狀ノ消毒藥ヲ要シ其有力ノ最ナル者ハ則攝氏ノ九十六度以上ナル熱ニ在リトス

又本病ノ病者ハ格別刺病者ノ如ク寒威ニ値ヒテ熄滅スルコト無ク反テ冬期ニ在リテ猖獗ヲ致ス者トス是レ蓋シ其家屋ヲ閉鎖スルニ由リテナリ故ニ彼ノ以太利及ヒ愛爾蘭ニ於ケルカ如キ病者一タヒ其土ニ著クノ後ハ一年ニシテ消熄セス二年或ハ三年

ヲ累ヌルノ久シキ大流行ヲ爲ス此ヲ以テ本病ヲ防クニハ專ラ其毒ヲシテ土地ニ根着セシメサルヲ勉ムヘシ

以上歴説スル所ニ據リテ發疹室扶斯ノ發生ノ原因ト傳染ノ景況トヲ知リ以テ其性狀ヲ悉スチ得ヘシ其性狀ヲ悉スノ後病者ノ實ニ怖ルヘキ者タルヲ曉リ豫防ノ必ス施行スヘキヲ識ラハ則能ク公衆ノ災厄ヲ救ヒ以テ其生命ヲ衛護スルヲ得ヘシ而シテ豫防成績ノ有無ハ一ニ衛生吏員ノ勉否ニ歸スル所ニシテ地方開業醫診斷ノ宜シキヲ得ルト否トハ亦之ト喫緊ノ關係ヲ有セル者トス是ヲ以テ余ハ頃日既ニ醫家ニ向ヒテ本病ノ診斷法ヲ講述シ以テ其義務ヲ全クセシメンコトヲ企圖シ今復タ此演述ヲ爲シテ更ニ衛生ノ事務ニ任スル者ノ義務ヲ盡サシメンコトヲ希望ス其豫防ノ方法ニ至リテハ則内務省(明治十三年九月十日達)傳染病豫防心得書ノ在ル有リ宜シク之ニ遵依スヘシ但先ツ清潔法攝生法ヲ力行シ患者アルニ當リテハ隔離法消毒法ヲ嚴施スルニ在リ

尙ホ押田俊三ハ該講義ハ公衆衛生上最モ肝要ナル事ニシテ醫師及衛生當事者ノミニ止メス弘ク女子幼童ニモ讀マシメントシ同年六月「發疹室扶斯豫防の訓」ト稱スル平易ナル單行本ヲ發行セル等當時一般開業醫並ニ衛生當事者等恐慌ノ狀以テ見ルヘク單ニ市ヶ谷監獄署内囚人間ノ病毒圈外ニ撒漏スルノ杞憂ニ基ケルモノトノミ考フヘカラサルナリ

(發疹室扶私豫防の訓)

押田俊三述

この頃發疹室扶私といふ惡しき傳染病の流行る兆あるにより吾輩有志の者どもが
第三 本邦ニ於ケル既往ノ流行

相議りて中央衛生會委員なる東京大學醫學部教授の三宅先生にその豫防に係りたる講義をして聽かせられよと請ひしにその請を許されければ過ぐる日講場を本所なる江東小學の内に開きたりこはもと深川區本所區の衛生の事に注意すべき義務あるものが共々集りて聞かんこそ本目的としたるに早くも他方の同じ志ざしなる人々がこれを聞き知り當日講場に登りて聽聞するもの凡三百人許なりき抑々此の講義は實に公衆の衛生に肝要なる事なれば講場にて留め置きたる筆記を刊り出して世に公やけにせんとは思へどその筆記はたさへば日報または報知の大新聞を殘らすよく分るほどに讀み得るものには分りもすべけれど讀賣または繪入の新聞を讀むがごとく誰にも分るにはあらぬなり因りて余は不圖老婆心を起して前の講義の主意に基づき發疹室扶私を豫防ぐに心得ざるべき事を探り集め女子幼童にも讀まるまで易く書き記して此の發疹室扶私豫防の訓といふ一の少なき冊子を作り出しぬ然れど訓といひ殊に公衆の衛生に肝要なる方法を説ける者なれば自分のみにて善しと定めず三宅先生の一閱を請ひ受けて後いよ版に上せ公衆に示すことしたり公衆若し此冊子によりて發疹室扶私の豫防法を知るとあらは余の老婆心も亦空ならざるべし發疹室扶私といふ病は西洋には昔よりありて度々大流行すれど日本にあるは近頃の事にて前かたにはこの病なかりしといへどもさくこの病は疫病といひ來りしもの、中の一種なれば昔よりの史書や年代記に随分たひく疫病の大流行せしことを書き載せてあるはその中では此の發疹室扶私ありしかも知れぬと考へらる備今年は何我國に此の病流行るの兆ありて已に東京や横濱にてはこれを煩ふもの數多あれば何時俄に大流行となりて世間の人々が格列刺よりも甚だしく惱まざる、かも知れぬな

可然ればわれら公衆の早くその豫防法に注意するは肝要なることにて愈く病毒が蔓延り大流行となりてからは防ぎ止むること容易に出來すこれを逃れやうとしてみ中々間に合はぬなりそれゆゑ政府にては豫て傳染病豫防規則を設けられてもありこの上追々流行ること、ならば必らず亦それの御世話もあるべけれど若しそれに引きかへ公衆が他人事のやうに思ひ居り各々にてよく意を注ぐることなければ遂に吾が日本國中の公衆の上にかなる大危難を受くるも測り難し因りて公衆はよくこれららの事を考へてさく油断せず専ら此の怖ろしき傳染病を防ぐことを心掛くべし今公衆の心得となきんが爲にその病の性状と豫防法とを次に述ぶ

病の性状

發疹室扶私は性の惡き熱病にて餘程烈しく人々に傳染るものなりその容體は最初に風引きたるか如き心地して一身疲倦く食氣なく嘔吐咳嗽など出で頭痛眩暈寒し四肢に疼痛ありそれより後大そう寒けして戦へること一度または度々ありて熱が急に劇しく出で目赤く涙を流し頭痛四肢關節の疼痛いよ強く四五日目になる赤き發疹が胃高から出來はじめて軀幹より四肢にまで蔓延りこの時熱は同様に劇しくて漸々精神が恍惚となり語言もあり身體ますます疲るゝなり大抵はかやうの容體なれどその中には輕きもあり重きもありて見た景況の少しは差ふものなり又ことよるゝ發疹の出來ぬものも稀にあるべし○此の如き容體のあるに於ては醫師も大抵は診て發疹室扶私と極め家内のものにもそれと知らすべけれど地方により醫師によりては傷寒とさ瘧疾とさしたり神經熱とさ腐敗熱とさ發斑熱とさ名をつけたりまたは熱病だの疫邪だの疫病だのといへどつまり發疹室扶私の容體あらば矢はり發疹室扶

私と心得て居るが宜し○この病は流行り出せば何地といふ差別なく流行りその病毒は人の大勢居る處や狭くて不潔き處や空氣の流通よくなき處に出來て人に著きそれより人から人に傳染り廣かり閉ち籠めたる室または船の中にては取り分け毒のいきほひが強くまた始めて流行る土地にては毎もろの病が烈しきものなりその毒を輸ぶ物は病人の口鼻より出づる呼氣または身體より出づる蒸氣などにて病人に近よるは勿論その毒を含める居室衣服または器具より感染るこれを感じては貴賤老若男女の別なく身體や衣服の不潔と食物の不潔と飢餓と身體の衰弱と度に過ぎたる勞作と夜行露臥などが皆その原因となるなり

豫防法

豫防法は前にいへる病毒の傳染かたを考へてそれを避くるなり第一各人の住家を平日よりも猶さら清潔にして室内によへ空氣を通はせ狭き處に大勢居ぬ様にし衣服を度々洗濯し又よく浴に入り不潔食物を禁じて滋養となる物を食ひ雨風に打たれたり夜行したり薄被で寝たりせずして風引かぬ様に用心し身體を強健にする様注意くべし而して發疹室扶私の病人ある土地の近傍へは勿論祭禮、劇場、寄席、講釋場、觀場などのやうな人の多く集まる處へは行かぬ様にし又不潔き旅店には宿らず不潔き人力車馬車には乗らぬを善しとす又乗合船に乗るには善く意を注ぐべし○此の病の傳染るを防ぐに學校、製作處をはじめ下宿屋、旅館、貸座敷、馬車、乗合船の宿、古衣商、質舖、夜具蚊帳衣服の損料貸、洗濯職などにては取り分け意を注ぐべきなり○餘義なく發疹室扶私の病人に立ちよるか病毒の著きたる衣服や器具に近づきし時は石鹼または醋を和ぜたる水(小盤一杯の水に醋五勺許)にてよく顔や手足を洗ふべしその外病人のある家

に往來し又は病毒を含むか疑ふ物に觸れし時も然するを良しとす○精々豫防法に心を用ひて居ても若し發疹室扶私かと思ふ病人出來たる時は別の一室一室限りなき家ならば一隅に臥させて先づ室内の者もなるたけ側近くよらぬ様にし早速にその診別のつく程の醫師を召びて診て貰ひいよく發疹室扶私であるならばその筋への届方は醫師に任せて指圖を受くべし借この病は烈しき傳染病にて側へ近よる者にはたちまち感染りて一家内のものが一時に枕を並べて臥る様な事が出來病人に肝腎なる手當看病が届かぬのみならず病毒も自然蔓延り易ければなるたけ早く此等の傳染病を療治する病院に入る様にすべし然すればその病院には醫師も詰め切つて居る病人も澤山ありて手當も厚く届けばなまじひに自宅で療治するよりも當人の爲になり又家内のものゝ爲にもなるなり然れど若し據ごころなく自宅で療治する時は先づ老人や小兒あらば當分餘所へ避けさせ家内の中にて誰ぞ然るべきものを一人極めて看病人としその看病人は時々衣服に石炭酸水をふり掛け石鹼にて顔面手足を洗ふべし又病人の室内にある物は一切これを外へ出して使ふべからず○病人が治療りたりさて浴を使ひ石鹼にてよく全身を洗ひ衣服を取り換へぬ中はそれと一所になるべからずその使ひし衣服、衾褥、蚊帳は焼き棄てるか又は石炭酸水に一晝夜の間漬け置きてその上に沸湯を注ぎそれよりよく洗ひ日光に曝すべし洗濯の出來ぬ品は亞硫酸瓦斯で蒸しまたは石炭酸蒸氣にあて、後日光に曝すべし病人の居りし室は疊席の類を掲げて柱か壁に倚せかけ戸棚を開き放ち室の中にある器具類は残らず列べ置き戸口や窓を閉めて六時間の上亞硫酸瓦斯で蒸すべしそれより障子、柱、牀板を石炭酸水にて拭ひ器具類は石鹼を解きたる水または沸湯にて洗ひ取り出して風や日光に中つべし

○不幸にして病人の死にたる時には、單衣か綿布を石炭酸水に浸しこれにてその屍體を包み速く棺に歛むべし而して火葬するを良しとするの屍體を置きたる室はすべて前の如く消毒法を行ふべし。

消毒法に使ふ藥劑

○石炭酸水 石炭酸二匁を虞里施林または亞爾蘭保兒四匁にてよく溶解しそれを二合餘の水に混ぜる

○石炭酸蒸氣 二倍の亞的兒を和ぜたる石炭酸を皿に入れて微の火の上に置きまたは二十倍の蒸留水を和ぜたる石炭酸水を布片に蘸し室の内に懸け置きて氣を蒸發す

○亞硫酸瓦斯 硫黄三百匁を八疊敷の室に使ふ割にてそれを二つ三つの火鉢に分配し炭火を點けて徐々燃やす

消毒の方法やうれに使ふ藥劑は何れの土地にても衛生の事を擔當る、職のものが心得て居られてそれく、世話もあるべけれど茲に一通り述べ置くなり

次ニ醫學博士三宅秀氏ノ記録ニ依リ流行ノ狀況ヲ詳知スルヲ得タルハ明治十六七年ノ兵庫縣監獄内ニ於ケル流行ナリ即チ明治十六年十月以降神戸監獄署及姫路分署ニ一種ノ傳染性熱性病發生流行シ翌十七年三月ニ至ルマテ千百三十三人ノ患者ヲ出セリ其症狀ハ俄然惡寒發熱シ體溫三十九度内外ニ達シ比較的重症ノ神經症狀ヲ起シ一週間内外ニシテ軀幹頸部及四肢ニ粟粒大乃至小豆大ノ紅色

皮疹ヲ生ス疹ハ小數ニシテ散在スルアリ多數ニシテ攢簇シ擴汎性紅色斑ヲ呈スルアリ多クハ解熱ト共ニ消散ス舌ハ始メ白色ノ濕苔ヲ生スルモ後乾燥シ脾臟ハ多ク發病四五日ニシテ肥大ス熱ハ一乃至二週間持續シ後チ漸次下降シテ平溫ニ復ス當時之レカ治療及防遏ノ衝ニ當リタル神戸醫學校長兼病院院長神田知二郎、縣立姫路病院院長帆山勇等ハ之レヲ發疹室扶斯ト診斷シ其原因ヲ明治十四年同監獄ニ流行シタル發疹性熱性病(ベルツノ所謂市ヶ谷監獄ヨリ病毒ヲ齎シタリト稱スルモノ?)ト其徵候彷彿セルヲ以テ或ハ當時ノ殘毒消滅セス再ヒ流行ヲ見タルノ疑團ナキ能ハストセリ

當時兵庫縣下ニ發生セル發疹室扶斯患者ハ明治十六年ハ僅ニ二十四人死者十人同十七年ハ患者二千八百十二人死者三百〇一人ヲ算セリ

兵庫縣監獄本署流行傳染性熱病ノ景況及考按書

〔徵候、經過及療法〕 本病ノ症狀タル潜伏期ハ不詳ト雖モ久シキハ二週日以上ニ至ルコトアルカ如シ前驅期ハ身體倦怠、食慾不振、頭痛、惡風、憎寒、睡眠、不安等普通ノ症ヲ呈シ二三日乃至四五日間持續シ或ハ全ク前驅症ナクシテ俄然強劇ノ惡寒若クハ戰慄ヲ發シ以テ本病ヲ始ム是ニ於テ病者疲勞甚シク起居ニ耐ヘス途ニ臥躄ニ就キ次テ發熱灼ク如ク脈搏頻數、顔面潮紅、眼球光澤ヲ放チ、頭重、頭痛、耳鳴、食機減損、口渴引飲等ノ諸

症増劇シ續テ咳嗽、結膜充血ヲ發シ又屢々眩暈、嘔血ヲ來シ或ハ四肢疼痛ヲ訴フル者アリ熱ハ已ニ初日ニ於テ三十九度乃至四十度或ハ其甚シキニ至テハ四十度以上ニ昇騰スル者アリ熱狀ハ朝暮半度乃至一度半ノ弛張ヲ爲シ間々經過中一時著シ大凡一週日乃至二週日間持續シ次テ解熱期ニ移ル其熱解散スルハ概スルニ緩慢ニシテ三日乃至五日ヲ費シ漸々平温若クハ平温以下ニ下降シ頓分利「グリー」シテ來スハ比準ニ少シ脈ハ始メ強實ニシテ熱度ニ準シ類數トナリ九十乃至百二十至ナリト雖モ往々細數ニシテ百二十至以上ニ進ムコトアリ而シテ熱退降スルニ從ヒ脈搏モ亦減少シ多クハ沈微トナル又罕レニハ脈狀重復「シク」ト呈シ或ハ欠滯スル者アリ其他諸系統ノ症狀ヲ類別スル左ノ如シ。

神經系ハ輕易症ニ在テハ夜間不眠、神思恍惚、重聽等ニ過キサルモ中等症ニ在テハ神經痛、無慾、重聽若クハ耳聾ヲ呈シ喃喃々獨語、眠ルトキハ多夢或ハ妖覺ノ爲メニ安眠ヲ妨ケラル、如シ又往々譫言妄語罕ニハ狂躁ヲ發シ或ハ放心シテ故ナク戶外ニ漫出セント欲スル者アリ重症ニ在テハ精神昏朦、直視、失洩、撮空摸床等ヲ來ス者アリ然レトモ腦症ハ概シテ輕易ナル者多トシトス。

消化器系ニ在テハ舌著シク震顫シ初メ滋潤ニシテ白色ノ苔ヲ被リ後チ乾燥シテ黃色或ハ帶黃褐色罕ニハ暗褐色ニ變シ口唇乾潤、上皮剝脫、間マ口煤ヲ呈ス煩渴引飲、食機減損強テ食スルトキハ惡心嘔吐ヲ催シ胃部壓重ノ感覺或ハ微痛アル者アリ腹部稍マ膨脹シ按壓ニ由テ諸處疼痛ヲ訴フル者尠ナカラス大便ハ多ク秘結シ下痢ヲ來スハ稀ナリ便ノ性狀ハ息氣甚シカラス通常淡黃色ヲ呈シ時トシテ褐色ナル者アリ。

脾臟ハ大抵發病後第四五日ニシテ甚シク肥大スト雖モ往々初期ヨリ之ヲ認ムルコトアリ、罕レニ肥大ヲ缺ク者アリ、即チ打疹スルニ濁音部増大シ縱徑十五乃至十八センチメートル横徑十二乃至十四センチメートルニ至リ熱解散スルニ從テ脾臟モ亦故ニ復ス此症ハ十二月中旬後著シク增多シ患者十中八九ヲ占ムルニ至レリ

皮膚乾燥シ發病後三四日ニシテ軀幹部及ヒ四肢ニ赤色ノ小疹(蕁麻疹)ヲ發ス血斑(ペテヒエン)ヲ發疹ハ少數ニシテ散在スルアリ多數ニシテ攢簇スルアリ時トシテ數多相集合シテ擴汎性紅色斑ヲ呈スル者アリ而シテ解熱期ニ至リテ自ラ消散ス此一徵ハ最初當テ目撃セサルモ十二月中旬頃初テ一二患者ニ發現シ爾來漸次ニ增多シ十中八九ハ悉ク發疹ヲ呈スルニ至レリ其他皮膚系ニ在テハ經過中罕ニ黃疸ヲ認ムルコトアリ又解熱期ニ於テ甚シキ發汗ヲ來ス者アリ。

呼吸器系ニ在テハ氣管技加答兒ハ輕重ノ差アリト雖トモ病者十中八九ハ之ヲ發シ多少咳嗽咯痰アリ其重症ニ在テハ聽診上著シキ笛聲類射音ヲ呈スルハ通常氣管技加答兒ト異ナルコトナシ然リ而シテ熱減退スルニ從テ漸次治ニ赴クモノトス此發症ハ十二月中旬前ニハ多カラサルノ症ナリシモ此時期ヲ界シテ一時增多シ目今復々大ニ減少ニ赴ケリ是レ全ク氣候ニ關スルノ故ナラン乎其他咽喉加答兒ヲ發スル者屢々之アリ又經過中ニ於テ衄血ヲ發スル者尠シトセス。

循環器系ニ在テハ心力減衰脈微弱ナル者ニ於テ顔面及ヒ下肢ニ水腫ヲ發スル者アリト雖モ極メテ稀有ノ症ニ屬ス脈ハ前ニ述ルチ泌尿器系ニ在テハ尿利ハ大抵異常ナキモ罕ニ頻數スルモノアリ尿量ハ減少スルアリ或ハ然ラサルアリ尿ハ酸性反應ヲ呈シ琥珀色褐色乃至帶赤褐色ニシテ透明ナルアリ或ハ稍混濁スル者アリ暫時靜定スルトキハ灰白色ノ沈渣ヲ生シ或ハ雲脚ヲ呈ス又顔面及ヒ下肢ニ水腫ヲ發スル者ニ於テ

モ蛋白ヲ含有スルコトナシ。

〔解熱期〕 熱ハ前陳ノ如ク三日乃至五日ニシテ漸ク平温若クハ平温以下ニ下降シ或ハ罕ニ一時諸症増悪シ脱汗睡眠スルノ後頓分利クリシヲ來スコトアリ此期ニ於テヤ脉搏已ニ減少シ發疹已ニ消散シ脾臟モ隨テ縮少シ腦症モ亦常ニ復シ諸症輕快シ患者極メテ疲勞嗜眠シ次テ回復期ニ移ル。

〔經過〕 通常速ナリ一週乃至二週日ニシテ三週乃至三週以上ニ至ルハ罕ナリ。

〔回復期〕 概シテ速カナルモ平素虛弱ノ者年齢長老ノ者及ヒ重症ノ者ニ在テハ快復緩慢ニシテ久シク下肢萎衰ヲ遺シ甚シキハ癱瘓ヲ來ス者アリ。

〔併發症〕 概シテ罕ナルモ黃疸ヲ發セシ者五名アリ但此症ハ熱經過中ニ於テ發現シ僅々三四日間持續シ解熱期ニ先チ容易ニ治セリ是恐クハ十二脂腸加答兒ニ起因スル者ニシテ敢テ高熱ノ爲メニ誘起セシ者ト云フ可ラス又回復期ニ於テ劇甚ノ口内出血ヲ來セシ者二名アリ其漏血暗黒ニシテ凝固シ口内ニ充漲ス之ヲ拭除スルニ齒齦及口内粘膜腫起シ處ヲ局セス血液滲漏ヲ呈ス且少此際同觀ノ物質ヲ數回多量ニ下泄セリ是口内漏血ノ嚙下ニ原クカ或ハ腸出血ニ因スルカ分明ナラスト雖モ畢竟出血素因ヲ有スルカ若クハ高熱ノ爲メニ血液溶崩ヲ來セシニ由テ然ルナラン其他極稀ニ耳下線炎及ヒ肺炎ヲ合併スルコトアリ尋常ノ如キハ絶テ目撃セシコトナシ。

〔再發及ヒ再患〕 回復期中再發スル者僅々三名ニ過ス而シテ悉ク輕易ノ症狀ヲ以テ經過ス又初感已ニ全癒シ二十有餘日間就役ノ後再感セル者一名アリ別紙熱表ヲ

〔預後及ヒ轉歸〕 最初ヨリ三月十日ニ至ル患者總數五百八十一名男五百七十五名 女六名内死亡二十一名ノミニシテ此百分比例三、六一強ニ當ルヲ以テ預後概シテ良ナリト雖モ年齡

四十歳以上ノ者及ヒ體質虛弱ノ者ニ於テハ死ノ轉歸ヲ資ル者多シトス而シテ其死亡ヲ致スヤ腦症強劇ニシテ體温四十度乃至四十度五分罕ニハ四十度五分以上ヲ以テ經過シ率然若クハ漸次下降シ終ニ平温以下ニ低下シ脉搏幽微ニシテ糸ノ如キニ至リ四肢厥逆シ遂ニ虛脫ニ由テ斃ル又罕ニ熱下ラスシテ高熱ニ止リ昏睡狀ニ陥リ強喘鳴ヲ發シ口圍泡沫ヲ吐キ死ヲ致ス者アリ其他回復期中榮養復セス衰脫ヲ來シ或ハ出血症併發症條中ニ掲グニ由テ斃ル者アリ

〔療法〕 豫防法ハ發疹瘰癧ノ例ニ倣ヒ之ヲ施行シ發病後ハ其症候ニ對シ療法ヲ施ス即チ解熱劑トシテハ主ニ規尼混〇、五乃至一、五撒里質兒酸曹達(二)〇乃至四、〇等ヲ投ス撒里質兒酸曹達ハ効驗最モ確實ナリ其用法二、〇チ一回或ハ四、〇チ一回チ頓服若クハ二回二分服セシム而シテ其奏効ヲ見サルトキハ同量ヲ以テ二三日連用シ若シ内服ニ耐ヘサルトキハ四、〇乃至六、〇チ灌腸トシテ用フルモ内服ト同一ノ効チ有セリ又熱度亢進腦病強劇ノ者ニハ寒冷法(冷頭法及ヒ濕布纏包法)ヲ施シ衰弱及ヒ虛脫ニハ強壯劑ニハ強壯劑トシテハ主ニ規尼混〇、五乃至一、五撒里質兒酸曹達(二)〇乃至四、〇等ヲ投ス與奮劑即チ鷄卵酒和酒ニ卵黃ヲ赤葡萄酒ホルト酒鷄卵武蘭堊龍腦依的兒麝香等ヲ適宜攪用シ便秘ニハ甘黍葛麻子油或ハ灌腸法ヲ施與ス氣管枝加答兒劇シキ者ニハ吐根浸機那煮老利兒水合劑輕量ノ「モルヒネ」等ノ兼用ヲ要スルコトアリ其他本病ノ全經過中ニハ牛乳ハ罐詰或生卵粥汁等ヲ與ヘ預料トシテハ鹽酸磷酸或ハ枸橼酸等ノ里蒙奈堊劑ヲ投ス回復期ニハ強壯滋養法ヲ施シ食機不振ノ者ニハ鹽酸苦味藥合劑ヲ用フル等ナリ然リ而シテ本病經過ハ概ネ輕易ナルヲ以テ過劇ノ療法ヲ要スルハ極メテ尠少ナリトス

〔發病及傳染ノ景況〕 本病ハ昨十六年十月廿七日日本縣監獄本署囚徒中ニ於テ始テ萌

起シ爾來蔓延シテ患者ノ總數已ニ五百八十一名ノ夥多ニ達セル抑モ當初該熱病ノ本監内ニ發生スルヤ已決丙檻第一第二ノ兩室乃チ日數刑ノ囚徒ニノミ限リテ流行シ敢テ他檻内年數刑ノ囚徒ニ波及セス其病勢甚々輕易ニシテ未タ著シキ傳染ノ性アルヲ認メス然レトモ復傳播ノ恐レナキ能ハサルヲ以テ病者ヲ室ニ隔離セントスルモ檻室填咽他ニ空室ナキヲ以テ當時健康囚徒若干名ヲシテ姫路及ヒ明石ノ兩分署ニ移轉セシメ該檻室ヲ以テ假リニ病室ト爲シ可及的隔離消毒法等ニ注意ヲ加ヘタリ干時十一月初旬ナリ然ルニ該移轉囚徒ノ内業ニ已ニ病毒ニ感染シ潜伏期中ノ者アルノ故ナラフ歟終ニ姫路明石ノ兩分署ニ於テモ本病類似ノ症ヲ發起シ爾來倍々傳播シ猖獗ヲ逞フスルニ至ル本監ニ於ケルモ亦蔓延ノ勢旺盛シ病者陸續增多セルヲ以テ十一月中旬人家隔絶ノ地監ヲ野山北面ノ半腹本ニ於テ特ニ避病室ヲ設ケ病者アル毎ニ悉ク之ヲ輸送シ隔離消毒法ヲ一層嚴密ニスト雖トモ更ニ撲滅ノ兆ナク却テ十二月中旬以後病勢一般ニ増惡シ傳染ノ性質モ顯著トナリ病者年齡ノ老幼ニ關セス居室隔絶ノ遠近ヲ問ハス刑期日年ノ長短ニ拘ハラズ況ク檻内ニ蔓延シテ遂ニ本監分署未決檻ノ距離直徑大凡五丁許ニシテ波及シ益々傳染ノ勢力ヲ逞フスルニ至レリ故ニ十二月中旬後テ日々ノ交通繁多也ニ波及シ益々傳染ノ勢力ヲ逞フスルニ至レリ故ニ十二月中旬後ニ在テハ囚徒患者ノ增多セシハ論ヲ俟ス看守押丁看護夫等ノ侵襲ヲ被ル者モ亦少ナカラス蓋シ本病ハ頗ル傳染シ易キノ性ヲ有スル者ニシテ直達間達ヲ問ハス傳染ヲ助媒介スルハ狹室群居空氣不潔食物不潔呼吸排泄物衣服臥具等ヨリスルモノナラン此ニ由テ之ヲ觀レハ獨リ監獄署内ノミニ止マラス況ク蔓延ヲ致サンモ亦料ルヘカラス如何トナレハ病機未タ全癒セス或ハ病毒潜伏期中ニシテ出獄家ニ歸ル者ハ病毒ヲ親屬或ハ他人ニ傳播シ甲ヨリ乙乙ヨリ丙丙ニ傳ヘ終ニ慘狀ヲ見ルニ至ラン哉ノ恐レア

レハナリ。

〔考按〕 本病々性ハ前章系統ニ從テ類別スル徵候ト傳染ノ景況トニ仍テ略ホ分明ナリト雖モ其來歴ニ就テ推考スルニ該病ノ發スルヤ始メ諸徵不全ニシテ傳染ノ勢力モ亦從テ緩慢ナリシモ十二月中旬頃其病性ニ變異ヲ顯ハセリ即チ此期ニ於テ徵候一層較著トナリ軀幹頭部及ヒ四肢ニ發疹ヲ呈シ顔面潮紅活膜充血咽喉加答兒氣管枝加答兒臟肥大等増劇シ腦病モ亦概シテ旺盛シ就中發疹ノ如キハ最初ニ患者ニ發現シ爾來漸次增多シテ十中八九ハ盡ク發疹ヲ呈シ傳染性モ亦其勢力ヲ逞フスルニ至レリ預後ノ如キモ初ハ敢テ險惡ト稱スルニ足ラスト雖モ該時期後ハ不長ノ兆ヲ呈セリ是即チ十二月中旬ヲ界シテ病性前後變異アリテ此期后ノ病勢一般ニ増惡シ病徵ノ項目ヲ添ヘ傳染病較著トナリ且預後不頁ナルヲ證スルニ足ルヘキナリ其然ル所以ノモノヲ推究スルニ總テ傳染性流行ニ於ケル始メ漸次増進シ極度ニ達シ途ニ復消滅ニ赴クハ一般ノ通則ナルヲ以テ本病ニ於ケルモ逐次患者增多セルハ畢竟免ル可カラサルモノナラン又氣候寒冷ニ因スルカ或ハ他ノ不明ナル原因ニ因テ病性ヲ増惡ナラシメタル亦計ル可カラサルモノナラン又氣候寒冷ニ因スルカ或ハ他ノ不明ナル原因ニ因テ病性ヲ増惡ナラシメタル亦計ル可カラズ又以爲ラク本病ノ症候ニ據リ推考スルニ去ル明治十四年中本監内ニ於テ流行シタル發疹性熱病ト其徵候彷彿タルヲ以テ或ハ當時ノ殘毒消滅セス再ヒ發現シタルノ疑團ナキ能ハス而シテ其最初ニ當リ丙檻日數刑囚徒ノ室内ノミ流行シタルヤ蓋シ該室ハ元ト工業場ナルヲ囚徒ノ増加ニ隨ヒ假ニ地上ヘ木材ヲ積ヘ床板ヲ敷設シタルモノナルヲ以テ其床ノ極メテ低下ナルハ固ヨリニシテ加フルニ窓戸ノ開張其宜キニ適セサルモノ及ヒ日數刑囚徒ハ年數刑囚徒ニ比シ其數

極メテ夥多ナルカ上ヘ其室モ別異スルヲ以テ室内爲メニ填咽シ且ツ年數刑囚徒ノ如ク檻内ノ檢束ニ慣レサルヲ以テ其身體ノ變常ヲ感スル等ノモノ恐クハ之カ因タルヲ得ンカ茲ニ於テ本病ノ診定ヲ下サンニ判然腸室扶私トハ鑑別シ得ヘキ者ニシテ諸症候發疹室扶私ニ近似セリ然リト雖モ泰西諸邦ニ行ハルハノ發疹室扶私ニ比スレハ聊カ差異ナキ能ハス第一薔薇疹ハ往々缺如シ且血症ヲ發スルハ極メテ稀ナリ第二氣管枝加答兒ハアルモ大抵輕易ノ者多ク間々之ヲ缺キ鼻加答兒ノ如キハ全ク之ヲ具有セズ第三便色ハ大抵淡黃色ナリ第四經過概シテ輕易ナリ第五併發症ハ極テ僅微ナリ而シテ未タ剖檢ノ機會ヲ得サルヲ以テ診斷ヲ證明スル能ハスト雖モ現症發疹室扶私ニ近似スルト傳染ノ猖獗ナルトニ由テ考察スレハ之發疹室扶私ト稱スルモ敢テ妥當ヲ缺クモノト云可ラス又預防消毒法ニ至テモ發疹室扶私ノ通則ヲ襲用シ不可ナルナカレヘシ。(患者發生週表及熱度表添付シアリタルモノ、如キモ散逸セリ)

明治十七年三月十二日 日記

縣立神戸醫學校長兼縣立神戸病院院長 醫學士 神田知二 郎
縣立神戸醫學校一等助教兼縣立神戸病院御用掛 鈴木重 熙

監獄姫路分署管束在檻囚徒内熱性傳染病况及意見書

〔發病景况〕 本病ハ昨十六年十月下旬本縣監獄本署管束囚徒ノ内ニ病毒萌芽スル所ニシテ當時健康囚徒一百名ヲ本署ヨリ姫路分署ニ移轉セシム恐クハ此移轉囚徒ノ内

業ニ已ニ病毒ノ潜伏スルアルアツテ此地ニ輸送セシナラン即チ十一月中旬ニ當リ一時ニ九名ノ囚徒熱性病ニ罹リ其徵候タル腸室扶私様ニシテ本病ト稱ヤ異ナリ且ツ悉皆輕易ノ經過ヲ資リ蔓延ニ到ラスシテ頓ニ消滅ニ歸セリ然ルニ該病者ハ既決檻第六室ニ止マリ皆ナ神戸本署内ヨリ移轉ノ囚徒ナルヲ以テ或ハ本署ノ熱性病ト同種タリシモ量リ難シ爾後十二月二十七日ニ至リ更ニ七八名ノ熱性病者ヲ發現ス始メ移轉囚徒ノミ侵サレタルモ遂ニ本檻在來ノ囚徒ニ派及セシヲ以テ病勢未タ著シキ傳染ノ性アルヲ認スト雖トモ直チニ病者ヲ別室ニ隔離シ諸排泄物ニ消毒法ヲ施行シ充分注意ヲ加ヘタリ然リ而シテ本年一月一日以來病勢俄然トシテ猖獗ヲ呈シ日ナラスシテ未己決兩檻各室内ニ傳播蔓延シ陸續病者增多シテ終ニ現今ノ慘狀ヲ見ニ至ル

〔病症〕 觸接傳染毒ヲ有スル熱性病ナリ其毒ハ揮發性ニシテ之ヲ運輸スル恐クハ病者ノ呼氣蒸發氣諸排泄物及ヒ被服器具等ナラン如何トナレハ其蔓延ノ迅速ナルト膏ニ在檻囚徒ノミナラス之ニ近接スル者例之ハ醫員看守押丁巡查等ノ感染シ易キニ因テ明カナル所ナリ然シテ傳播ノ勢力他ニ於テハ囚獄内ノ如ク強劇ナラスト雖トモ年餘ニ拘ハラヌ男女ヲ問ハス皆之ニ感染スルカ如シ

〔徵候〕 潜伏期ハ詳カナラサルモ二週以上ノ久シキコトアルカ知シ前驅期ハ一二日乃至四五日ニシテ通常全身疲倦食思缺損頭痛憎寒睡眠不安等ノ症ヲ呈シ或ハ全ク之ヲ缺キ卒然強惡寒若ハ戰慄ヲ發シ次テ本病ヲ來ス此際病者疲勞甚シクシテ起居ニ耐ヘス強頭痛重耳鳴眩暈及四肢項部薦骨部等ノ疼痛甚シク熱度憎進脈搏頻數トナリ大渴引飲皮膚乾燥間々惡心レアトモ嘔吐ニ至ラス概シテ咳嗽ハ輕易ナリ(熱)ハ第一日ヨリ攝氏三十九度乃至四十度以上ニ達シ朝夕稍ヤ弛張ヲ以テ稽留シ多クハ十二日前

後ニ至リ二三日間ニ分利下降ヲ來シ恢復期ニ移ル時トシテハ前驅期ノ兆ヲ呈スル者ニシテ熱度已ニ卅九度以上ニ昇騰スル者アリ又罕ニ經過中ニ於テ一時著シキ弛張ヲ認ル事アリ〔脈〕ハ熱度ニ準シ百乃至百三十搏尙以上ニ進ミ罕ニ重復〔シクロート〕ヲ呈ス且ツ脈狀始メ強實ナレトモ復多ハ沈微トナル又熱度ノ下降ニ從ヒ脈搏モ亦減少スレトモ間々恢復期ニ至リ却テ增多スルコトアリ〔發疹〕主トシテ軀幹四肢等ニ蒼薇疹ヲ發ス然レトモ前ニハ大抵少數ニシテ多數ナルハ罕ナリシモ近日ニ到リ愈々多數トナリ皮膚ニ汎發性紅色ヲ來シ間々血斑ヲ雜フ發疹ハ第三四日ニ在リト雖トモ罕ニ初起ヨリ之ヲ認ムルコトアリ而シテ分利期ノ前ニ於テ自ラ消散ス最モ此發疹ヲ關ク者モ亦尠シトセス又顔面殊ニ兩頰及ヒ前額部ニ於テ紅色斑樣ノ潮紅ヲ來シ稍ヤ皮上ニ隆起シ極メテ鮮紅ナルアリ或ハ較著ナラサルアリ且ツ初起ニ甚シク大抵一週ノ終リニ到リ漸次ニ消滅ス此發疹ヲ缺ク者ハ極メテ罕ナリ又重症ニ於テ此潮紅俄然トシテ紫黒班ニ變セシ者二名ヲ認メタリ

其他輕易罕ニハ重症ノ氣管枝炎ヲ併發スルコトアレトモ過半之ヲ關如ス結膜炎ハ必有症ニ屬シ多クハ前驅期ヨリ之ヲ來ス舌ハ乾燥シテ白色或ハ帶黃白色或ハ黒褐色ノ苔ヲ呈ス問々口煤ヲ呈スルモノアリ脾臟ハ多少肥大ヲ起ス罕ニ之ヲ缺クコトアリ肚腹ハ膨脹ヲ來スコトナク按壓ニ由テ下腹ノ疼痛ヲ覺フコトナシ通常ハ便秘ス罕ニ軟下痢ヲ來ス事アリ輕症ニ於テ著シキ精神症狀ヲ呈セサレトモ重症ニ於テハ精神昏朦或ハ狂躁ヲ發ス諸語ハ多少アリ殊ニ睡眠時ニ於テス耳鳴ハ初期ニ甚ク耳聾ハ多ク來ルモ重症ニノミ多シ四肢諸筋ハ重症ニ於テ進行萎衰ヲ起シ之ヲ按壓スレハ甚キ疼痛ヲ覺フ尿ハ其量減少シテ黯色ヲ帶フルモ蛋白質ヲ含有スルコトナシ皮膚ハ多ク乾

燥シ口圍ノヘルメスハ極稀有ノ症ナリ

〔續發症〕 輕易ニシテ且ツ少シ而シテ一週前ヨリ四肢ノ未滿殊ニ足趾ニ於テ壞疽性黒色ヲ呈スル者三十有餘名ニ及ヒ尙ホ續テ此症ヲ發スルノ兆アリ但シ此症ハ快復期ニ於テ來ル者ニシテ初メ兩足趾ノ疼痛甚シクシテ浮腫ヲ發シ次テ變色ヲ來ス其發微ハ全ク乾性脫疽ノ如キ者アリ或ハ壞爛侵蝕シテ惡臭ヲ放シ畢竟營養不給ニ由ルナルヘシ加之ス近來瘰癧ヲ發スルコト多ク稀ニ壞疽ニ陷ル者アリ

〔經過〕 概シテ二週日ナリ然レトモ輕症ハ一週日前後ニ分利ヲ來スモ持續シテ三週日ニ及フハ罕ナリ

〔恢復期〕 病勢ノ強劇ナルニ比スレハ概シテ復常速カナリ唯營養不賈ノ者及ヒ重症ニ罹ル者ハ復常緩慢ナルノミナラス下肢ノ萎衰ヲ殘シ久シク故態ニ復スル能ハス

〔瘰癧後及轉歸〕 瘰癧後ハ概シテ可哀ナリ而シテ死ノ轉歸ヲ資ル者ハ精神昏朦筋肉振譫言忘忌語ヲ發シ熱ハ最高點ニ進ミ或ハ卒然下降シテ却テ脈搏頻細トナリ煩躁苦悶直視失音四肢厥次シ且其末端ニ藍色及ヒ浮腫ヲ現シ途ニ虛脫シテ斃ル極罕ニ肺炎ヲ併發シテ死スル者アリ或ハ恢復期ニ於テ營養不給ヲ來シ衰弱ヲ以テ斃ル者アリ死者百分比例左ノ如シ

三月三日ニ至ル迄患者總數	七百〇二人
內男	六百七十八人
內女	二百二十四人
出監	四十二人
總數中出監ヲ除キタル總計	六百六十人

第三章 本邦ニ於ケル既往ノ流行

大正三年度發疹室扶私流行誌

内死亡五十四人 此百分比例 八、一八一餘

此内

男患者出監ヲ除キ總數六百三十五人

内死亡五十三人 此百分比例 八、三四六餘

女患者出監ヲ除キ總數二十五人

内死亡一人 此百分比例 四、〇〇

〔再感〕 稀ナリ而シテ大抵善其ノ經過ヲ得ル者ナリ

〔療法〕 豫防法ハ發疹室扶斯ノ通則ニ從ヒテ施行シ發病者ハ對照療法ヲ施ス即チ熱勢極メテ旺盛シ精神昏朦スル前ニハ寒冷法ニ殊ニ全身濕布纏包或ハ撒里失兒酸曹達規尼涅等ヲ投シ營養不賈及ヒ衰弱ヲ來ス者ニハ強壯藥與奮藥例之ハ洋和酒類龍腦或ハ依的兒麝香安息酸等ヲ内外選用シ脉搏非常ニ亢進スルトキハ實多里私葉浸ヲ與ヘ頭痛ニハ局部冷奄法便秘ニハ甘汞蓖子油或ハ灌腸法等ヲ施行セリ

全經過中ハ肉羹汁粥汁生卵牛乳等ヲ與ヘ飲料ニハ鹽酸里蒙奈塔ヲ投シ解熱後食糧不振ノ者ニハ鹽酸苦味藥合劑ヲ用ヒ恢復期ノ荏苒タル者ニハ幾那鐵劑等ヲ與フ其他合併病アルトキハ臨時適當ノ處置ヲ行ヘリ

〔備考意見〕 監獄姫路分署ノ位置ハ姫路ノ西隅ニシテ市街ヲ距ル二丁計リニ在リ西南二方ハ田圃相連テ開闢東及北ニハ小邱アツテ圍繞セリ近傍ニハ川流瀧水等アルコトナシ而テ地質モ亦高燥ニ屬ス其建築タルヤ已決監ハ明治九年ニ未決監ハ同十一年ニ落成シ未タ曾テ流行性ノ病ヲ發現セシコトナシ之ニ由テ本病ハ全ク本縣監獄本署ヨリ移轉囚徒ノ輸入セシテ證スルニ足ル然ト雖モ本縣監獄本署ニ比スレハ病勢猖獗

ニシテ且ツ強制ナリ其然ル所以ハ監室狹隘ニシテ管束在監ノ囚徒多數ナルカ爲ニ室内ノ空氣不賈ハ勿論病毒ヲシテ稠厚ナラシムルニ因ルナルヘシ蓋シ本病ノ發スルヤ始メ徵候不全ナリシヲ以テ鑑別上惑ヒナ起サシメタレトモ即今發症ニ就テ推考スレハ明治十四年本縣監獄本署内囚徒内ニ於テ流行セシ發疹熱病ニ彷彿タリ因テ該病毒ハ恐クハ茲ニ胚胎セシ者ナランカ而シテ始メハ病勢微弱ニシテ發症不完全ナルニ從ヒ傳染ノ勢力モ亦未タ逞クスルヲ得サルモ漸ク成熟シテ眞面目發顯セシナル可シ然リ而シテ明治十四年ニ於テハ監獄本署内ノミ特ニ傳播チナシ他ニ蔓延ノ勢ヒ寡ナカリシト雖トモ本年ニ於テハ病勢ノ猖獗ナル音監獄署内囚徒ノミナラス汎ク蔓延ノ景況ヲ顯ハセリ例之囚徒ノ本病ニ罹リ療養中ニ刑期滿ルアレハ直チニ放還スル素ヨリ法律上止ムヲ得サルヲ以テナリ然ルニ之ニ由テ其親屬ニ傳播シ或ハ此際未タ發病セサテモ間ニ病毒ノ已ニ潜伏スルアツテ之ヨリ他人ニ派及スル等勢チナカラス且ツ警員看守押丁等ノ如キ之ニ近接スル者ハ勿論ナレトモ該家屬或ハ近隣ノ者ニ蔓延スルカ如シ茲ニ於テ本病ニ適當スヘキ診定ヲ下スハ實ニ忽爾ニ付スヘキコトニ非サレハ未タ解剖的検査ノ機會ヲ得サレトモ現症ト傳染トノ景狀ニ因テ考按スルニ全ク腸空扶斯ト區別シ得ヘキ者ニシテ判然發疹室扶斯ト稱スヘキ者ナリ如斯發疹室扶私ト診定シ目下病者ノ療養ハ勿論豫防法等ハ充分ノ注意ヲ加フル所ナキト雖トモ實際ニ於テ尙ホ未タ完備ナリト言フヲ得ス依テ今一層嚴密ノ方法ヲ設ケサレハ病毒ヲ鎮壓スルコトヲ得サルノミナラス却テ傳播ヲ促進セシムルモ亦タ計ル可カラサルナリ右ハ三月三日ニ至ル間ノ病況ヲ實地ニ調査シタル者也

明治十七年三月五日

第三章 水邦ニ於ケル既往ノ流行

縣立姫路病院長心得	帆	山	勇
同	副院長	本	多
同	醫員	中	川
		茂	雄

同年度衛生局年報中：頻年各種傳染病ハ多少増進ノ傾向ヲ有セサルモノ殆ト稀ナリト雖モ發疹室扶斯ハ年ト共ニ減少ス。季節ノ關係ニ依リ本病患者ノ多少ヲ見ルニ本病ハ二月ヲ以テ最少ノ月トシ一月及三月ハ各十八名ナリシカ四月ニ至リ俄然増發シテ六十八人トナリ同年中最多數ヲ占ム爾後九月ニ至ルマテ各月毎ニ減少シ十月ニ至リ少シク増加ノ徵ヲ呈セシモ又再ヒ減少シテ十二月ニハ遂ニ二十二人トナレリ累年最モ多數ノ月ハ同一ナラスト雖モ四月乃至六月ノ交ヲ以テ稍々多數ナル時機トスルカ如シトセリ之レ恐クハ兵庫及姫路監獄以外ノモノニ就テナラン

明治十八年衛生局年報ニハ發疹室扶私ハ特ニ流行ノ勢ヲ逞セシコトナク各地ニ散發セシニ過キス只熊本縣監獄出張所宇土郡三角浦戸口浦川尻ニ於テ十八年十二月十三日ヨリ發生シ十九年一月十五日ニ至ルマテノ患者總數三百三十八人内死亡五十七名ニ及ヘリトセリ

又明治十九年ハ本邦ニ於ケル發疹室扶斯ノ最モ大ナル流行ナリ其始メハ同年

一月十四日大阪府若松町監獄ニ本病患者三名ヲ出シ三月一日マテニ二百五十九人ヲ算シ次テ堀川中ノ島堺奈良五條等ノ各分署ニ蔓延シ三月十六日マテノ總患者四百五十一人ニ及ヘリ監獄署以外ニ於ケル同年ノ總患者ハ八千二百二十五人死者千五百七十七人ニシテ僅ニ奈良縣及北海道ヲ除クノ外悉ク本病ノ侵ス所トナレリ就中多數ノ發生ヲ見タルハ兵庫縣ノ二千三百六十二人大阪府ノ千八百十三人京都府ノ千四百九十六人ナリ之レニ次クヲ德島ノ五百九十七熊本ノ三百九十八愛知ノ二百六十二大分ノ二百二十福井ノ百五十三ナリトス其他ハ何レモ百人以下ナルコト第一表ノ示ス所ナリ

明治二十二年三月十八日神奈川縣三浦郡長阪村外數ヶ村ニ於テ一種ノ發疹性熱性病發生シ月餘ニシテ大田和佐島萩野芦名等ノ諸村ニ蔓延シ遂ニ七十七名ノ患者ヲ算ヘ四月廿九日終熄セリ當時該病視察ノ爲メ出張シタル内務技師ハ本病ハ發疹室扶私ノ症狀ト一致セサル所アルモ發疹及熱型等他病ノ之レニ類スルモノナキヲ以テ發疹室扶私ト看做サ、ルヲ得ストセリ

(明治二十二年 衛生局年報)

明治二十二年四月一日神奈川縣下三浦郡長阪村外數ヶ村ニ於テ一種ノ流行病發生シタルニ依リ内務四等技師中濱東一郎ニ命シテ視察セシメラル令其復命ノ大概ヲ揭

ケンニ本年三月十八日三浦郡長阪村ニ於テ一少女ノ暴カニ發熱スルニ始マリ翌十九日ニハ病勢忽チ猖獗ニシテ大田和、佐島、萩野、芦名等ノ諸村ニモ患者ヲ發生シテ十四人多キニ及ヒ爾來九日間日々新患者ヲ生シ林、秋谷ノ二村ニ蔓延シ前後患者ノ總計七十七人ニ上リシカ二十九日ニ至リテ頓ニ終熄シ其後四月三日ニ及フマテ復タ一患者ヲ生セス而シテ眞成ノ流行地ト稱スヘキハ長阪、大田和、佐島ノ三村ニ在リ此各村ハ何レモ横須賀ヨリ三四里ヲ距ル僻村ニシテ戸口モ亦稀疎ナルニ僅々二週間ニ滿タスシテ七十七人ノ患者ヲ出セルヲ以テ毎戸ニ就キテ其數頗ル多ク甚シキハ一家ニ於テ四人乃至六人ヲ出タセリ其死亡數モ比例的ニ多ク患者百人ニ對スル死亡六十六人二分三厘ノ割合ナリ經過ハ甚々短ク發病後二三日ニシテ斃ルハ、モノ多シ罹病者ハ老幼ノ別ナキモ七年以上十五年未滿ノ者最モ多シ即チ患者總數七十七人中三十四人ハ皆此年齡間ノ者ニ係レリ却說視察官カ流行地ニ達スルヤ直ニ實視ニ從事シ病家十七日ニ臨シ患者十五人ヲ診察シ死者三十人ノ生前症狀ヲ尋問セリ然レトモ新患者ノ全ク絶エシヨリ五日ノ後ニ在リ舊患者ハ概ネ恢復期ニ趣キ中ニハ殆ト全治セル者アリ瀕死ノ患者二人アルモ已ニ虛脱ニ陥リ現ニ本病ノ諸徵候ヲ具備セル者ナクシテ明ニ病性ヲ知悉スルニ由ナク又患者既往ノ症狀ト死者生前ノ症狀トヲ開業醫又ハ檢疫醫ニ問フモ檢疫醫ハ流行終熄後ニ來リシモノハ開業醫ハ林、秋谷、長井ノ三村ニ各一名アルノミニシテ流行眞局面ノ村落ニハ一名ノ開業醫タモ大ク加フルニ一時數十人ノ患者ヲ發セシヲ以テ醫治ヲ受クルトモ僅ニ一回ノ診察ニ止リ醫治ヲ受スシテ死亡スル者モ亦往々之アルカ爲ニ始終ノ症狀ヲ詳知セシ者ニ乏シク病家ニ就キ死者生前ノ病況ヲ問フモ概ネ愛子ヲ裏フカ爲精神惘乎トシテ答フル所明ナラス甚シキハ死亡ノ時刻ヲ

モ辨セス故診斷上ノ參考トナルヘキ材料ヲ得ン事頗ル難シ今先ツ親シク診察セル患者ノ諸徵ヲ擧ケンニ發疹ハ多ク左右上膊外側ニ於テシ又往々肩胛部、背外側、腹部及ヒ下肢ニモ發スルアリ皆圓形又ハ楕圓ノ血斑ニシテ暗紅色ヲ呈シ粟粒大ナルヲ常トスルモ一患者ハ豌豆大ニ達セリ而シテ毫モ充血斑、水泡、結節其他麻疹ノ知キ表皮ノ落屑等アル者ナシ只痘瘡ノ結痂シタルニ類スル一小患兒アリ又往々臍病ヲ發シ精神痲鈍ニシテ問ヘトモ答ヘサル者二人アリ熱度虛脱ニ陥リタル一患者午前ハ体温三十七度六分午後ニ三十八度以上ニ昇リテ其夜死亡ス爾餘ハ半治者ニシテ之ヲ計ルニ由ナシ右ノ事實ナレハ病名ヲ確定スル固リ難シ因テ醫師病家又ハ患者等ヨリ聞キ得タル所ヲ參酌考案シテ本病ノ徵候及經過ヲ述ヘンニ初メ四五日ハ頭痛、腹痛或ハ惡寒ヲ發シ尋テ熱發就瘳ス此際往々嘔吐ヲ發シ時トシテハ黑色ノ液體(血液乎)ヲ吐出シ又多量ノ血液ヲ吐出セシ者アリ且ツ胃部ニ疼痛ヲ訴フル者少カラス又臍症ヲ發スル者多ク小兒ニ在テハ屢々上肢ノ痙攣ヲ發ス激症ノ者ハ此諸徵ヲ以テ迅速虛脱ニ陥リ死スル者アリ而シテ發疹ハ罹患後二三日ニ於テシ粟粒大ヨリ豌豆大ニ至ル鮮紅色ノ血症ニシテ初ハ稍々皮上ニ隆起シ專ラ上膊、外側、肩胛部、背外側時トシテハ腹部、下肢等ニ發スルコトアリテ稀ニハ顔面ニモ之アリ時日ヲ經ルニ從ヒ平坦トナリテ暗紅色ニ變ス此發疹アルモ諸徵毫モ輕快セス此際往々齒齦ヨリ出血シ精神速ニ痲鈍トナリテ昏睡ニ陥リ或ハ興奮性ノ諸徵ヲ呈ハシ甚シク譫語セル者寡カラス或ハ病褥中ヨリ突起シテ室外ニ出テントスルモノアリ而シテ便秘スルモノ多シ此ノ如クニシテ或ハ二三日ニ死亡スルアリ或ハ速ニ輕快ニ赴クアリ總シテ豫後極メテ不良ナリ但當時「ルベナラ」病ノ併行シタルハ或ハ本病ニ非スシテルベナラ患者アリシモ亦知ルヘカラス案スルニ

顔面ニ稀ナル出血性ノ斑ヲ現シ熱發、腦症、便秘、傳播ノ迅速ナル等ハ他ノ疾病ノ此ニ類似スル者ナク敢テ其最モ類似スル者ヲ索メハ唯ニ發疹室扶私ノ一症アルノミ然レトモ寒戰ヲ以テ始メス且ツ經過ノ速ナル幼童ヲ侵スノ專ラナル死亡數ノ多キ等ハ尋常發疹室扶私ノ病徵ニアラス然レトモ傳染病ノ性質トシテ往々未明ノ原因ニ由リ變常ノ徵ヲ呈スルコトアリ死亡數ノ如キモ流行ノ善惡患者生活ノ有様等ニ關シ著シキ差異アル者ニシテ已ニ死亡數「五〇プロセント」ニ達セシヲ見ル千八百七十九年伯林府ノ「バラツゲン、ラチエレット」ニ入院シタル同病者ハ年齡ニ由リ「六〇プロセント」ノ死亡ヲ生セシコトアリ故ニ其徵候ハ悉ク尋常ノ發疹室扶私ニ符合セサルモ猶ホ本病ニ非スト謂フヲ得ス況ヤ病徵ノ他病ニ類セル者無キニ於テオヤ今一步ヲ退キテ之ヲ考フレハ本病ハ一種特別ノ發疹病ニシテ未ダ曾テ研究ヲ經サル者ナルヤモ知ルヘカラス然レトモ當初ヨリ病徵ノ經過ヲ實驗セス又絶ヘテ詳細ノ病徵ヲ知ル者ナケレハ其最顯似セル發疹室扶私ト看做サル、ヲ得ス而シテ其發疹ハ悉ク出血性ナルヲ以テ出血性發疹室扶私ト謂フヲ適當ナリト思考ス

上述三十五ケ年間ノ統計ニ依リ觀察スルニ大體ニ於テ其流行ヲ三期ニ分ツコトヲ得ヘシ即チ第一期ハ明治十二年ヨリ同二十一年ニ至ル十ケ年間ニシテ十五六兩年ノ異例ナキニアラサルモ毎年ノ患者數ハ千ヲ越ヘタリ其間殆ト連年發生流行セシハ兵庫縣ヲ最多トシ大阪熊本、東京愛媛群馬、神奈川、山口、石川埼玉ノ各府縣ナリ。第二期ハ明治二十二年ヨリ同三十七年ニ至ル十六ケ年間トス此間ノ患

者數ハ二十四年及三十六年ノ兩極端數ヲ除キ概シテ第一期ニ比シ頓ニ減少セルモ尙ホ數十乃至數百名ノ間ヲ昇降セリ此時ニ於テモ前半期ハ兵庫縣最モ多ク後半期ハ山形縣異彩ヲ放テリ。第三期ハ明治三十八年以降大正二年ニ至ル九ケ年間ニシテ此間ノ患者數ハ道府縣ヲ通シ一ケ年十名ヲ出ツルコトナク大正二年ノ如キ患者皆無ナリ

斯ノ如ク患者ノ殆ト絶滅ニ至リタルハ一般衛生思想ノ向上及ヒ衛生施設ノ完整竝ニ豫防消毒ノ措置漸次肯綮ヲ得ルニ至リタル結果ナルヤ勿論ナリト雖モ同期間ニ於ケル腸室扶私ノ消長ト比較スル時ハ尙ホ他ニ何等カノ原因ナキヤヲ疑ハサルヲ得サルナリ

第四表 既往ニ於ケル發疹室扶私ト腸室扶私患者ノ比較表

年次	發疹チフス患者	腸チフス患者	年次	發疹チフス患者	腸チフス患者
明治十二年	二、三四一	一〇、〇五二	明治十六年	四一二	一八、七六九
同十三年	一、五二七	一七、一四〇	同十七年	三、四五九	二三、二七九
同十四年	一、三九五	二四、〇三三	同十八年	二、三〇二	二九、五〇四
同十五年	六二九	一九、三〇八	同十九年	八、二二五	六六、二二四

明治二十年	二、四八七	四七、四四九	明治三十四年	二一	二四、一一二
同二十一年	一、一三一	四三、五〇〇	同三十五年	二二	二一、〇九四
同二十二年	三〇〇	三五、八四九	同三十六年	三八	一八、八五二
同二十三年	二五一	三四、七三六	同三十七年	三五	一九、六三五
同二十四年	一、一九四	四三、九六七	同三十八年	二	二二、八七九
同二十五年	二八一	三五、六三六	同三十九年	四	二五、一七八
同二十六年	二二八	三四、〇六九	同四十年	三	二五、九八八
同二十七年	一三九	三六、六六七	同四十一年	三	二四、五〇一
同二十八年	一八六	三七、〇一五	同四十二年	三	二五、一〇六
同二十九年	九二	四二、五〇五	同四十三年	五	三五、三八七
同三十年	五八	二六、九九八	同四十四年	三	三六、二六二
同三十一年	四一	二五、二九六	同四十五年	一	三五、五七八
同三十二年	五五	二七、六七三	同四十六年	一	三一、五八六
同三十三年	七三	二三、八五五	同四十七年	一	

備考 明治四十四年以降ノ腸チフス患者中ニハ「バ」ラチフス患者ヲ含ム

以上ハ既往ニ於ケル發疹室扶私流行ノ概要ナリ中ニ就テ明治十四年市ヶ谷監獄ノ囚人間ニ流行シタルモノ及ヒ明治二十五年本所避病院ニ發生シタル疾病ハベルツ及橋本井上竹中等發疹室扶私ナルコトヲ確認シ井上ハ前項ノ外岡山竝ニ他ノ府縣ニ於テ小流行アリタルヲ是認シ明治十六七年兵庫及姫路監獄内ニ流行セル疾病ハ神田鈴木帆山本多中川等ニ依リ發疹室扶私ト診斷セラレタリ之レニ

反シ明治三十七年七月傳染病研究所部長博士柴山五郎作ハ山形縣酒田町ニ於テ發疹室扶私ノ取扱ヲ受ケタル三十名ノ患者ニ就キ調査ノ結果發疹室扶私ニアラストセリ然レトモ當時患者ハ死亡若クハ全治退院シ僅ニ數名ノ恢復期患者ヲ殘存セルニ過キササルヲ以テ臨床的實驗ヲ遂クル能ハサルハ勿論傳染病院醫及開業醫ニ質スルモ要領ヲ得ル能ハス臨床日誌ノ記載モ又缺クル所アリシヲ以テ主トシテ經過日數竝ニ全治者二十八人ノ血清反應ヲ檢シ之レヲ附近町村ノ腸室扶私患者ト比較シ推斷スルノ已ムナキニ至レリト言フ之レカ調査ノ概要ヲ記セハ發疹室扶私トセラレタル患者三十名中發疹ノ多發セル者十七名(五六・六%)發疹ノ少數ナル者十名(三三・三%)全ク發疹ナキ者三名(一〇・〇%)ニシテ疹ハ軀幹四肢ニ多發スルモ所謂血疹ヲ有スル者ハ僅ニ二名ニ過キス次ニ熱ノ持續期間ハ短カキハ六日間長キハ十八日間ニシテ漸次常溫ニ復シ四週以内ニ全治セシ者二十四名(八五・七%)ナリ又血清反應ハ腸室扶私菌ニ對シ五〇倍以上ノ反應ヲ現ハセシモノ十六名(五九・二%)ヲ發見セリ之レヲ同年酒田町及其附近上田村ニ發生セシ腸室扶私患者ト比較スルニ酒田町ハ全治者三十六名中四週間以内ニ全治セシモノ三十一名(八六・一%)上田村ハ十七名中十三名七六・四%ニシテ發疹室扶私ノ治療日數ト大差

ナク又上田村ノ腸室扶私耐過者十二名中其發泡液五十倍以上ノ稀釋度ニ於テ腸室扶斯菌ヲ凝集スル者九名(七五、〇%)ニシテ是又大ナル懸隔アルヲ見ス加フルニ流行學的觀察ニ依レハ二者常ニ相伴フテ發生流行スル等特ニ發疹室扶私ト診斷スヘキ理由ヲ認ムル能ハストセリ。發疹室扶私ノ病原體未確定ノ際ニ於テハ此方法ハ診斷解決ノ捷徑ナルノミナラス發疹室扶私耐過者ノ發泡液附近腸室扶私耐過者ノ夫レト均等ニ腸室扶私菌ニ對スル凝集力ヲ有ストセハ其推斷ハ失當トナスヲ得サルナリ

(明治三十七年九月官報第六三五九號 傳染病研究部長柴山五郎作報告抜)

第一 臨床的研究

發疹室扶私ト腸室扶私トノ臨床的鑑別ハ主トシテ其發疹ノ性狀部位及熱型ニ依ルヘキモノナリト雖モ小官ハ不幸ニシテ患者ニ就キ其發疹ノ性狀ヲ檢スルノ機ヲ得サリキ尙同町傳染病院醫及開業醫ニ就キ其性狀ヲ質スモ途ニ要領ヲ得スシテ止ミ又今年二月ヨリ七月末日ニ至ル患者三十名ノ病床日誌ニ就キ檢スルニ

發疹患者數
多數ノ發疹チ有セルモノ 十七名(五六、六%)
少數ノ發疹チ有セルモノ 十名(三三、三%)
全ク發疹ナカリシモノ 三名(一〇、〇%)
發疹ノ部位

多數ノ發疹チ有セル者ハ軀幹及四肢ニ及ホシ少數ノ發疹アリシモノハ多クハ胸腹部ニ止リ所謂血疹チ有セルモノハ僅ニ二名ナリ

發疹發生時期

發疹發生ノ狀況ニ就テハ觀察ト記載ヲ缺クテ以テ之レヲ知ルニ由ナシト雖モ病床日誌ニ記載セル二三ノモノニ於テハ何レモ數日間ニ亘リテ發生セルモノハ如シ熱ノ持續 本年發生ノ患者二十九人ニ就キ調査スルニ熱ノ持續ハ短カキハ六日間長キハ十八日間ニシテ(六日乃至八日間)ノモノ二人九日乃至十一日間七人十二日乃至十四日間十三人十五日乃至十八日間七人)持續六日間ノ一人ヲ除ケハ何レモ三日乃至六日間稽留後漸次解熱セリ

斯ノ如ク熱ノ持續短カク且ツ比較的急速ニ解熱スル點ハ發疹室扶私ナル診斷チ下ス一ノ根據ニシテ又實ニ發疹チ前出三例ニ尙能ク發疹室扶私ナル診斷チ下セル理由ナルカ如シ云々

然ルニ腸室扶私病ニシテ熱ノ持續比較的短カキモノアルコトハ既ニ明白ナル事實ナルチ以テ酒田町及其附近ニ發生セル腸室扶私ハ如何ナル經過ヲ取ルモノナルチ比較觀察セリ即チ

酒田町腸室扶私患者同年一月ヨリ七月末日迄ノ發生患者四十五名中全治三十六名ニ就テ發病ヨリ全治ニ至ル日數ヲ調査スルニ三十六名中四週間以内ニ於テ全治セルモノ三十一人即チ八六、一%ヲ占ム

酒田町ノ近村上田村ニ於テ同年六七月ニ涉リ流行セル腸室扶私患者十九名中二名ノ死亡者ヲ除キ十七名ノ全治者中四週間以内ニ全治セルモノ十三人即チ七十六、四%

第三章 本邦ニ於ケル既往ノ流行

ナリ
次ニ發疹空扶私全治患者二十八人中四週間以内ニ於テ全治セシモノハ二十四人即チ八五・七%ナリ

夫レ斯ノ如ク比較觀察スル時ハ酒田町發疹空扶私ハ熱及其他ノ經過ノ上ヨリ途ニ酒田町腸空扶私及上田村腸空扶私トノ間ニ何等ノ差異ヲ發見スルコト能ハス云々

第二 病原的研究

酒田村發疹空扶私ハ果シテ腸空扶私ナルヤ否ヤヲ解決セントセハ既ニ明白ナル腸空扶私ノ病原菌ヲ患者ヨリ檢出スルヲ以テ最モ正確ナル方法トナス然レトモ小官ハ適當ナル患者ニ遭遇セス唯タ恢復患者三名ニ就キ其檢査ヲ二回反覆セシモ途ニ腸空扶私病原菌ヲ檢出スルコト能ハサリシ然レトモ此ノ恢復患者ニ就テ行ヘル二回ノ檢査全ク陰性ニ終リシノ理由ヲ以テ其腸空扶私タルコトヲ否定シ能ハサルハ特ニ言サ要セス尙ホ小官ハ發疹空扶私全治患者ノ發泡液ヲ採取シ腸空扶私病原菌ニ對スル反應ヲ驗セリ蓋シ腸空扶私病ヲ耐過セルモノハ或一定ノ時期内ハ腸空扶私病原菌ニ對シテ一種ノ反應(凝集友應)ヲ呈スルノ事實ハ今日既ニ確定セラレタル事實ニシテ腸空扶私病診斷上最モ簡便ナル方法ナレハナリ

小官カ右凝集反應ヲ檢セル人員ハ二十八人ニシテ發疹空扶私病全治後百四十八日乃至十六日ヲ經過セリ而シテ $1:100$ ノ稀釋ヲ以テ疑ハシキ反應ヲ呈セルモノ十一人即チ四〇・八% $1:100$ 及其以上ニ於テ反應ヲ呈セルモノ十六人即チ五九・二%ナリ尙ホ之ヲ細別スレバ次ノ如シ
 $1:50$ 九人 $1:100$ 五人 $1:1000$ 一人 $1:3000$ 一人

次ニ小官ハ前顯上田村腸空扶私全治患者十二人ノ發泡液ヲ採取シテ其反應ヲ檢セリ右ハ全治後五十八日乃至十二日ヲ經過セルモノニシテ十二人中 $1:100$ 以上ノ稀釋ニ於テ反應ヲ呈セルモノ九人即チ七五%ナリ之ヲ細別スレバ次ノ如シ
 $1:50$ 以下 三人 $1:50$ 以上 七人 $1:100$ 以上 二人

斯ノ如ク患者ノ全治セルモノニ就テ悉ク陽性ノ反應ヲ得サリシト雖其反應試驗成績ノ上ヨリハ少クトモ發疹空扶私ト稱セラレタルモノハ六十%ハ確ニ腸空扶私ナリシコトヲ知り得ヘシ

第三 流行病學的觀察

酒田町ニ於ケル發疹空扶私及腸空扶私ノ流行病學的事實ヲ考フルニ二者ノ流行ハ常ニ相伴ヘリ即チ三十一年乃至三十五年ノ五年間ニ於ケル兩者ノ患者數ハ左ノ如シ

年	發疹空扶私患者數	腸空扶私患者數
明治三十一年	三	六
明治三十二年	三〇	五六
明治三十三年	一九	一五
明治三十四年	一六	九
明治三十五年	一八	一八

又本年一月ヨリ七月ニ至ル兩者ノ月別患者數ハ次ノ如シ

月別	發疹空扶私患者數	腸空扶私患者數
一月	一	一〇
五月	一	一二

大正三年度發疹瘰癧私流行誌

二	月	一	六	月	九
三	月	二	七	月	一四
四	月	五	三	月	四

又本年發生セル地域ニ就テ觀察スルニ發疹瘰癧私及腸窒扶私ハ相伴フテ發生セリ云々
然レトモ由來山形縣下ノ腸窒扶私流行ハ全國ニ冠タルノミニシテ其人口一萬

ニ對スル患者數ハ次表ノ如クナリ

人口壹萬ニ對スル腸窒扶私患者發生表

年次	山形縣	全 國
明治三三年	三・三	五・三
同 三四年	一・四六	五・三
同 三五年	二・〇	四・六
同 三六年	三・六	四・〇
同 三七年	四・〇九	四・六
同 三八年	二・七	四・七
同 三九年	二・七	五・九
同 四〇年	二・〇	五・九
同 四一年	〇・七	四・七
同 四二年	二・二	五・〇
同 四三年	二・七	六・九
同 四四年	三・九	六・六
同 四五年	五・六	六・九
同 四六年	一・〇	五・九
同 四七年	一・〇	六・六
同 四八年	一・〇	五・三
同 四九年	一・〇	五・三
大正元年	一・〇	五・三
平均	二・〇	五・三

即チ既往十五年間ハ毎年人口一萬ニ對シ多キハ卅名少ナキモ十名ヲ下ラサル患者ヲ出シ全國平均數ヲ超ユルコト約三倍ニ達セルハ注意スヘキコトナリトス而已ナラス大正二年防疫官補美野辰治ハ同縣下飽海、南村山、西村山、東田川、南置賜ノ五郡ニ於テ十七町村六十一大字ノ住民一萬六千五百四十一人ニ就キ悉ク發泡液ヲ採取シ之カ腸窒扶私菌ニ對スル凝集力ノ有無ヲ檢セシニ五〇乃至百倍ニテ

反應セル者二千九百七十三名此百分比一八・〇ヲ出セリ就中飽海郡一條村字岡島口ノ住民ハ八〇・九%同郡上田村字刈穂ノ住民及ヒ南置賜郡南原村大字綱木ノ住民ハ共ニ五二・二%ノ陽性者ヲ出セリ而モ其内明カニ腸窒扶私ヲ耐過セルハ約三分ノ一ニ過キスト言フ之レ等ノ事情ヨリ考察スレハ發疹瘰癧私耐過者血清中腸窒扶私菌ヲ凝集スル作用アリシハ或ハ之レト同一ノ關係ニ依ルニアラサル乎

(大正二年一、六、八月山形縣知事報告 防疫官補美野辰治調査)

第六表 山形縣下ニ於ケル一般住民ノ腸窒扶私反應調査表(大正二年調査)

郡名	町村大字	現住人口	検査人員	陽性人員	百分比
飽海郡	九	一〇、〇〇四	九、二八〇	一、五二六	一六・四
南村山郡	一	一、〇六五	九九七	三二七	三二・八
西村山郡	一	一、六九八	一、四七〇	七六	五・二
東田川郡	二	六、四七六	四、五八七	九三六	二〇・四
南置賜郡	一	二、九七	二〇七	一〇八	五二・二
合 計	一七	一九、五四〇	一六、五四一	二、九七三	一八・〇

同上中三〇%以上ノ反應現ハレタル町村ヲ掲ケレハ次ノ如シ

郡名	町村名	大字	検査人員	陽性人員	百分比	郡名	町村名	大字	検査人員	陽性人員	百分比
飽海郡	一條村	岡島口	五六	四五	八〇・九	東田川郡	泉村	川行	八二	三八	四六・二
同	上田村	菊穂	一三四	七〇	五二・二	同	同	小増川	八二	三五	四二・七
同	同	同	四三五	二一三	四八・六	同	同	野荒町	一一三	五二	四二・〇
同	同	同	五五六	二二〇	三九・六	同	同	戸野	一五〇	五一	三三・〇
同	北平田村	安田	二二四	七〇	三一・二	同	同	市野山	一三八	四四	三一・八
同	同	中野會根	一六六	三・三	一・九	同	同	仙道	一六八	五二	三〇・九
南村山郡	東村	葛蒲	四三三	八六	三三・五	同	同	田參侯	二四九	八三	三三・三
同	同	大門	二四九	三三	一三・四	同	同	網木	二〇七	一〇八	五二・二
同	同	古屋敷	一〇五	三三	三一・四	計	南置賜郡	六	一七三、四六三、四〇〇	四〇・四	
東田川郡	泉村	鎌田	七二	三四	四七・一						

備考

陽性ト稱スルハ五〇倍以上ニ稀釋シタル發泡液、腸室扶私菌ニ對シ凝集反應ヲ現ハシタルモノヲ言フ(室温放置二十時間後ノ成績)

最後ニ大正二年ハ全國ヲ通シ一人ノ發疹室扶私患者ヲ見サル年ナリ然ルニ同年六月山形縣ニ於テハ發疹室扶私ノ疑似症ニ對シ傳染病豫防法ノ全部ヲ適用スルノ縣令ヲ發布セリ其茲ニ至レル理由ハ「由來此種ノ傳染病ハ明治十三年他ノ報告ニハ明治十四年尙ホ他ノ報告ニハ明治十八年頃トアリ」以降縣下沿岸地方ニ發生シテ時々大流行ヲ來シタルノ實例アリ醫師ハ腸室扶私ナリトシ或ハ發疹室扶私ナリトシテ其診斷區々ナリシカ明治三十七年故柴山醫學博士ノ研究ヲ請ヒ一度腸室扶私ト確診セラレタル以

來一般ニ腸室扶私ト診斷スルモノ多カリシカ本年四月以降又々縣下西田川郡加茂町ニ同種ノ傳染病發生シ遂ニ三十五名ノ患者續發シ其勢猛烈ナリシヲ以テ數次防疫官補及衛生技師ヲ派シ患者ニ就キ細菌及反應ノ検査ヲ施行シ病系正シキ一死體ノ解剖ヲ行ヒタルニ其結果ハ愈々腸室扶私ニ非ラサルコト判明シ寧ろ發疹室扶私ニ非ラサルヤノ疑ヒヲ生スルニ至レリ今後更ニ一步ヲ進メ適當ノ調査機關ヲ設ケ研究ヲ爲スノ見込ナルモ其ノ病名ヲ確定スルニハ尙多少ノ年月ヲ要スヘク其間徒ラニ病毒ノ散蔓ニ委スルニ於テハ將來如何ナル慘害ヲ醸スニ至ル哉ヲ計ラレサルニ依ル」トセリ以テ山形縣ニ於ケル發疹室扶私ノ消息ヲ窺フニ足ラン

山形縣ニ於ケル發疹性熱病ニ關スル調査報告抄

山形縣知事報告大正二年六月防疫官補美野辰治調査

山形縣庄内地方(東田川、西田川、飽海郡)ニ於テハ明治十九年(他ノ報告ニハ明治十三年或ハ明治十四年頃トアリ)何レカ眞カ酒田町ニ一種ノ發疹性熱病發生セシ以來各地ニ類似ノ疾患ヲ見ルニ至リ或ハ發疹「チフス」ナリトシ或ハ腸「チフス」ノ變型症ナラントシ該地方醫界ノ問題トナレリ而シテ明治三十七年傳染病研究所ノ故柴山博士カ調査シタルニ當時多數ノ腸室扶私患者ヲ混在セルヲ以テ爾後腸室扶私トシテ取扱ヒ來リシモ猶一部ノ醫師間ニハ疑點ヲ挿ム者モ存シ從ツテ縣當局者ニ在リテモ是カ闡明ハ

防疫上ノ關係大ナリトセリ然レニ本年モ又四月下旬以來西田川郡加茂町大字湯野濱及宮澤ニ同病發生セシモ腸室扶私トシテハ疑フヘキモノアルニ依リ之レカ調査ヲナセリ

(第一)流行時間

年々ノ流行狀態ヲ見ルニ本病ハ春季ニ多クシテ夏季ニ消滅ス然ルニ山形縣一般ノ腸室扶私流行ハ毎年八九十ノ三ヶ月間最モ多シ

(第二)感染徑路

家族内或ハ院内傳染多ク今回加茂町ノ流行ニ於テ患者ハ三十二名ナリシカ中避病院看護婦三名事務員一名ノ感染者ヲ生シ其他ノ患者モ消化器系感染徑路ヲ認メ難ク觸接傳染性強キカ如シト云フ

(第三)症候上ノ要點

(一)前驅期之ニ就テノ記載ヲ缺ク

(二)初期症候、結膜炎、咽頭炎ハ常ニ存シ扁桃腺炎及氣管支炎モ亦合併ス顔面多クハ潮紅頭痛及腰痛ヲ訴ヘ腰椎ト薦骨トノ接合部ニ壓痛アリ

(三)熱型、惡寒ニ次クニ急劇ナル昇熱ヲ來シ報告書ニ添付セル體溫表十枚ニ就テ見ルニ發病後一週間前後ヨリ記入セルモノ多ク此關係ヲ詳カニセス次ニ發病第三日ニシテ三十七度五分ナルアリ發病第一日ヨリ記入サレタルモノハ其後四月ニシテ降熱セルヲ見ル體溫ハ三十八度以上四十度内外ニ約七八日間稽留シ後段階狀下降ヲ示セリ之ヲ詳言スレハ全治退院者八名ニ就キ調査シタル所ニ據レハ平均稽留期間七、七六日下降期間三、〇〇日熱持續總日數一〇、七六日ナリ

(四)脉搏報告ニヨレハ腸チフスノ如ク少數ナラズ(體溫表ニ依レハ熱ニ比シ少キモノ、如シ)

(五)發疹、其色紫紅色ニ近ク形狀圓形ナラス周邊不正且ツ不明瞭ニ移行ス其ノ數ハ甚々夥多ニシテ發病第三乃至五日ノ間ニ於テ軀幹及ヒ四肢ニ密發シ往々顔面ニモ發生ス詳言スレハ發疹出現ハ發病ヨリ起算シ平均五、六日其消散ハ發疹後平均四、八日ナリ二十九名ノ入院患者ニ就キ發疹部位ヲ分類スレハ顔面四例(一三、七九%)軀幹二十九例(一〇〇%)四肢十七例(五八、六二%)ナリ

(六)口唇旬行疹、二十八名ノ患者中二名ニ於テ明カニ之ヲ認メタリ

(七)脾腫、檢診時期不明ナルモノ約三十%ニ於テ觸知サレタリ

(八)腹部所見、腹部ハ知覺過敏トナルモノ盲腸部ノ壓鳴音及壓痛ヲ缺キ腸出血ヲ來スモノアルヲ見ス

(九)精神的症候、熱ノ極期ニ於テハ神識稍混濁シ謔語ヲ發スルモノ多シ

(第四)細菌學的觀察

(一)血中ノ細菌檢査、發病第三日ノモノ一名及第九日ノモノ一名ヨリ採取セル血液ノ膽汁培養増菌法ヲ行ヘルニ腸チフス菌ヲ證明セス

(二)糞便中ノ細菌檢査、三名(發病後第八日一名十四日一名十八日一名)ニ就テ糞便ヲ採取シ遠藤氏寒天ヲ以テ分離培養セルニ大腸菌及ヒ該培地ヲ赤變セサル一種ノ菌桿ト諸多ノ球菌、コロニチ生セルモ腸チフス菌ノコロニチ生セス

(三)凝聚反應檢査、十八名ノ在院者ハ發病後三日ノモノ二名、八日一名、九日一名、十一日一名、十二日一名、十四日三名、十五日一名、十六日三名、十七日一名、十八日一名及ヒ候

復退院後ノ一名ニ就テ發疹液ヲ採リ凝聚反應ヲ檢セルニ腸チフスニ對シテハ悉ク陰性ナリキ

(大正二年六月山形縣報告 山形縣技師博士西野忠次郎報告)

伊藤太四郎(三十)剖見記錄

大正二年五月十五日發病同月二十八日午後十一時四十分死亡病歷左記病床調査項目ニ讓ル

五月三十日右側股動脈ヨリ5%ホルマリン約一〇〇〇〇立仙ヲ注入ス

解屍着手 五月三十一日午前九時十八分 一般所見 骨格強健營養身長共ニ中等ノ一男屍ニシテ死強ハ手指及足部ニ於テ僅カニ存シ屍斑ハ下垂部ニ於テ中等度ニ存在ス

皮膚ハ濕潤スレトモ浮腫ヲ認メス腹部稍膨滿低度ノ石盤色ヲ帶ヒ側胸ニ於テ中等數ノ麻痺大迄ノ輪廓不明ノ暗赤色發疹樣物ヲ見ル

皮下結締織ハ脂肪量中等ニ筋肉ノ色深クシテ乾燥ス

腹腔所見 腹腔ヲ開クニ橫隔ノ高サ左右第五肋間ニ適シ腹膜ニ異常ナク腹腔内ノ臟ノ位置尋常癒着ナシ腹腔液ハ中等量ニシテ血色ヲ帶ヒ(死後現象)腸ハ瓦斯ヲ以テ著シク膨滿ス

胸腔所見 胸腔ニ於テ肋膜ニ癒着ナク肋膜腔液少許心囊液ハ血色ヲ帶ヒ(屍後現象)其量約五十ヲ容レ

心臟 ノ大サハ常人ノ手拳大ニ優ルコト僅カニ大ニ心房ハ多量ノ半凝血ヲ含ミ心尖ハ左心ヲ以テ作ラレ外膜ニ肥厚ヲ認メス又出血斑ナシ唯處々ニ血色ニ浸潤セラレ

ノ部アリ(死後現象)

右心ハ多量ノ暗赤色ニシテ硬キ所ノ凝血ヲ以テ充滿サレ前壁大部ノ筋層ハ抗抵著シク断面強ク混濁スルモ下端ノ筋層ハ濕潤シテ質軟ナリ辨膜ニ異常ナシ左心ハ内容ニ乏シク筋肉断面血液ノ色ニ貧シク其筋層ハ中等度ノ混濁ヲ示シ質軟ナリ内膜及辨膜共ニ異常ナシ

筋層ノ厚サ左心ハ約一〇仙ニ右心ハ四ミリヲ算ス

肺臟 左肺上葉ノ各所ニハ少許ノ大小不同ナル肺肋膜下溢血症ヲ示ス上葉ノ質略尋常ナルニ反シ下葉ハ著シク其ノ容積ニ富ミ質殊ニ硬シ断面ハ上葉略々尋常ナルモ下葉殊ニ其ノ硬キ部分ハ著シク血液ノ色ニ富ミ稍々顆粒狀ヲ呈シ且光澤ヲ失フ是ノ部ヲ壓スルニ混濁セル泡沫ヲ含メル血液ヲ壓出セシム

氣管枝粘膜ハ高度ノ充血ヲ示ス氣管枝腺腫脹セス

右肺ノ上中二葉ハ外面及断面略々尋常ニシテ左肺ノ上葉ニ等シキモ下葉ノ大部ハ又著シク容積ニ富ミ且質硬ク断面ノ色暗赤色ニシテ顆粒狀ヲ呈シ光澤ヲ失フ壓スルニ混濁セル血液ヲ壓出セシム

氣管枝粘膜及氣管枝腺ノ狀左肺ト同シ

脾臟 長サ一二仙幅八五仙厚三仙重量一七六〇表面滑澤ニ質柔軟断面血液ニ富ミテ暗赤色ヲ呈シ濾泡ノ造構不明ニ實質断面僅カニ隆起ス

腎臟 左腎長徑一一〇橫徑六〇厚徑四〇仙迷重量一七二〇五質良莖膜剝離シ易ク表面滑澤ニシテ異常ナク断面腫脹セス實質輕度ニ混濁スルモ他ニ異常ヲ認メス右腎ハ長徑一一〇橫徑六〇厚徑四〇仙迷重量一八〇〇左腎ヨリ血液ニ富ムノ外異狀ナシ

肝臓 肝臓ハ一般ニ質増加シ縱徑一三、〇横徑二六、〇厚徑九、〇仙迷重量一四四〇、〇瓦ヲ算ス断面充血シ小葉ノ像稍明瞭ニ實質一般ニ平等性混濁ヲ示スモ限局性病變ヲ認メス又間質ノ増加ナシ

膽嚢ハ粘稠ナル綠色ノ膽汁ヲ以テ充サレ粘膜ニ異常ヲ認メス

頸部諸臓器 頸部諸臓器中舌背ニ於テ乳頭腫脹シ軟度ノ帶褐白色ノ苔ヲ着ケルノ外著變ナク舌根亦著變ナシ

扁桃腺左側ノ者ハ表面凸凹ニシテ充血著シキモ腫大著シカラス内ニ豆大ノ「アプセス」ヲ有シ實質一般ニ充血ス其右側ノモノモ亦麻實大數個ノ「アプセス」ヲ有シ實質一般ニ充血ス

食道ハ少許ノ粘液ヲ以テ被ハル、ノ外著變ナク大動脈ニ異常ナシ氣管粘膜ハ多量ノ泡沫粘液ヲ附着シ著シク發赤腫脹シ所々溢血症ヲ見ル

胃 胃中ニハ數條ノ蛔蟲ヲ容ル、モ食物残渣ニ乏シク粘膜ハ多量ノ粘液ヲ以テ被ハル、モ充血腫脹等ナク又限局病變ヲ認メス

腸間膜腺 腸間膜腺ハ腫脹セス質又硬カラズ断面充血ナシ

骨盤腔諸臓器 骨盤腔諸臓器中攝護腺ハ稍腫大シ左葉硬結シ断面結締織ニ富ム膀胱粘膜ハ「バルケン」著シキ外著變ナシ

直腸粘液異常ナキモ内ニ中等量ノ瓦便ヲ藏ス

睪丸ハ其實質ニ異常ナシ

大小腸 腸管ハ十二指腸ヨリ直腸ニ至ルマテ全部ヲ精檢スルニ小腸全部ハ殆ト空虚ナルモ大腸ハ下端ニ到ルニ隨ヒ次第ニ濃縮セル黄色消化便ヲ藏ス大小腸共其粘膜

ニ充血腫脹等ナリ又孤立濾泡バイエル氏版等モ異常ヲ示サス要スルニ輕症加答兒ノ所見ガモ之ヲ認ムルコトヲ得ス

腦脊髄 頭蓋骨ハ厚クシテ内面滑澤ニ開腔時間隙ヨリ帶黃透明ノ腦脊髄液ヲ漏出ス硬腦膜内面ハ充血ノ外異常ナクフアピオニ一氏顆粒著シク軟腦膜ハ充血シテフアピオニ一氏顆粒ノ部頗ル濕潤スルモ軟腦膜下ニ浮腫ヲ認メス頭蓋底ハ充血ノ外異常ナク腦脊髄液透明ナリ

腦髓ハウキルヒヨ一氏式ニ據リテ之ヲ閉クニ断面著シク血點ニ富ムモ質良ニシテ限局性病變ナシ

脊椎管内面 硬軟脊髄膜及脊髄各部ノ断面共ニ高度ノ充血ヲ示スノ外異常ナシ之ニテ各部ノ剖見全ク終ル時針午後一時五分ヲ指セリ

解剖的診斷

兩側大葉性(沈降性?)肺炎、氣管枝加答兒、兩側扁桃腺膿瘍、輕度ノ脾腫、心筋弛緩、神經中樞高度ノ充血

以上

病床調査項目

住所、氏名	傳染病院事務員	伊藤太四郎	三十六年
職業、年齢			
系統、發病及轉歸月日	病院內感染、大正二年五月十六日發病、五月二十八日死亡		
前驅症	惡寒アルモ戰慄ナク、頭痛、肢痛、倦怠アルモ著シカラス、惡心、嘔吐ナキモ食慾缺損ス		

熱 型 初メ急劇ニ昇熱シ、十三日間持續、急ニ常温下ニ降りテ死亡ス

顔 貌 狀 態 潮江シ痲呆狀ヲ呈スルモ腫脹ナシ

發 疹 狀 態 發病第六日目ニ發顯シ、全身ニ無數ニ密生シ、顔面ニ及ブ、大サハ帽針頭大乃至豌豆大ニシテ、皮面ヨリ少シク隆起セルヨリ周邊ノ輪廓不明ナリ、死ニ至ルマテ消褪セス

ヘルペス 發顯ナシ

脈 搏 初期ハ重搏ニシテ體温ニ比シ少ナカリシモ后チ増加シ極期ニ至リ微少トナル

心 音 末期ニハ不純ナリ

脾 腫 明カニ觸知シ難シ

神 識 發病第七日ヨリ混濁シ死ニ至ルマテ繼續セリ

諸 語、嗜 眠 喃々諸語スルモ嗜眠ナシ

又ハ發 痛 頭痛、四肢痛アレントモ著シカラス、腰痛劇甚ニシテ腰椎ハ薦骨トノ接合部に於テ壓痛ヲ訴フ

舌 黃白色苔ヲ被リ舌震顫アリ

腸 又便秘 發病七日目軟便多量アリ爾後便秘ス 盲腸部ニ「ガ」音アルモ鼓腸疼痛ナシ

尿 ガアツオ反應及蛋白反應ナシ

呼 吸 器 氣管枝炎アリテ咳嗽、咯痰アリ音聲啞嘶及鼻加答兒ナシ

其他初期ヨリ結膜炎著明ニシテ耳聾、アリ又口内咽喉、扁桃腺充血ス

神經症狀 著明ニシテ精神昏睡臥床ニ轉變シ且ツ戰慄スルコト指端鼻尖「チアイセ」ヲ呈シタリ

第四章 病毒輸入ノ系統

本邦ニ於ケル發疹室扶私ノ病毒ハ恐クハ天然痘又ハ虎列刺ト其軌ヲ同フシ海外ヨリ輸入セシモノナランモ其時代及渡來ノ狀況ニ至ツテハ何等徵知スヘキモノナシ況ンヤ明治八九年以降流行シタル發疹室扶私スラ發疹多キ腸室扶私ノ誤診ナリトセルニ於テヲヤ故ニ往時ニ於ケル病毒ノ存否ハ姑ク置キ近時病毒ヲ輸入シタリト稱スルモノニシテ前章顯ハレサルモノヲ掲クレハ大略左ノ四項ナリトス

一 青森縣弘前市ニ於ケル安政年間ノ流行

古老ノ言ニ依レハ今ヲ距ル五十六年前即チ安政六年青森縣ノ凶作ニ際シ弘前市ニ惡性ノ麻疹流行シ大人ノ之レニ侵サル、者多ク毎日四五十名ノ死亡者ヲ出シタリト言フ當時ノ戶數、人口、流行期間等ヨリ推考スレハ約一萬五千ノ患者ヲ出シタルモノ、如ク特ニ大人ヲ侵シタル點及傳染ノ猛烈ナルト熱及發疹等ノ狀態ヨリ綜合スレハ恐ラクハ發疹室扶私ナリシナラン

(青森縣ノ報告)

二 山形縣飽海郡方面ニ於ケル病毒輸入

明治十四、五年ノ交露領浦鹽斯德ノ住民飽海郡ノ海岸ニ漂着シ宿泊シタル以來腸室扶私ノ變型的熱性病流行セリ是レ今日ノ發疹室扶私ノ先蹤ナリシコト更ニ疑ヲ容レズ

(山形縣報告)

三 明治二十七年、八年戰役時ノ病毒輸入

明治二十七年、八年戰役ノ際同二十八年四月、五月ノ交廣島豫備病院ニ收容セル戰地還送患者中ニ本病ノ發シタルモノ二十餘名アリソノ傳染源ハ清國ニアリテ皆固有ノ熱型及發疹等ノ症ヲ呈シ軍醫ノ之ニ感染シテ斃レタルモノアリ當時尙ホ確診ノ域ニ達セス一種ノ腸室扶私トシテ人ノ注意ヲ牽キシモ今回戰役ノ結果ニ徴スレハソノ發疹室扶私ナリシコトハ殆ト疑フヘカラサルモノ、如シ

(明治三十七、八年役陸軍衛生事蹟第三卷第一編)

(明治二十七年、八年戰役陸軍衛生史第五卷第二編)

(明治二十七年、八年役陸軍衛生事蹟第三卷第一編)

症候 潜伏期ニ於テハ時々四五分ノ體溫昇騰ヲ示スコトアルノ外特ニ記スヘキモノナシ

一般ニ言ヘハ病ハ頭痛惡寒ヲ以テ始リ或ルモノハ腰痛關節痛ヲ訴ヘ徐々ニ體溫ノ昇

騰ヲ來シ三四日ニシテ其極點ニ達シ頭痛益劇シク顔面潮紅舌乾燥シ口渴甚シク食氣振ハス胸腹部及四肢ニ多數ノ普發疹ヲ發生シ右胸骨高二ハ腰痛アリ脾臟肥大シ重聽アリ往々譫語ヲ發シ神識溷濁ス極期ハ通例七八日ニシテ其間體溫稽留シ最高熱ハ概ネ四〇、五ヲ超ユ此ノ如クニシテ減退期ニ移レハ同シク三四日ニシテ體溫階段狀ニ下降シ同時ニ諸症漸ク消退ス

其他或ルモノハ血或ルモノハ腓腸筋項筋ノ握痛ヲ呈セリ下熱時ニ發汗甚シクシテ汗疹ヲ發セシモノアリ氣管支炎ハ患者ノ過半數ニ併發シタリ便ハ多數ノ患者ニ秘結シ下痢アルモノハ甚々少數ニシテ便通尋常ナルモノ亦少カラス高熱十日以上ニ達シ腦症最モ甚シキ一患者ハ下熱後三日間猶神識ノ復舊ヲ見サリキ他ノ患者ハ四〇、〇以上ノ高熱十一日ニ亘リ最高四一、〇ヲ超エシカ他ノ腦症ト共ニ兩便失禁ヲ發シタリ熱型ニ關シ注目スヘキハ大體ニ於テ殆ト同一ノ摸型ヲ以テ鑄造シタルカ如ク凡テ整然一様ノ觀ヲ呈スルコト及熱型ニ著シク規則正シキ點アルコト是ナリ

概言スレハ此熱型ハ増進期極期減退期ノ三部ヨリ成リテ決シテ不定期ヲ示サス増進期及減退期ノ體溫ノ昇降ハ共ニ階段狀ニシテ其日數ハ彼此殆ト常ニ相同シク又極期ニ於テハ必ス高熱ノ稽留ヲ示シ最高極ハ殆ト皆四〇、五ヲ超エ四一、三及四一、四ノモノ各一名アリ然レトモ夜細ニ觀察スレハ増進期及減退期ニ於テ各三種ノ別アリ先ツ増進期ニ就キテ言ヘハ一日ニシテ三七、五ヨリ四〇、三ニ進メルモノアリ此ノ如キハ最モ破格ノ例ナレトモ漸進スルモノニ亦二種ノ別アリ甲ハ前日ノ夕溫ニ比シ翌日ノ朝溫著シク下降シ只前日ノ朝溫ヨリモ稍高ク甚キハ却リテ之ヨリモ低シ而モ其夕ニ至レハ一躍シテ前日ノ夕溫ヲ超エ此ノ如クニシテ極期ニ達ス之ニ反シ乙ニアリテハ翌

大正三年度發疹室扶私流行誌

日ノ朝溫粗前日ノ夕温ニ同シタタニ至レハ更ニ高シ故ニ甲ニアリテハ體温曲線概齒狀ヲナシ乙ニアリテハ稍一直線ニ近シ而シテ甲乙二種ノ間ニハ種々ノ中間形アリ減退期ニ於ケル體温下降ノ狀態モ亦之ニ同シ即殆ト分利狀ニ下降シ他ハ皆階段狀ニ下降セリ

轉歸

前記二十三名ノ患者中ニハ既ニ述ヘタル如ク劇甚ノ腦症ヲ發シタルモノ四一、四ノ高熱ヲ示シタルモノ慢性腎臟炎ヲ續發シタルモノ等アリシモ一時病勢ノ猛烈ナルニ似ス悉ク全治シテ何等ノ後害ヲ貽サス是レ一ニ熱期ノ短キニ由ル

四 明治三十七八年戰役時ノ病毒輸入

明治三十七八年戰役時ノ發疹室扶私流行ハ三十八年一月ヨリ殆ト一地方ニ局限性ニ流行シ法庫門附近ニ集中シタル單團ヲ襲ヒ是等部隊ニ多發シ少數例ヲ遠隔セル旅順鏡城ニ散見シソノ他ハ該方面ヨリ還送シタル傷病者ヲ侵シ還送途中又ハ内地豫備病院ニ於テ發生ヲ見タリ其ノ詳細ハ左表ノ如ク戰地ニ於テハ法庫門附近内地ニ於テハ大阪廣島ノ豫備病院ニ多發シタリ

(明治三十七八年戰役陸軍衛生史第五卷第二編)

明治三十七八年戰役時ニ於ケル發疹室扶私發病地及發病年月別表

發病地	明治三十八年												同三十九年	不詳合計			
	一月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十一月	十二月	一月	三月					
法庫門附近																	
柴河堡附近																	
開原附近																	
鐵嶺附近																	
奉天附近																	
沙河堡附近																	
遼陽附近																	
海城ヨリ大連ニ至ル汽車中																	
旅順附近																	
大連兵站病院在院中																	
鏡城(韓國)																	
計																	
送還航海中																	
門司																	
廣島豫備病院在院中																	
神戸停車場上陸當日																	
大阪豫備病院在院中																	
大阪(駐屯中)																	
未詳																	

一	計	九	五	九	四	一	一	一	二	二	二	二	三	三
合	計	九	五	三	三	六	二	二	二	一	二	二	三	三

第五章 今回ノ流行狀況

其一 流行ノ概要

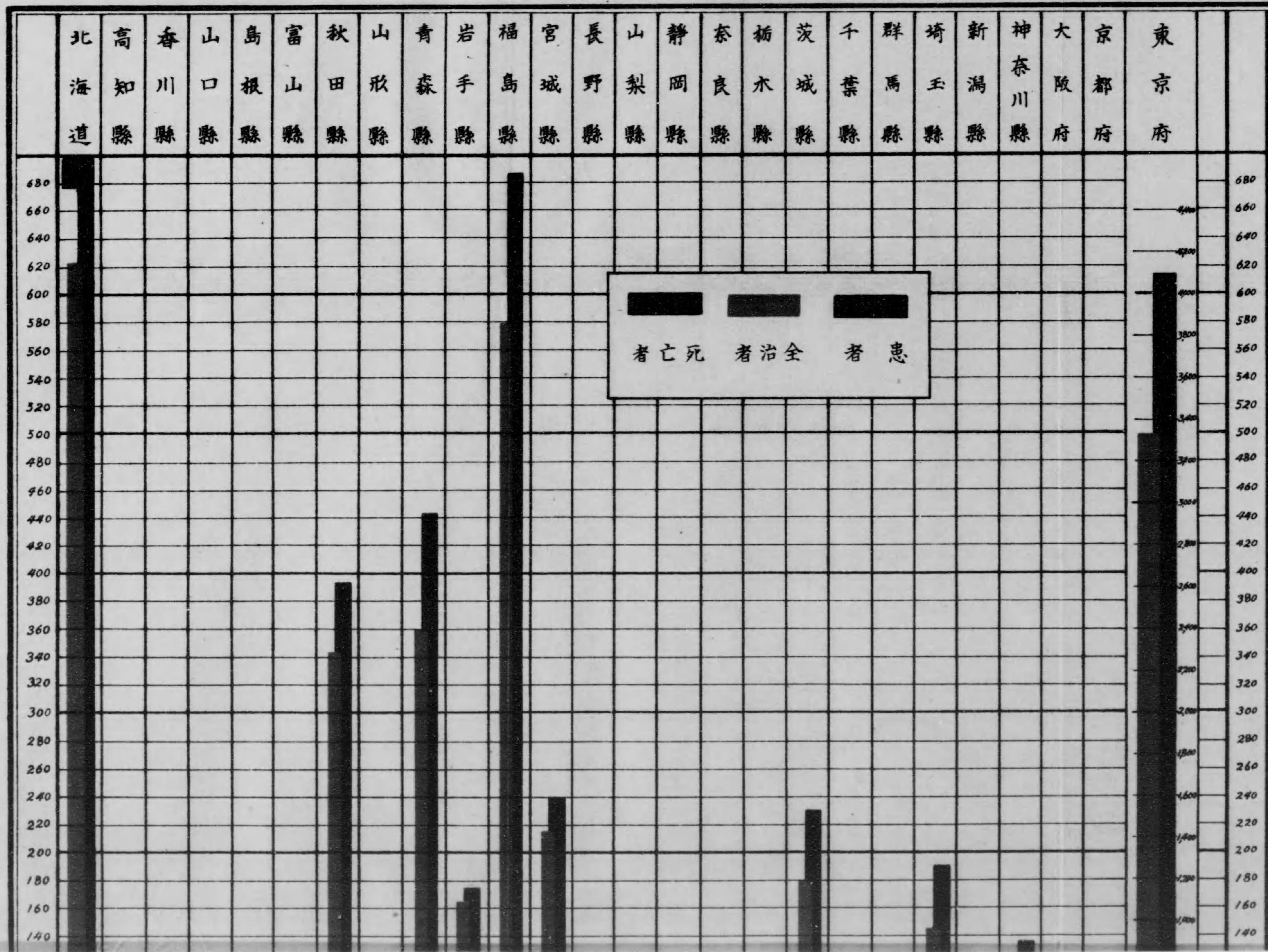
本邦ニ於ケル發疹室扶私ハ前章既ニ反覆詳論シタルカ如ク、明治二十年以前ハ毎年數千ノ患者ヲ出シタルモ二十一年以來ハ頓ニ減少シ年年ノ患者數ハ百名内外トナリ更ニ明治三十八年以降ハ殆ント全滅シテ一ケ年ノ患者十名ヲ超ユルコトナク殊ニ大正二年ノ如キ全國ヲ通シ一名ノ患者ヲ見サルニ至レリ

斯ノ如キハ畢竟衛生思想ノ發達ト衛生設備ノ完整ニ職由スルヤ勿論ナリト雖モ又一面本邦ニハ發疹室扶私ノ病芽ナク從來發疹室扶私ト稱セシハ發疹多キ腸室扶私ニ外ナラステフ學說ノ勢力アリシコトモ亦本病患者ヲ激減セシメタル一因ナリト謂ハサルヘカラス

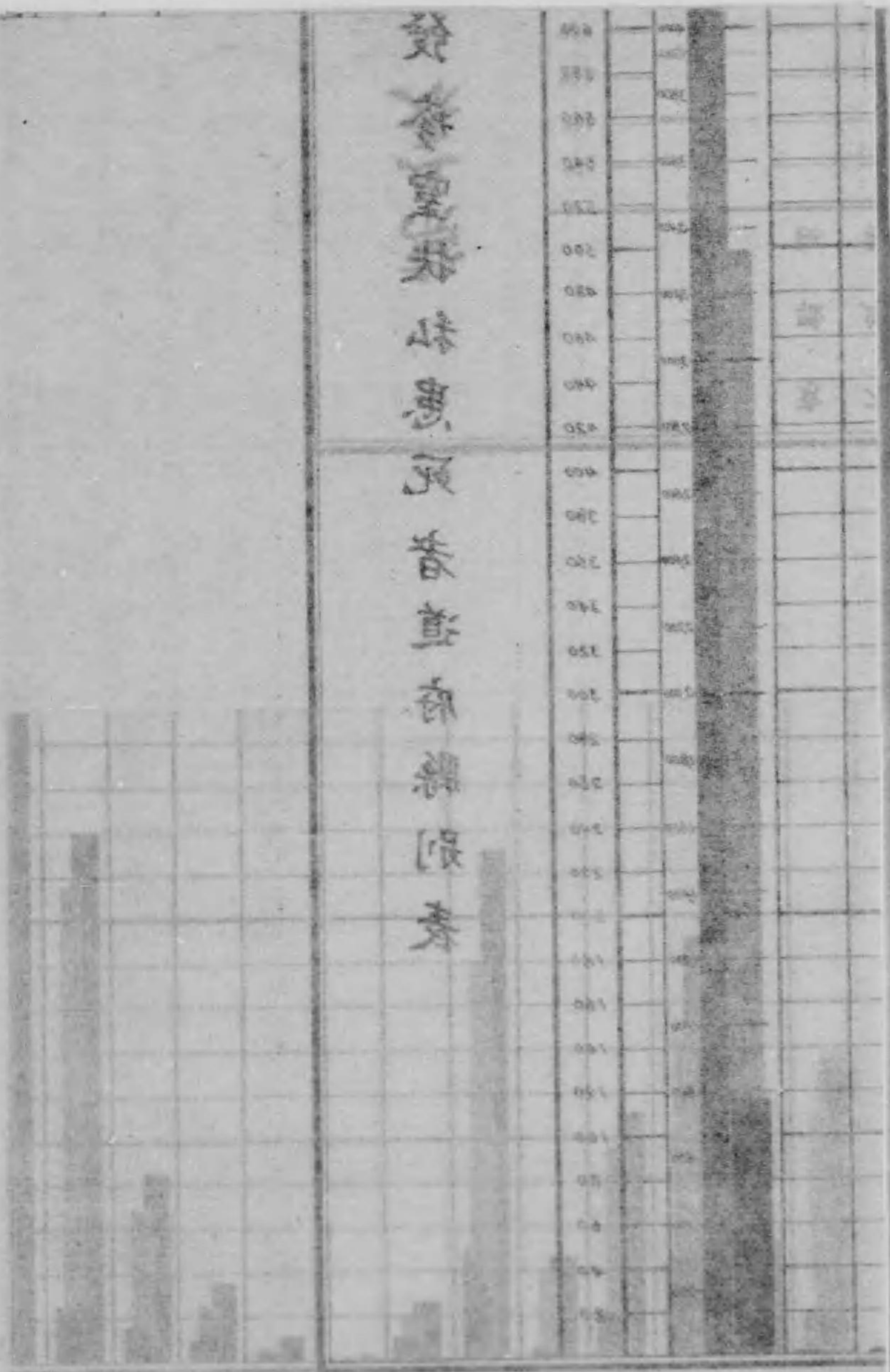
然ルニ大正三年二月中旬若クハ其ノ以前ヨリ東京市本所區内ノ木賃宿止宿人間ニ一種ノ發疹性熱性病發生シ間モナク深川淺草其ノ他ノ木賃宿、合宿所職業紹介所等ニ蔓延シ、病熱頗ル猛烈ナルヲ以テ三月七日以來假ニ發疹性熱性病ナル名稱ヲ附シ、發疹室扶私ノ豫防法ニ則リ之レカ撲滅ヲ企劃シ兼テ病原ノ檢索ニ努メタル結果三月十六日ニ至リ、東京市立駒込病院長ニ依リ發疹室扶私ト決定セリ、之レ今回我國ニ於テ發疹室扶私ノ存在ヲ確認シタル嚆矢トス

而シテ其ノ一度發疹室扶私ナルコトヲ公表スルヤ僅ニ一週間ヲ經テ北海道ニ現ハレ、次テ千葉縣ニ發生シ、翌四月ハ東京附近七縣、東北五縣、關西二縣、計十四縣ニ蔓延シ、五月ハ新潟、岩手、京都、島根、香川ノ五ヶ所ニ新患者ヲ出シ、又六月ハ富山、奈良、高知ノ三縣ヲ加ヘ、七月ハ大阪ニ發生シ、遂ニ一道三府二十三縣ヲ算フルニ至レリ、然レトモ其ノ主ナル發生地ハ殆ント日本本土中央以北ニ限局セリ、即チ北半面ハ富山ヨリ長野ニ走レル飛彈山脈ヲ、南半面ハ長野ヨリ静岡ニ流ル、天龍川ヲ界トシ、其ノ以北ニ位スル一道一府十七縣ニシテ中央以南ハ京都、大阪、奈良、島根、山口、香川、高知ノ二府五縣ニ患者ヲ出シタルモ多クハ流行地ヨリ歸來シタル者又ハ系統明カナラサル者等僅ニ一二名宛ヲ出シタルニ過キス

第五表 發疹室扶私患死者道府縣別表



發熱、嘔吐、腹痛、瀉、昏、重、綿、限、毒



彼上ノ地方ニ於テ本病ト決定シタル患者ノ總數ハ七千八百二十八名ナルモ其
 ノ五割三分ハ東京府下ニ顯ハレ三割五分ハ北海道及東北六縣ヨリ發生シ爾餘ノ
 一割二分ハ二府十六縣ノ產出ナリ又死亡者ノ總數ハ千三百四十五名ニシテ患者
 百ニ對スル割合ハ一七、一八ナリ就中五十名以上ノ患者ヲ出シタル十四道府縣中
 死亡率ノ高カリシハ埼玉縣ノ二三、四〇トシ低カリシハ岩手縣ノ五六、八ニシテ其
 他ノ府縣ハ其ノ中間ニ在リ斯ノ如ク死亡率ニ大ナル懸隔ヲ生シタル因由ハ種々
 アルヘキモ概シテ夏期ニ近ツキテ流行シタル所又ハ氣候温暖ナル地方若クハ壯
 年者ノ罹患者多キ場所ハ比較的死亡率低カリシモノノ如シ。尙ホ東京及東北方
 面ニ患者殊ニ多カリシ所以ハ一ニシテ足ラスト雖モ本流行ハ北方ヨリ始マリ漸
 次南下シタルノ形迹アリテ關西ハ爲ニ其流行少カリシト東京ハ其ノ當初木賃宿
 合宿所、無料宿泊所、職業紹介所又ハ貧民部落等下層労働者ノ群居スル場所ヲ襲ハ
 レタル爲多數ノ患者ヲ生シタリ又東北地方ノ生活狀態ヲ見ルニ下層民ハ關西方
 面ノ夫レニ比シ生活程度低ク加フルニ大正二年ノ凶歉ハ一般ニ衛生狀態ヲ不良
 ナラシメタル嫌アリ又家屋ノ構造ハ防寒ニ急ニシテ採光換氣ヲ缺キ、無血虫族ノ
 寄生スル者多ク且ツ氣候寒冷ニシテ洗濯ハ温湯ヲ要シ加フルニ被服ハ殆ント綿

入ナルカ然ラサレハ肉厚ク容易ニ洗濯スル能ハサルノミナラス、快晴ノ日少ナキヲ以テ日光乾曝意ノ如クナラサル等ハ何レモ本病ノ蔓延ヲ助長スルモノニシテ深キ關係ヲ有スルモノト思料セラル。次ニ之レカ流行期間ハ東京府下ヲ二月一日ノ發生トスレハ岩手及青森ニ於ケル十二月十九日ノ最終發生マテ月ヲ累ヌルコト十一ヶ月、日ヲ積ムコト三百二十三日ニシテ一日ノ發生患者數平均二四、二四ニ該當シ、其ノ發生地タル一府三縣ノ流行延日數ハ實ニ三千〇八十七日トナリ、其ノ一日ノ平均患者數ハ二、八五四ヲ出シタル割合ナリ

The table is a large grid with approximately 20 columns and 40 rows. The rightmost columns contain some text and numbers, possibly representing dates or specific data points. The rest of the grid is mostly blank, suggesting it was used for recording data during the study period.

青森縣發疹症發生經過表

年	月	日	場所	患者數	死亡數	備考
1914	1	1	青森市	1	0	
1914	2	1	青森市	2	0	
1914	3	1	青森市	3	0	
1914	4	1	青森市	4	0	
1914	5	1	青森市	5	0	
1914	6	1	青森市	6	0	
1914	7	1	青森市	7	0	
1914	8	1	青森市	8	0	
1914	9	1	青森市	9	0	
1914	10	1	青森市	10	0	
1914	11	1	青森市	11	0	
1914	12	1	青森市	12	0	
1915	1	1	青森市	13	0	
1915	2	1	青森市	14	0	
1915	3	1	青森市	15	0	
1915	4	1	青森市	16	0	
1915	5	1	青森市	17	0	
1915	6	1	青森市	18	0	
1915	7	1	青森市	19	0	
1915	8	1	青森市	20	0	
1915	9	1	青森市	21	0	
1915	10	1	青森市	22	0	
1915	11	1	青森市	23	0	
1915	12	1	青森市	24	0	
1916	1	1	青森市	25	0	
1916	2	1	青森市	26	0	
1916	3	1	青森市	27	0	
1916	4	1	青森市	28	0	
1916	5	1	青森市	29	0	
1916	6	1	青森市	30	0	
1916	7	1	青森市	31	0	
1916	8	1	青森市	32	0	
1916	9	1	青森市	33	0	
1916	10	1	青森市	34	0	
1916	11	1	青森市	35	0	
1916	12	1	青森市	36	0	
1917	1	1	青森市	37	0	
1917	2	1	青森市	38	0	
1917	3	1	青森市	39	0	
1917	4	1	青森市	40	0	
1917	5	1	青森市	41	0	
1917	6	1	青森市	42	0	
1917	7	1	青森市	43	0	
1917	8	1	青森市	44	0	
1917	9	1	青森市	45	0	
1917	10	1	青森市	46	0	
1917	11	1	青森市	47	0	
1917	12	1	青森市	48	0	
1918	1	1	青森市	49	0	
1918	2	1	青森市	50	0	
1918	3	1	青森市	51	0	
1918	4	1	青森市	52	0	
1918	5	1	青森市	53	0	
1918	6	1	青森市	54	0	
1918	7	1	青森市	55	0	
1918	8	1	青森市	56	0	
1918	9	1	青森市	57	0	
1918	10	1	青森市	58	0	
1918	11	1	青森市	59	0	
1918	12	1	青森市	60	0	

病毒ノ系統ニ就テハ確證ヲ得ル能ハス或ハ近來海外ヨリ何レカノ地ニ輸入シ
 タルナキヤヲ保シ難シト雖又其ノ原因ノ内地ニアリタリトモ考ヘラレサルニモ
 非ス從來一般ノ風潮ハ本邦ニ發疹室扶私ノ病毒存在セストシ又實際昨大正二年
 ノ如キ公ノ取扱ヲ受ケタル患者一名モナカリシニ依リ在來ノ病毒ヲ基原トナス
 ハ不合理ナルカ如キモ山形縣庄内地方ニハ前章既ニ詳記シタル如ク明治十四五
 年以來病毒ノ存續シタル事疑ナク又青森縣ニ於テモ明治四十一年以來毎年弘前
 市ヲ中心トシ其ノ附近ニ一種ノ發疹性熱性病流行セシ事實ハ同縣ノ部ニ掲ケタ
 ル所ニシテ之レ亦本病ノ疑ナシトセス其ノ外北海道ニ於テモ明治四十五年以降
 鐵道布設地、炭坑地、漁場等ニ臨床上本病類似ノ疾病發生シ、再歸熱、腸室扶私、バラチ
 フスト共ニ流行シタルコト確實ナルノミナラス、大正三年一月中旬以來函館無料
 宿泊所ニ於テハ再歸熱及バラチフスト共ニ一種ノ熱性病流行セリ、其ノ症狀ハ頗
 ル險惡ニシテ發疹ヲ有シ而モ消毒人夫及臨檢警察官等ノ多數ヲ襲ヒタル等今日
 ヨリ之レヲ追想セハ發疹室扶私ト推斷スヘキモノナシトセス

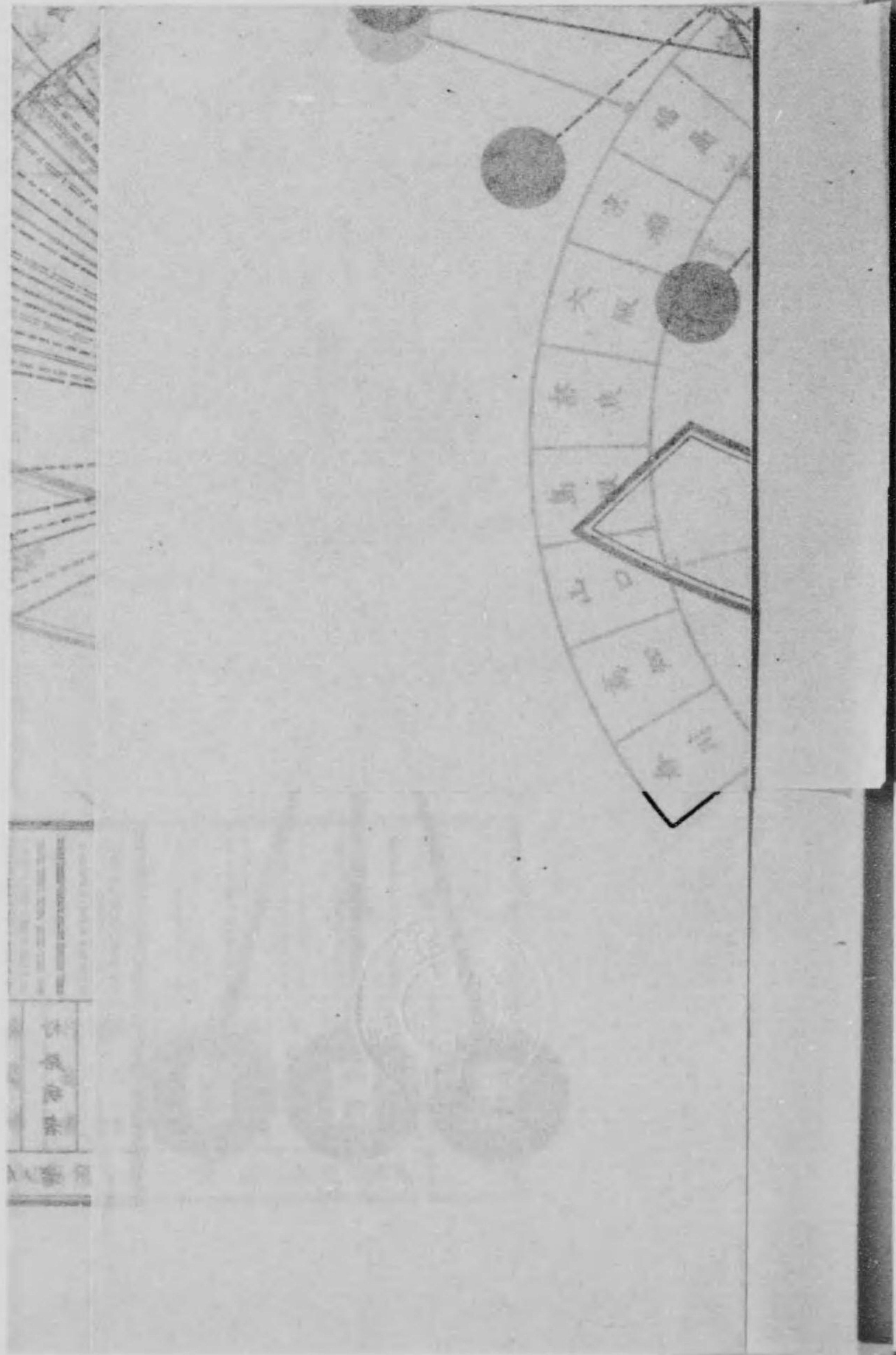
如上山形、青森、北海道等ニ存續セリト認ムヘキ病毒ヲ今回ノ流行原因トセハ東
 京府下ノ發生及其ノ蔓延關係ハ頗ル明カナリ、何トナレハ東北地方ノ農民ハ冬季

積雪ノ候ハ農事ヲ營ム能ハサルヲ以テ避寒ヲ兼ネ東京方面ニ出稼キスル者毎年多數ナルニ大正二年ハ東北地方一般ニ凶作ナリシ爲メ此ノ種ノ出稼者著シク増加シタル傾向アリ又函館無料宿泊所ニ於テハ前項ノ如ク止宿人間ニ一種ノ傳染病續發シ附近ノ苦情ニ堪ヘサルヲ以テ旅費ヲ給シ内地ニ還送シタル者二百餘名ニ及ヘリ是等出稼労働者中ニハ庄内及弘前方面ノ者モアリタルヘク又還送者中ニハ病毒潜伏中ノ者ナシトセサルヲ以テ是等ハ先ツ本所、深川、淺草方面ノ安宿、下宿屋、又ハ合宿所、無料宿泊所、職業紹介所等ニ病芽ヲ殖ヘ、衛生設備ノ缺陷ニ培ヒ、流離常ナキ下層労働者遊藝稼人、浮浪者等ニ依リ病毒ヲ市内ニ撒蔓セシメタルモノト推定スルヲ得ヘケレハナリ。

又各地方ニ病毒ヲ撒蔓セシメタルハ東京、福島、神奈川、埼玉、青森、茨城、群馬、北海道、新潟、岩手、山形ノ一道、一府、九縣ニシテ病毒ノ侵襲ヲ蒙リタル府縣ハ埼玉、群馬、千葉、茨城、栃木、神奈川、静岡、山梨、長野、富山、福島、宮城、岩手、秋田、山形、青森、北海道、京都、山口ノ一道一府十七縣ナリ。次ニ病毒ヲ撒蔓シタル府縣ト病毒ノ侵襲ヲ蒙リタル府縣數竝ニ其ノ回数ヲ記セハ、東京府ハ十八縣ニ撒蔓セシメタルコト六十三回ニシテ、福島縣ハ四縣ニ五回、神奈川縣ハ三縣ニ五回、埼玉縣ハ三縣ニ三回、青森縣ハ三縣ニ

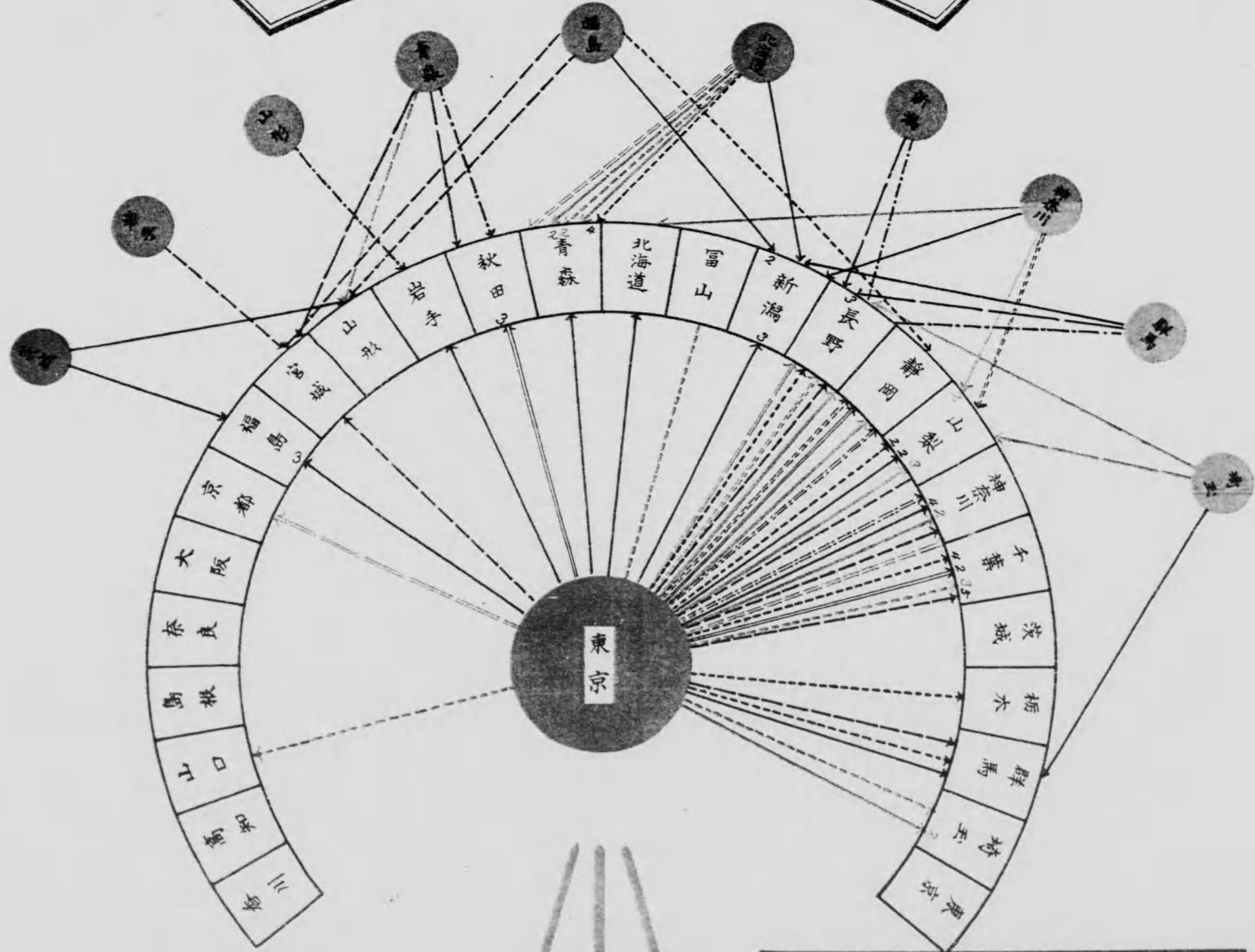
三回、茨城縣ハ二縣ニ二回、群馬縣ハ二縣ニ五回、北海道ハ二縣ニ十一回、新潟縣ハ一縣ニ二回、岩手縣及山形縣ハ一縣ニ一回宛ナリ、其ノ内既ニ發病シタル者ニ依リ輸入セラレタルハ神奈川、埼玉、千葉、静岡、山梨、長野、富山、山口、青森、北海道ノ一道九縣ニシテ、潜伏期中ノ者ニ依リタルハ神奈川、静岡、山梨、長野、青森、北海道(以上重複)、新潟、群馬、栃木、宮城、福島、岩手、秋田、山形ノ一道十四縣物件ニ依リタルハ京都、長野ノ一府一縣ナリ、又系統ノ全ク不明ナルハ東京府ヲ除キ一府五縣ナリ。

病毒傳播ノ系統明カニ知り得タルモノニ付テ調査スレハ、労働者、出稼人等ニ依ル病毒ノ傳播ハ三十八回ニシテ、流行地ヨリノ歸來者二十二回、旅行者、交通者十四回、乞丐、浮浪徘徊者九回、大正博覽會見物者六回、遊藝稼人四回、行商者三回、看護婦、行路病者、物件各二回宛ナリ。其ノ内發病者ニ依ル傳播二十九回ニシテ、潜伏期中ノ者七十一回、物件ノ媒介シタルコト二回トス、其ノ詳細ハ第二圖及第七、第八、第九表ノ示ス所ナリ。



Faint, illegible text or markings on the right page, possibly bleed-through from the reverse side or very light handwriting.

病毒傳播系統圖



三槍	高知	山口	島根	奈良	大阪	京都	福島	宮城	山形	岩手	秋田	青森	北海道	富山	新潟	長野	靜岡	山梨	神奈川	千葉	茨城	栃木	群馬	埼玉	東京
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----	----	----	----

毒病	縣府ルタメシセ播傳ヲ毒病											發病ノ種類					
	神奈川縣	千葉縣	栃木縣	群馬縣	埼玉縣	山形縣	慶喜縣	新潟縣	北海道	青森縣	茨城縣	群馬縣	東京府	福島縣	神奈川縣	發病以後ノ者	發病以前ノ者
人稼働者	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
者來歸	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
者行旅交	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
濶浮乞僻者	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
者商行	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
路行者	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
人稼働者	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
者來歸	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
者行旅交	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
濶浮乞僻者	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
覽博正大會人物	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
藝人遊稼	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
者商行	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
婦護看	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
件物	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計合	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

縣府ルタリ蒙ヲ襲侵ノ	縣府ルタリ蒙ヲ襲侵ノ													
	山梨縣	靜岡縣	長野縣	新潟縣	富山縣	北海道	青森縣	秋田縣	岩手縣	山形縣	宮城縣	福島縣	京都府	山口縣
山梨縣	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
靜岡縣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
長野縣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
新潟縣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
富山縣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
北海道	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
青森縣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
秋田縣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
岩手縣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
山形縣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
宮城縣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
福島縣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
京都府	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
山口縣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

以上叙説シタル所ハ今回流行ノ梗概ナルヲ以テ以下更ニ患者ノ發生府縣別、患者ノ發生月別、患者ノ發見區別、患者ノ發病所別、患者ノ職業關係、體性及年齡別、潜伏期間、職務感染者等ニ就キ統計的ニ詳説スヘシ

患者發生府縣別

今回ノ流行ニ際シ病毒ノ侵襲ヲ蒙リタルハ一道三府二十二縣ニ於テ四區二十

三市百八十郡ニ及ヘリ。又其ノ患者數ハ七千八百二十八名ニシテ死者一千三百四十五名此ノ死亡比例一七一八ナルハ既ニ述ヘタル所ナリ。就中最モ多數ノ患者ヲ出シタルハ東京府下ノ四千百十九名ニシテ總患者ノ五割三分ヲ占メ、第二ハ北海道ノ七百二十一名〇九分強、第三ハ福島縣ノ六百八十八名〇八分強ナリ。次ニ患者五百乃至百以上ヲ出シタル縣ノ順位ハ青森、秋田、宮城、茨城、埼玉、岩手、神奈川、山形、群馬、ノ九縣トシ、其ノ患者數ハ二千〇二十九名、總患者ノ二割六分ヲ占メ、百名乃至十名以上ヲ出シタルハ長野、新潟、千葉、山梨、栃木、静岡ノ四縣ニシテ其他ノ二府七縣ハ僅ニ一二名宛ナリ。

又患者發生府縣ヲ地形ニ依リ大別スレハ東京ヲ中心トセル一府十一縣ト、東北及北海道ニ亘ル一道六縣及京都以西ノ二府五縣トノ三團ニ區別スルヲ得ヘク、其ノ内東京ヲ中心トセル一團ハ發生地域十二市九十五郡ニシテ患者五千〇三十九名ヲ算シ、總患者ノ六割四分ニ達セリ、就中流行ノ劇甚ナリシハ東京府ニシテ其ノ八割二分ヲ占メ、他ハ百名以上ニ上リタルモノ四縣百名以下ノモノ七縣ナリ、其ノ甲ハ茨城、埼玉、神奈川、群馬ノ順序ニシテ、乙ハ長野、新潟、千葉、山梨、栃木、静岡、富山ノ順位ナリ。東北及北海道ノ一團ハ何レモ百名以上ノ患者ヲ出シタルモノ其ノ内最モ

多キハ北海道及福島縣ニシテ青森、秋田、宮城、之レニ亞キ岩手、山形ハ割合ニ少ナシ。此方面ニ於ケル流行地域ハ四區九市八十郡ニシテ患者二千七百七十五名ヲ算シ、京都以西ノ一團ハ所謂流行地ノ飛火ニ過キサリシヲ以テ發生郡市數二市六郡、患者僅ニ十四名ナリ。

如上發生府縣ノ現住人口ト發生患者ノ割合ヲ調査スルニ其ノ平均ハ人口十萬ニ對シ、一四・五九ナルモ東京府ハ一四・五・二三ニ昇リ、青森縣ノ五八・六三、福島縣ノ五三・八九之レニ次キ、秋田縣ハ四二・三二、北海道ハ四一・八〇ナリ。其ノ他ハ遙ニ下ツテ宮城二五・八四、岩手、茨城、埼玉、山形、神奈川之レニ次キ、群馬ハ一一・〇九ナリ。此外人口十萬ニ對シ一人以上ヲ出シタルハ山梨、長野、千葉、新潟、栃木ニシテ其ノ山梨ハ六〇・七、栃木ハ二六・七、長野、千葉、新潟ハ其ノ中間ニ在リ。爾餘ノ二府七縣ハ孰レモ一人以下ノ割合ナリ。(第三圖參照)

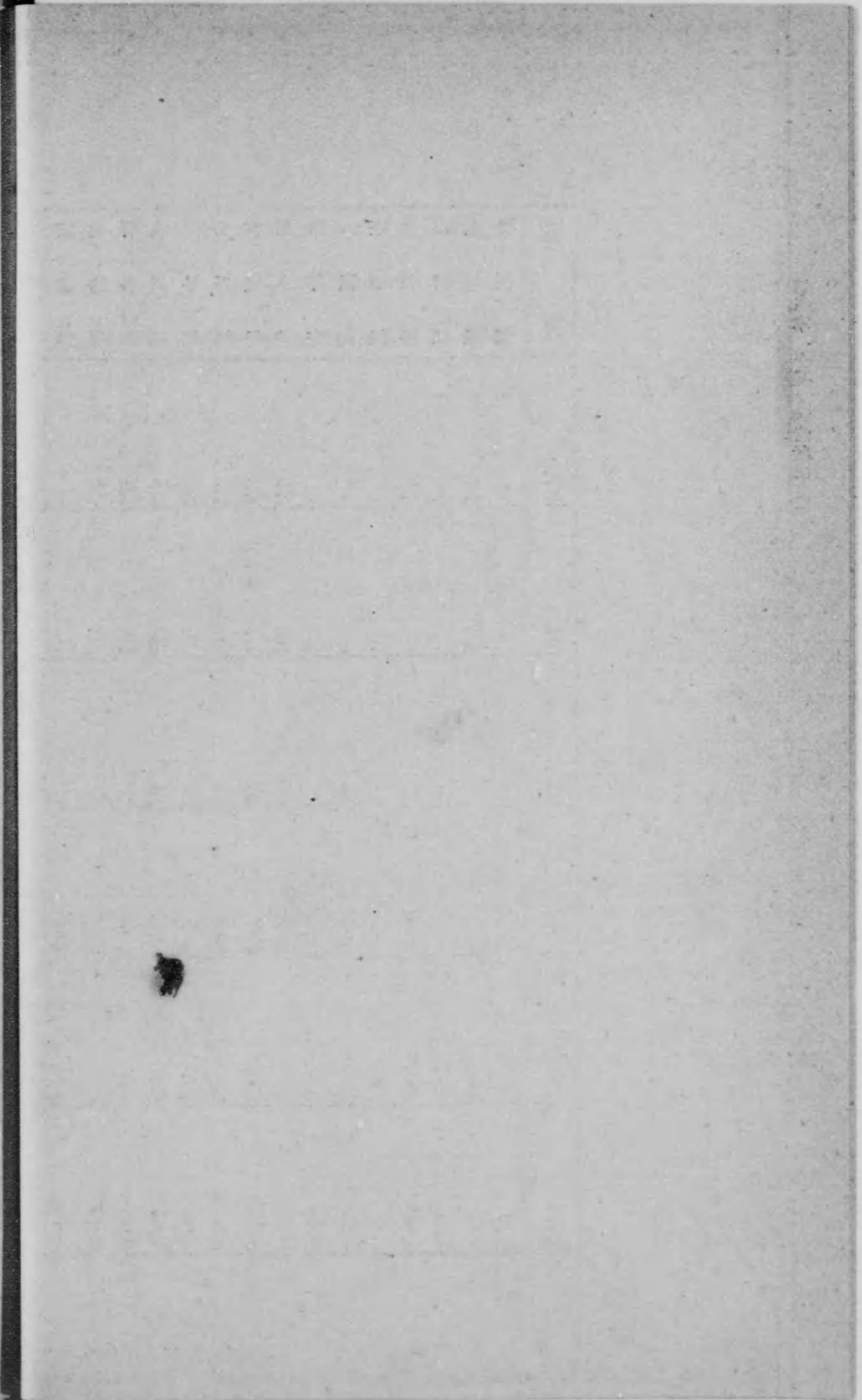
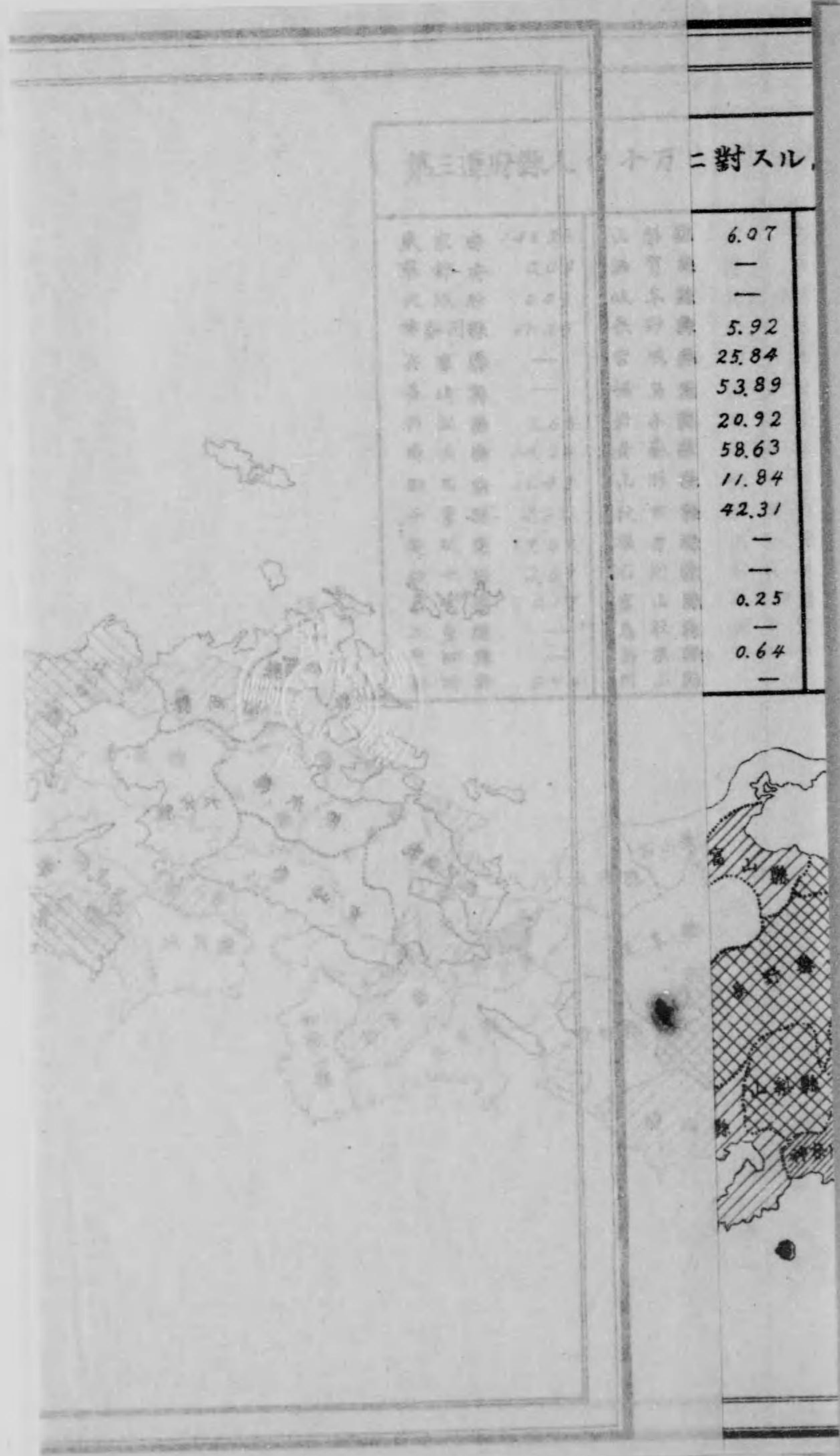
死亡者ノ多少ハ略々患者數ノ多寡ニ一致スルモ之レカ順位ヲ記セハ東京府ハ七百七十八名ニシテ群馬ヲ抜キ、次ハ福島縣ノ百十一名トシ、北海道ノ九十五名、青森縣ノ八十名、茨城縣ノ四十八名、秋田縣ノ四十七名、埼玉縣ノ四十四名ハ稍ヤ多數ナルモ其ノ他ハ何レモ三十名以下ナリ。患者百ニ對スル平均死亡比例ハ一七・一八

ナルモ百名以上ノ患者ヲ出シタル府縣中、死亡率高カリシハ埼玉ノ二三四〇、茨城ノ二〇八七、東京府ノ一八八九、青森ノ一八二〇トシ、平均率以下ナリシハ神奈川、群馬、福島ノ約一六%、北海道及山形ノ一三%、秋田ノ一二%、宮城ノ一〇%トシ、岩手縣ハ最モ低ク僅ニ五七%ナリ。是レ或ハ流行ノ夏季ニ近ツキタル爲メナランカ。
(第一〇表參照)

第一〇表 發疹室扶私患者道府縣別表

道府縣	患者全	治者	死亡者	死亡百分比	患者百中地方別患者	各地方人口
東京府	四、二九	三、三四	七六	一八・八九	五・六三	一四、五三
埼玉縣	一、八八	一、四四	四四	二三・四〇	二・四〇	一四、一四
群馬縣	二、二二	一、九	一八	六・三	一・四	一一、〇九
茨城縣	三、七	一、八	一九	三・三	〇・三	二、六七
栃木縣	三、〇	一、八	一八	三・〇	二・四	一七、三三
千葉縣	四、九	一、三	一六	三・三	〇・六	三、三
神奈川縣	一、三	一、二	一	六・四	一・七	一、五九
山梨縣	二、二	一、一	一	七・七	〇・四	六、〇七
靜岡縣	二、二	一、一	一	六・四	〇・四	〇・七
長野縣	五、八	三、七	二一	三・六	〇・二	五、九三
新潟縣	二、二	一、一	一	四・五	〇・二	二、六八

道府縣	患者全	治者	死亡者	死亡百分比	患者百中地方別患者	各地方人口
富山縣	二	一	一	五〇・〇〇	〇・三	〇・二五
北海道	七、二	六、六	九	一・三	九・二	四、八〇
青森縣	四、四	三、四	一〇	二・三	五・六	五、六三
秋田縣	三、九	三、〇	九	二・三	五・〇	四、三三
山形縣	一、七	一、六	一	五・九	二・五	二、〇九
岩手縣	二、四	一、九	五	二〇・八	一・四	一、八四
宮城縣	三、九	二、九	一〇	二五・八	一・八	二、八四
福島縣	六、八	五、八	一〇	一五・九	八・九	五、八九
京都府	一	一	一	一〇〇・〇〇	〇・一	〇・九
大阪府	一	一	一	一〇〇・〇〇	〇・一	〇・九
奈良縣	一	一	一	一〇〇・〇〇	〇・一	〇・九
和歌山縣	一	一	一	一〇〇・〇〇	〇・一	〇・九
高知縣	一	一	一	一〇〇・〇〇	〇・一	〇・九
香川縣	一	一	一	一〇〇・〇〇	〇・一	〇・九
總計	七、八八	六、四三	一、三四	一七・一八	一〇〇・〇〇	一四、五九

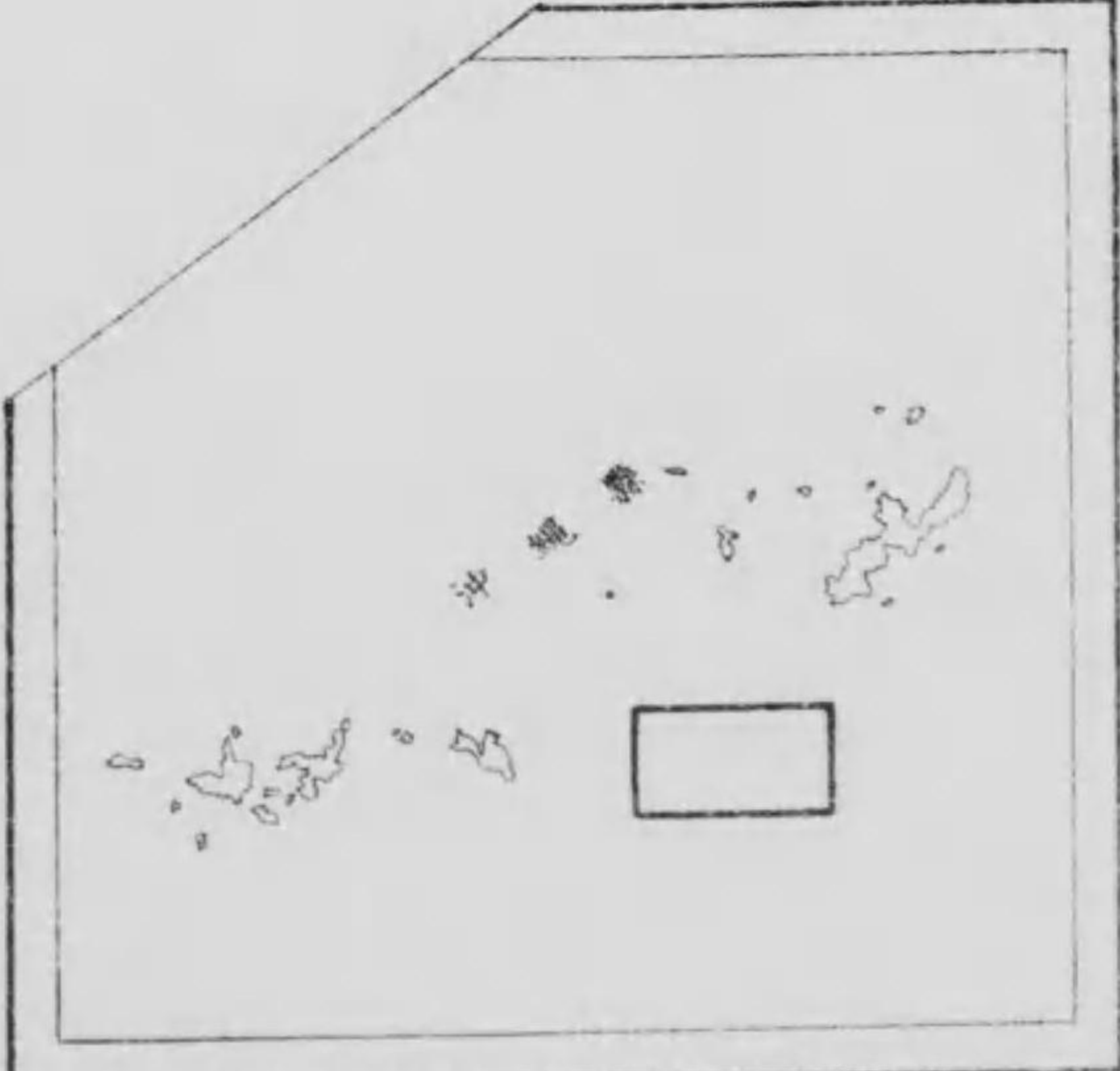
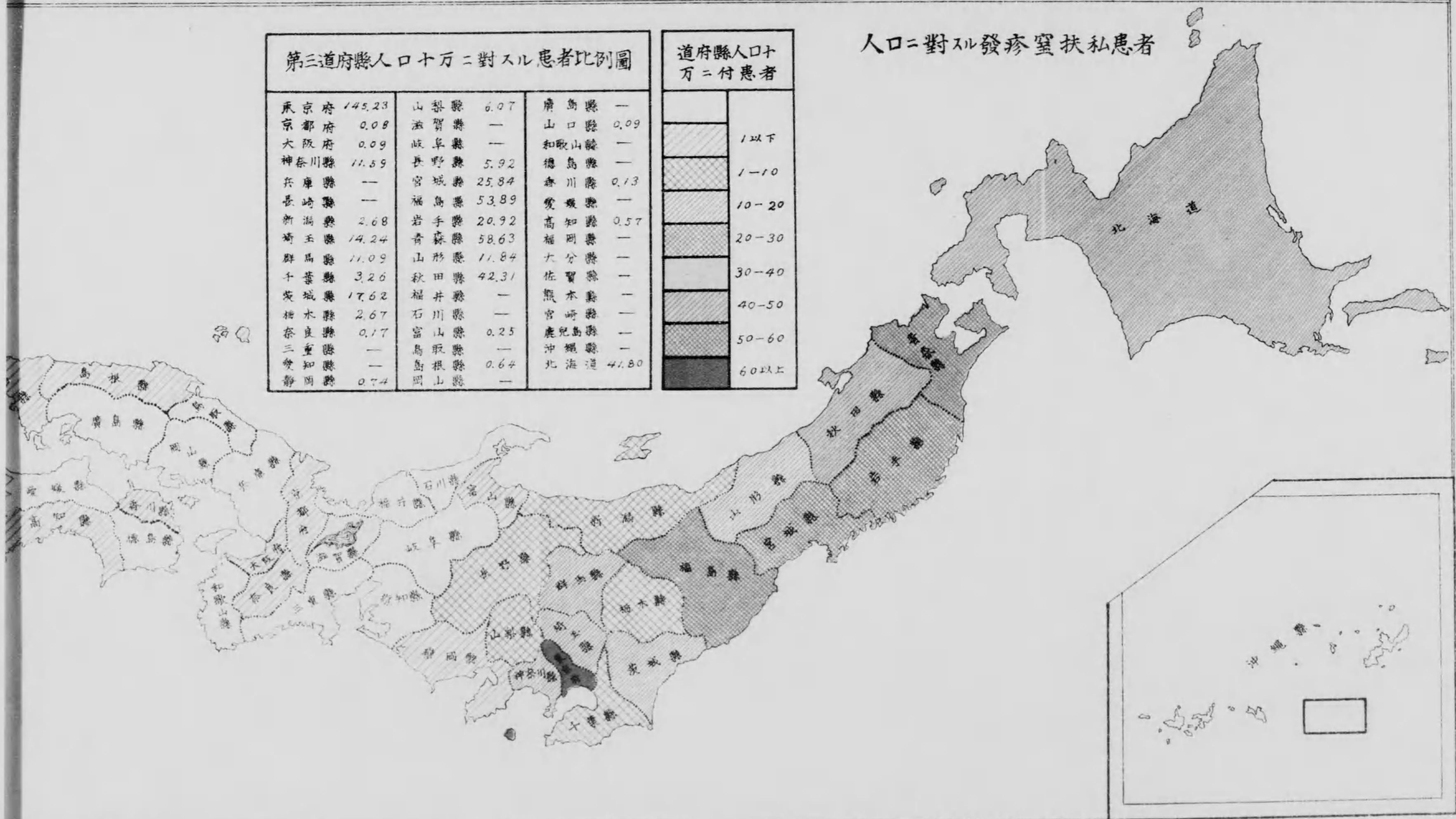
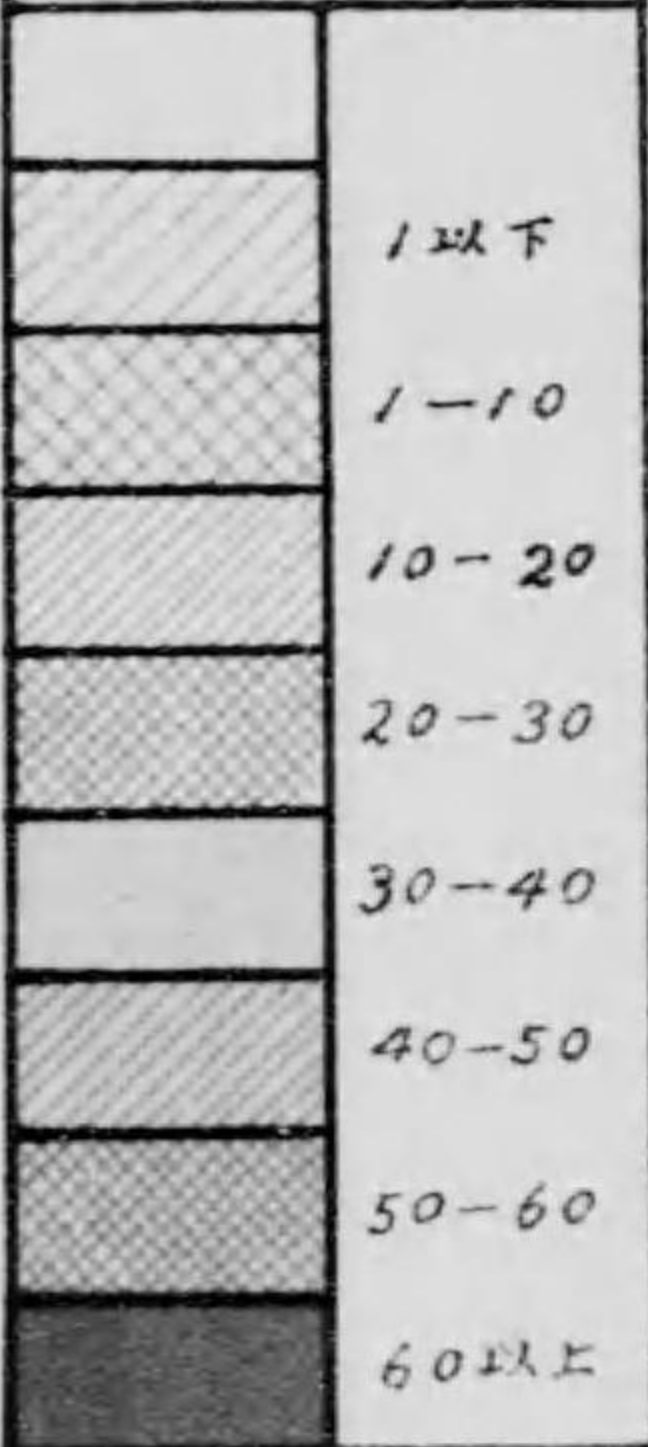


人口ニ對スル發疹蜜扶私患者

第三道府縣人口十萬ニ對スル患者比例圖

承京府	145.23	山梨縣	6.07	廣島縣	—
京都府	0.08	滋賀縣	—	山口縣	0.09
大阪府	0.09	岐阜縣	—	和歌山縣	—
神奈川縣	11.59	長野縣	5.92	德島縣	—
兵庫縣	—	宮城縣	25.84	香川縣	0.13
長崎縣	—	福島縣	53.89	愛媛縣	—
新潟縣	2.68	岩手縣	20.92	高知縣	0.57
埼玉縣	14.24	青森縣	58.63	福岡縣	—
群馬縣	11.09	山形縣	11.84	大分縣	—
千葉縣	3.26	秋田縣	42.31	佐賀縣	—
茨城縣	17.62	福井縣	—	熊本縣	—
栃木縣	2.67	石川縣	—	宮崎縣	—
奈良縣	0.17	富山縣	0.25	鹿兒島縣	—
和歌山縣	—	鳥取縣	—	沖繩縣	—
三重縣	—	島根縣	0.64	北海	41.80
靜岡縣	0.74	岡山縣	—		

道府縣人口十萬ニ付患者

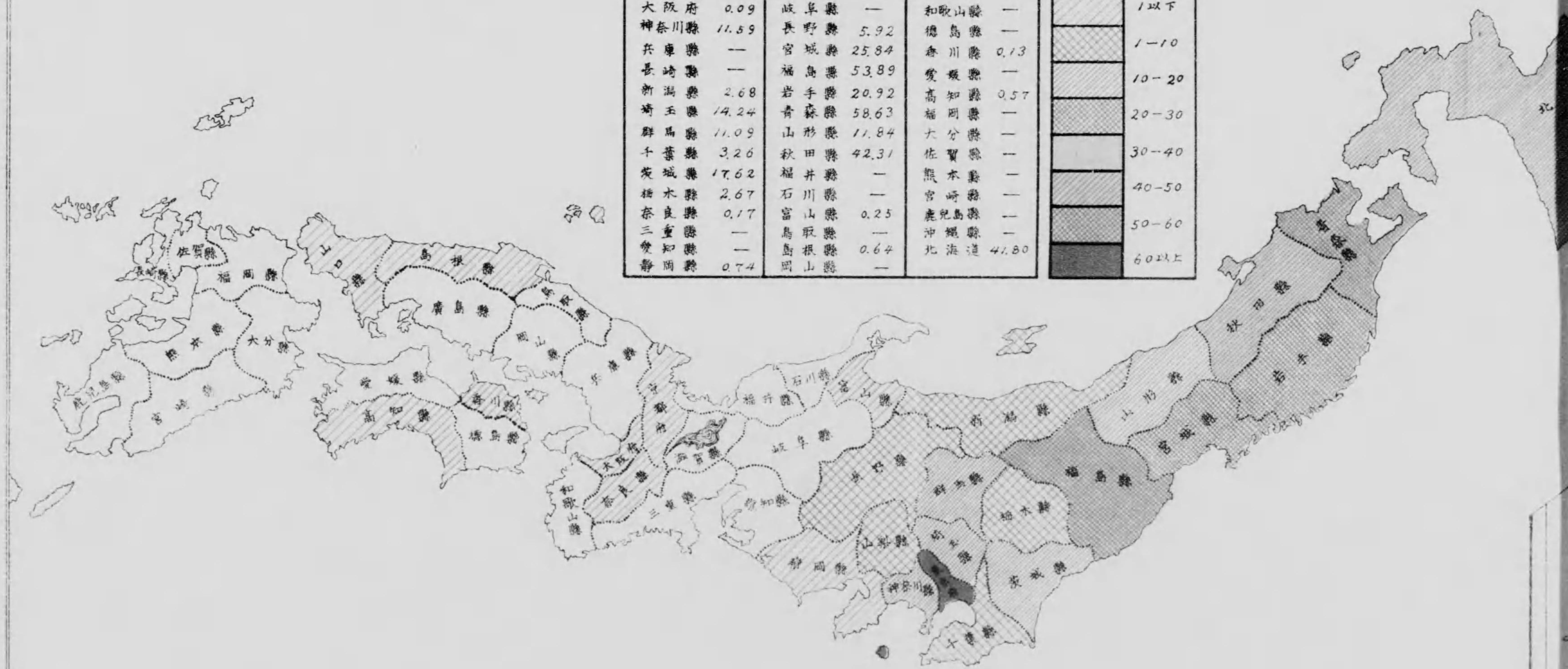


人口ニ對スル發疹室扶私患者

第三道府縣人口十萬ニ對スル患者比例圖

道府縣人口十萬ニ對スル患者		
1以下	廣島縣	—
1-10	山口縣	0.09
10-20	和歌山縣	—
20-30	德島縣	—
30-40	香川縣	0.13
40-50	愛媛縣	—
50-60	高知縣	0.57
60以上	高松縣	—
	大分縣	—
	佐賀縣	—
	熊本縣	—
	宮崎縣	—
	鹿兒島縣	—
	沖繩縣	—
	北海道	41.80

東京府	145.23	山梨縣	6.07	廣島縣	—
京都府	0.08	滋賀縣	—	山口縣	0.09
大阪府	0.09	岐阜縣	—	和歌山縣	—
神奈川縣	11.59	長野縣	5.92	德島縣	—
兵庫縣	—	宮城縣	25.84	香川縣	0.13
長崎縣	—	福島縣	53.89	愛媛縣	—
新潟縣	2.68	岩手縣	20.92	高知縣	0.57
埼玉縣	14.24	青森縣	58.63	高松縣	—
群馬縣	11.09	山形縣	11.84	大分縣	—
千葉縣	3.26	秋田縣	42.31	佐賀縣	—
茨城縣	17.62	福井縣	—	熊本縣	—
栃木縣	2.67	石川縣	—	宮崎縣	—
奈良縣	0.17	富山縣	0.25	鹿兒島縣	—
三重縣	—	鳥取縣	—	沖繩縣	—
愛知縣	—	島根縣	0.64	北海道	41.80
靜岡縣	0.74	岡山縣	—		



東京府													府				
埼玉縣	北埼玉郡	大里郡	兒玉郡	秩父郡	比企郡	入間郡	北足立郡	患者百中	合計	北多摩郡	南多摩郡	西多摩郡		南葛飾郡	北葛飾郡	北豐島郡	荏原郡
	二七	四〇	二〇	二二	五二	二七	六六	一〇〇・〇〇	四、二九	二	八	二	二	三	九	三	三、三六
								八・二二	三、三四								二、六六
								一八・八九	七六								六七〇
群馬縣													府				
宇都宮市	患者百中	合計	佐波郡	邑樂郡	山田郡	利根郡	碓氷郡	北甘樂郡	多野郡	群馬郡	勢多郡	高崎郡		前橋市	患者百中	合計	北葛飾郡
	一〇〇・〇〇	二	二〇	五二	二八	六六	一〇	四	三	四	三	五	一〇〇・〇〇	一八八	二	二	一六
	三・七六	三	八	四	二	五	三	一	四	〇	三	〇	六・〇〇	一四	三	一〇	三
	一六・三三	三	二	一	三	五							三・四〇	四	一	四	

第一一表 發疹室扶私郡市別表



長野縣										静岡縣					山梨縣							
埴	更	東	小	北	南	松	長	患	合	濱	安	庵	田	患	合	北	南	北	中	東	西	東
科	級	筑	縣	佐	佐	本	野	者	計	名	倍	原	方	者	計	都	都	巨	巨	八	山	山
郡	郡	郡	郡	郡	郡	市	市	百	中	郡	郡	郡	郡	百	中	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡
二	八	二	九	四	〇	二	八	100.00	二	一	六	一	一	100.00	三	一	二	一	一	一	二	一
一	七	一	八	三	〇	二	六	三	四	一	七	四	一	七	三	一	二	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	三	六	一	一	一	一	二	七	一	一	一	一	一	一	一

富山縣					新潟縣																	
旭	國	小	札	患	射	患	合	中	刈	南	北	古	三	南	西	北	長	新	患	合	上	上
川	館	樽	峴	者	水	者	計	城	羽	沼	沼	志	島	原	原	原	岡	潟	者	計	水	高
區	區	區	區	百	百	百	中	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	市	市	百	中	內	井
二	七	一	六	100.00	100.00	二	三	一	一	一	六	二	一	七	五	一	八	二	五	100.00	七	七
四	二	一	三	五	〇	〇	三	一	一	一	五	二	一	五	四	七	二	五	八	六	七	五
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

茨城縣										栃木縣												
猿	結	眞	筑	新	稻	行	鹿	多	久	那	西	東	水	患	合	安	那	鹽	下	芳	上	河
島	城	壁	波	治	敷	方	島	賀	慈	珂	茨	茨	月	者	計	蘇	須	谷	賀	賀	賀	內
郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	市	中	計	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡
三	九	一	〇	〇	五	九	七	七	五	九	六	三	〇	100.00	二	七	二	三	一	一	三	二
一	九	〇	九	七	二	八	四	五	四	八	二	二	〇	六	八	二	二	一	一	一	一	一
四	三	九	一	三	三	一	三	二	九	一	四	五	一	三	三	九	一	一	一	一	一	一

縣神奈川										千葉縣												
甲	患	合	足	足	中	高	三	橋	橫	橫	患	合	安	夷	山	長	印	東	千	患	合	北
府	者	計	柄	柄	座	浦	浦	樹	須	濱	者	計	房	隅	武	生	生	葛	葉	者	計	相
市	百	中	下	上	郡	郡	郡	郡	市	市	百	中	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	中	計	馬
100.00	八	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	100.00	三	三
一	七	六	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	七	九	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

山形縣										巖手縣											
患	合	東	西	西	飽	北	西	東	南	米	山	患	合	下	上	西	稗	紫	盛	患	
者	計	置	置	田	海	村	村	村	村	澤	形	者	計	閉	閉	磐	貫	波	岡	者	
百	中	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	市	百	中	郡	郡	郡	郡	郡	市	中	
100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	
五	九	七	六	八	四	九	四	四	四	九	一	一	一	八	一	二	一	一	一	一	五
二	三	六	一	五	七	一	三	一	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

宮城縣										
患	合	北	南	岩	安	安	伊	福	若	患
者	計	會	會	瀨	積	達	達	島	松	者
百	中	郡	郡	郡	郡	郡	市	市	市	百
100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00
三	四	八	九	七	五	八	四	二	七	七
一	二	三	四	五	六	七	八	九	一	二

北海道																							
患	合	留	利	紗	勇	室	虻	山	茅	龜	檜	壽	岩	古	余	忍	高	夕	空	千	石	札	
者	計	前	尻	那	拂	蘭	田	越	部	田	山	都	內	宇	市	路	島	張	知	歲	狩	鏡	
百	中	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	
100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	
七	三	一	八	一	八	八	二	〇	二	四	五	九	一	〇	五	八	二	二	八	六	一	二	五
六	八	三	一	七	一	八	八	二	八	三	四	九	一	九	四	七	一	九	二	三	一	一	四
三	七	九	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

秋田縣										青森縣													
患	合	雄	平	仙	由	河	山	鹿	北	南	秋	患	合	三	下	上	北	南	中	西	東	青	弘
者	計	勝	鹿	北	利	邊	本	角	秋	秋	田	者	計	戶	北	北	津	津	津	津	津	森	前
百	中	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	市	中	百	中	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	市	市	市
100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00
三	九	一	八	四	四	四	六	六	一	三	二	〇	六	五	八	九	一	〇	五	八	二	三	一
四	三	一	三	三	四	三	五	五	二	一	五	五	八	五	三	三	三	三	三	三	三	三	三
七	一	五	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

廿廿廿廿廿廿廿廿十十十十十十十十十七九八七六五四三	七六五四三二一 九八七六五四三二一	日日日日日日日月日日日日日日日日日日日日日日日
二六二〇三二二九二二五八三二一六四六二七五二二一五一三三五二二	五六九六九五五四四六四四六四三三三三三三三三三三三三三三三三	七七八六九七七八六二二八七九六六六六六六六六六六六六六六六六
〇八六五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五	三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三	六九九九七七〇七二七二七二七二七二七二七二七二七二七二七二七二七
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

第一三表 發疹室扶私患者發病日別表

二一	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
日日	二	三	六	八	七	二	七	三	二	一	一
二	二	三	六	八	七	二	七	三	二	一	一

備考 本表ハ患者ノ決定日ニ基キタルモノナリ

患者百中	總計	香川縣	高知縣	山口縣	島根縣	奈良縣	大阪府	京都府	福岡縣	宮城縣	山形縣	岩手縣
		三・六七	一・五〇	二・七五	二・〇三〇	一・四七	六・〇四	一・二二	〇・五四	〇・三三	〇・一三	〇・〇二
三・六七	一・五〇											
二・七五	二・〇三〇											
一・四七	六・〇四											
六・〇四	一・二二											
一・二二	〇・五四											
〇・五四	〇・三三											
〇・三三	〇・一三											
〇・一三	〇・〇二											
〇・〇二	一〇〇・〇〇											
一〇〇・〇〇	七・八八											

合 計	廿八日					廿九日					三十日					三十一日						
	不詳	一	二	三	四	一	二	三	四	五	一	二	三	四	五	一	二	三	四	五		
一日平均	一〇・二五	五〇・二〇	七三・四〇	六五・四五	三八・六〇	一五・六六	二八・二	一・四〇	〇・八四	〇・三三	〇・一〇	二・八七	一・五五	二・七三	二・〇九	一・一四	四・七三	二・八二	一・四〇	〇・八四	〇・三三	〇・一〇

備考 本表ハ患者ノ發病日ニ依リ調査セリ

三 患者ノ發見區別

發疹室扶私患者發見ノ動機ニ種々アリト雖モ大別スレハ患家ノ發意ニ基クモ
 (一)隣保又ハ公益團體等ノ注意ニ因ルモノ(二)公力ヲ以テ發見スルモノ(三)及偶然
 ノ發見ニ係ルモノ(四)ニ區別スルコトヲ得ヘシ。其ノ第一ハ患家家人ノ告白及自
 ラ醫師ノ診察ヲ受ケ主治醫ヨリ届出タルモノニシテ之レニ屬スル今回ノ發見ハ
 三千百七十一人即チ總患者ノ四割強ナリ。第二ハ衛生組合ノ活動ニ依リ患者ヲ
 發見シタルモノ投書又ハ密告等ニ依ルモノニシテ此ノ方法ニ基ク發見ハ極メテ
 少ナク僅ニ五十二名ニシテ總患者ノ〇・〇八分弱ニ相當ス。今後一層衛生組合ノ
 活動及隣保補祐ノ敦厚ヲ希望シテ止マサル次第ナリ。第三ニ屬スルモノハ檢病

的戸口調査及健康診断ニ基ク發見之レナリ是レ等公力ニ依ル今回ノ發見ハ四千
 四百八十名ニシテ總患者ノ五割七分強ヲ算ス。第四ハ死體檢案、行路病者ノ診斷
 其ノ他第一乃至第三ニ屬セサルモノニシテ其ノ發見數ハ百十五名即チ總患者ノ
 一分五厘弱ニ該當ス。更ニ之レカ内容ヲ記載スレハ……………

一 患家ノ告白 總患者三十六名患者百對〇・四六ニシテ之レアリタルハ一道
 八縣ナリ今實數多カリシモノヨリ列記スレハ宮城八名、青森秋田各七名、福島六名、
 山形三名、神奈川二名、茨城、長野、北海道各一名ナリ又之レヲ各道府縣ニ發生セル患
 者ト對比シ百分率ノ高キモノヨリ列記スレハ宮城縣三・三五、山形縣二・六三、秋田縣
 一・七八、青森縣一・五八、神奈川縣一・四九、福島縣〇・八七、茨城縣〇・四三、北海道〇・一四ナ
 リ(第一四表參照)

二 醫師ノ届出 總患者三千百三十五名即チ四〇・〇五%ニシテ之レニ依ル發
 見ナカリシハ大阪府ノミナリ。今五十名以上ノ患者ヲ出シタル道府縣ニ於テ此
 ノ方法ニ依ル發見率ノ最モ高キモノヨリ順位ニ記セハ北海道ノ六三・三八ハ最モ
 多ク埼玉、山形、岩手、長野、宮城ノ五縣ハ五・五三乃至五・一八%ノ間ニシテ群馬、神
 奈川、秋田ノ三縣ハ四・五九乃至四・二二%ノ間ニアリ。其ノ最モ少ナカリシハ

患家數ト其ノ業態別 患家ノ總戸數ハ四千四百三十二戸ニシテ一戸平均一人七分七厘ノ患者ヲ出シタル割合ナリ。而シテ之レヲ内閣統計局ノ分類シタル業態別ニ依リ調査スルニ其ノ最モ多數ヲ出セル業態ハ日雇人夫其ノ他ノ有業者ニシテ六百八十戸ニシテ總患家百對一五三四ヲ算シ第三位ハ農業、牧畜ノ六百五十七戸、一四・八三%トシ、第三ハ旅人宿、下宿業、飲食店ノ六百二十三戸、一四・〇六%、第四ハ物品ノ五百三十六戸、一三・二〇ナリ。如上四業態者ノ患家戸數ハ二千四百九十六戸ニシテ總患者ノ五割六分ヲ占メ又其ノ發生患者ハ總患者ノ六割強ニ該當スルヲ以テ今回流行セシ患者ノ過半數ハ四業態者間ニ發生セシ割合ナリ。之レニ亞テ多數ナリシハ土木建築ノ三百八十三戸(八・六四%)、無職業及職業者ノ三百三十九戸(七・六五%)、自由ノ二百二十二戸(四・七八%)、交通ノ二百〇三戸(四・五八%)、宮廷、國及公共團體ノ職ノ百五十七戸(三・五四%)ノ五業ニシテ其ノ患者數ハ千二百九十四戸(二九・一九%)ヲ算シ、該患者ヨリ出シタル患者數ハ千九百七十四名總患者ノ二割六分ニ該當ス。其ノ他ニハ百戸以上ヲ出シタル同一業態ナク、二十二種類ノ業態ヨリ六百四十二ノ患者ヲ出シ其ノ百分比ハ僅ニ一四・三八%ナリ(第一六表參照)

患者ト其ノ業態別 最モ多數ノ患者ヲ出シタル業態者ハ日雇人夫等ノ有業者ニ

ラサ
ル者ノ二千四百七十四名ニシテ總患者ニ對スル百分比ハ三一・六〇ナリ。第二位ハ其ノ半數ニ滿タサルモ尙ホ一千〇八十七名ヲ出シタル農業、牧畜トス。本患者ハ總患者百ニ對シ一三・八八ニ該當シ、第三位ハ物品ノ七百十三名(九・一一%)、土木建築ノ七百〇六名(九・〇二%)、無職業ノ六百六十九名(八・五五%)等ニシテ是等五業態者ノ出シタル患者數ハ四千九百四十三名ニ及ヒ、總患者ノ六割三分ニ該當ス。又第四位ト認ムヘキハ旅人宿及下宿業、飲食店ノ四百卅一名、自由ノ三百十八名、交通ノ二百八十一名、稍下ツテ宮廷、國及公共團體ノ職ノ百九十八名、被服身ノ物品製造、ノ百二十九名、漁業及製ノ百二十名、製造業者ノ百〇五名、金屬製造業者ノ百〇一名等ノ八業態者ニテ其ノ患者數ハ千六百八十三名ヲ算ヘ、總患者百ニ對スル比例ニ割二分ナリ。其ノ他ニハ百名以上ノ患者ヲ出シタル業態者ナク、残り四百九十六名ノ患者ハ十八業態者ヨリ發生セリ(同上)

更ニ日雇人夫等ノ有業者ニシテ業態者ニ患者多カリシハ東京府下ノ發生七六四四%ヲ占メタルカ故ナリ。第二位ノ農業、牧畜ノ多數ナリシハ之レ畢竟地方住民ノ大半ハ此ノ種ノ業態者ナルカ故ナラン乎。又第三位ニ多數ナリシ物品ハ其六四・五二%ヲ東京府ヨリ出シ他ハ地方ノ市街地ニ於ケル發生ナリ。交通中多ク侵

サレタルハ人力車夫、荷車挽馬車挽等ナリ。又築木建ト稱スル者ノ大部分ハ土工及木工人夫ニシテ其ノ内五八九二%ハ東京府下ニ發生シ製造業者及金屬ニ關スル職業ニ逕庭ナキカ如ク、患者數モ亦伯仲ノ間ニアリ。其ノ他遊戯場及興業營業者、ニ多カリシハ其ノ止宿人間ニ流行シタル結果ニシテ業自由ノ三百十八名中百五十一名ハ看護婦、看護人、醫師ニシテ宮廷國及公共團體ノ職務ノ百九十八名中百二十二名ハ府縣技術官、警察官、市町村吏員、警察書記其ノ他ノ雇傭員等ノ職務感染者ナリ

第一六表

發疹室扶私患者及患家職業別表

職業	患者		患家	
	男	女	總數	百對
農業牧畜養蠶等	三三	一五	四八	一・〇八
林業及狩獵	一	一	二	〇・〇五
漁業及製鹽	三	三	六	〇・一五
礦業及冶金業	四	三	七	〇・一八
土石類ノ採取及製造	七	四	一一	〇・二九
金屬ニ關スル製造	一〇	六	一六	〇・四一
機械及器具製造	一四	三	一七	〇・四三
化學的製品及類似ノ製品製造	一	一	二	〇・〇五
合計	一〇七	六七	一七四	四・〇三

職業	患者		患家	
	男	女	總數	百對
綿及絲類製造	七	二	九	〇・二六
織物、編物類製造並染晒等ノ業	八	一	九	〇・二六
紙及紙品製造	六	一	七	〇・二〇
皮革、皮革品護膜品製造	五	一	六	〇・一六
木竹類ニ關スル製造	四	一	五	〇・一四
水産物製造	三	一	四	〇・一〇
飲食料品及嗜好品製造	三	一	四	〇・一〇
被服及身ノ廻リ品製造、洗濯、湯	三	一	四	〇・一〇
製斗業	三	一	四	〇・一〇
土木建築業	三	一	四	〇・一〇
銅版、石版、木版等ノ彫刻、印刷及寫眞業	三	一	四	〇・一〇
其他ノ工業	三	一	四	〇・一〇
賣買品ノ商業	三	一	四	〇・一〇
金融及保險業	三	一	四	〇・一〇
物品貸業、倉庫業、其他ノ物品預リ業、人事及其他ノ周旋業	三	一	四	〇・一〇
旅人宿及下宿業、飲食店業、遊戯場及興業營業場、沐浴ニ關スル業	三	一	四	〇・一〇
其他ノ商業	三	一	四	〇・一〇
交通業	三	一	四	〇・一〇
現役陸軍及海軍	三	一	四	〇・一〇
宮廷、國及公共團體ノ職務ヲ帶アル者並雇傭員	三	一	四	〇・一〇
自由業	三	一	四	〇・一〇
合計	一〇七	六七	一七四	四・〇三

總計	技藝ニ從事スル者及娛樂ニ關スル職業ニ從事スル者		其他ノ有業者及有業者ニシテ職業ノ申告詳カナラサルモノ		無職業及職業ヲ申告セサル者	
	元	一、七九	七	三三	三、四四	一、〇四
總計	三、四四	一、〇四	一、八二	一、六三	七、八八	四、四三
100.00	0.76	0.30	0.53	0.47	100.00	60.84
100.00	0.30	0.20	0.11	0.16	100.00	76.65
100.00	0.33	0.24	0.13	0.19	100.00	76.65

六 體性及年齡別

體性 罹病者ノ體性別ハ流行セシ道府縣ヲ通算スル時ハ男ノ罹病者遙カニ多ク、患者毎百ニ付六三・四三ヲ算シ女ハ僅ニ三六・五七ナルモ此ノ比例ハ全般ニ通シタル現象ニアラスシテ處ニ依リテハ女子ノ罹病者反テ男子ヲ凌駕スル所アリ。即チ患者毎百ニ對シ女子ノ罹病比例最モ多キモノヨリ記載スレハ新潟縣五四・七一、山形縣五四・三八、宮城縣五三・九八、秋田縣五二・九三、岩手ノ正半五〇・〇〇等ナリ。斯ノ如ク殆ント東北地方ニ限リ特ニ女子ノ罹病者多キハ特殊ノ關係ナカルヘカラサルモ將來ノ研究ニ俟ツノ外ナシ。

次ニ兩性ト死亡ノ關係ハ總死亡者百ニ對シ男ハ七〇・二六ニシテ女ハ僅ニ二九・七四ナリ。更ニ之レヲ兩性毎ニ其ノ罹病者ニ對スル死亡比例ヲ算出スレハ男ハ一九・〇三%ナルニ女ハ一三・九六%ナリ。此ノ原因ハ女子ノ罹病者比較的ニ年少

者ニ多カリシ爲ナラン乎(第一七表參照)

年齡ト罹病比例 二歳未満ノ幼兒ヨリ七十歳以上ノ老齡ニ至ル十階級ノ悉クヨリ罹病者ヲ出ササルナキモ、就中多數ナリシハ三十歳級ニシテ此ノ年齡級ヲ中心トシ幼年者ニ緩ク老年者ニ急ニ遞減セリ。則チ患者毎百中三十歳級ノ罹病者ハ二二・六九、二十歳級ノモノハ二〇・八五、十歳級ノ者ハ一三・九八、六歳乃至十歳未満ノ者六・四六、二歳以上五歳未満ノ者三・一八、二歳未満ノ者〇・五四ニシテ其ノ減少比例比較的緩カナルモ四十歳級ノ者ハ一七・〇三、五十歳級ノ者ハ九五・九六、六十歳級ハ四・六二、七十歳以上ハ一・〇五ナル如ク急ニ減少セリ(同上)

年齡ト死亡比例 各年齡級ニ於ケル死亡率ハ老年者ニ多ク年齡ノ壯ナルニ從ヒ漸次減少スルモ五歳未満ハ反テ増加セリ。即チ七十歳以上級ノ者ハ六八・二九%ノ死亡者ヲ出シ、六十歳級ノ者ハ五九・九四トナリ、五十歳級ハ四〇・四八、四十歳級ハ二三・四一ニ減シ三十歳級ハ一二・六トナリ、二十歳級ハ七・六五、十歳級ハ五・三〇、十歳未満六〇歳以上級ハ三・五六トナレルモ此レヨリ以下ニ降ルコトナク、是レヲ最少極度トシテ三歳以上五歳未満ハ八・八四%、二歳未満ハ二・一九〇%ノ死亡ヲ出セリ(同上)

第一七表

發疹室扶私患者及死亡者體性及年齡別表

年 齡	患 者		計	死 亡 者		計
	男	女		男	女	
二歲未滿	100	33	133	0	4	4
五歲未滿	144	104	248	3	5	8
十歲未滿	231	275	506	9	3	12
二十歲未滿	67	478	545	5	9	14
三十歲未滿	1,080	573	1,653	8	3	11
四十歲未滿	1,167	609	1,776	14	6	20
五十歲未滿	928	405	1,333	13	9	22
六十歲未滿	54	37	91	3	6	9
七十歲未滿	23	29	52	1	6	7
七十歲以上	40	4	44	3	6	9
合 計	4,965	2,833	7,798	70	45	115

本表ノ年齡ハ數ハ年ニ據レリ
各性ニ對スル死亡比例ハ下ノ如シ

男 一九〇三

女 一三九六

七 潜伏期間

患者總數七千八百二十八名中各般ノ調査ニ依リ病毒感染ノ時日明カニ推斷シ

得ラレタルハ千四百八十二名ニシテ總患者ノ一割九分ナリ。之レカ感染ヨリ發病ニ至ル期間ノ延日數ハ一萬二千六百六十三日ニシテ一人平均八二一日ナルモ其ノ内最も早ク發病シタルハ感染第一日ノ二十名トシ、最も遅キ發病ハ三十五日目ノ二名ナリ。而シテ感染後最も多數ノ患者ヲ出シタルハ五日目ノ百六十一名ナルモ其ノ前後ノ六日間即チ三日目乃至八日目ハ發病ノ最高潮期ニシテ八百四十名ヲ算シ全數ノ五割七分ニ達セリ

次ニ週別ニ依ル發病割合ハ第一週内ノ發病者八百十九名ニシテ五五・二六%トナリ、第二週中ノ發病ハ五百十二名ニシテ三四・五五%トス。故ニ最初ノ二週内ニ感染者ノ約九割發病スルモ尙第三週中ニ發病セシモノ百〇八名即チ七・二九%、第四週中ノ發病三〇名二〇・二%ナリ。此ノ時期ニ至レハ漸ク感染者ノ九割九分發病シ爾餘ノ十三名即チ〇・八八%ハ第五週中ニ發病セルヲ見タリ(第一八表參照)

以上ノ結果ニ依レハ傳染病豫防法第八條ニ基ク隔離期間中ニハ感染者ノ五割五分ヲ處置スルニ留マリ爾餘ノ四割五分ハ開放後ニ發病スル割合ナリ

第一八表

發疹室扶私潜伏期間別表

感染ヨリ發病 マテノ日數	患者	患者百對比例	感染ヨリ發病 マテノ日數	患者	患者百對比例
一	二〇	一・三五	一	一七	一・一五
二	七一	四・七九	二	七	〇・四七
三	一〇四	八・三七	三	八	七・二九
四	一五七	一〇・五九	四	二八	〇・五四
五	一六一	一〇・八六	五	二八	〇・五四
六	一三四	一〇・三九	六	四	〇・一三
七	一五九	一〇・三九	七	二	〇・一三
八	一一二	七・五六	八	三	〇・二七
九	七四	四・九九	九	三	〇・二〇
十	六七	六・四一	計	一四八	一〇〇〇
計	九一	五・二六	計	一三	〇・八八
十一	五二	三・四五	計	一	〇・〇〇
計	四四	三・五八	計	一	〇・〇〇
十二	四三	三・五八	計	一	〇・〇〇
計	三三	二・〇九	計	一	〇・〇〇
十三	三三	二・〇九	計	一	〇・〇〇
計	二一	一・〇八	計	一	〇・〇〇
十四	一六	一・〇八	計	一	〇・〇〇
計	一一	〇・九四	計	一	〇・〇〇
十五	一一	〇・九四	計	一	〇・〇〇
計	九	〇・六一	計	一	〇・〇〇
計	九	〇・六一	計	一	〇・〇〇

本表ハ感染ノ事實明カニ推斷シ得ラル、者ニ限り掲載セリ

此外冊七日、四十日、五十七日、五十八日、目ニ各一名宛發生ノ報告アリタルモ本表ニヨリ除キタリ

八 治療期間

全治者ノ治療期間 今回ノ流行ニ際シ治療ノ轉歸ヲ取レル者ノ數ハ六千四百八十三名ナルモ内百四十五名ハ發病月日不詳又ハ他ノ事情ニ依リ治療期間不明ニ付キ之レヲ控除シ残り六千三百三十八名ニ就テ調査スルニ其ノ最早ク治療セルハ發病三日目ノ二人ニシテ最モ遅キハ百十四日目ノ一人トス。甲ハ餘リニ早キニ過キ、乙ハ續發症ニ因スル疑アルヲ以テ或ハ之レヲ控除スルヲ至當トナスモ其ノ數ハ極メテ少ナク、大局ノ上ニ謬ナキヲ以テ其ノ儘計上スレハ治療延日數ハ十七萬二千六百五十日ニシテ一人平均二七・二四日ニ該當ス。

而シテ最モ多ク治療者ヲ出セシハ四週目ノ三四・七三%、第二ハ五週目ノ二三・七〇%、第三ハ三週目ノ二〇・三七%ニシテ此ノ三週間内ニ全治スヘキモノノ七八・八〇%ヲ出ス割合ナリ。其ノ他ハ著シク少ナキモ順位ニ例記スレハ第六週目八・二八%、第二週目五・七〇%、第七週目三・五〇%、第八週目一・三七%、第九週目〇・九二%、第十週目〇・二二%ニシテ第十週以後ハ〇・五二%ナリ(第一九表參照)

以上ノ結果ニ依レハ發疹室扶私ノ治療ハ三週ヲ經過シテ僅ニ二割六分治療シ、四週ニシテ六割二分、五週ノ終リニ八割五分トナリタリ、六週ノ終リニ九割三分強

ノ治療者ヲ出ス割合ナリ(同上)

死亡者ノ治療期間 總死亡者千三百四十五名中死體檢案其ノ他ノ關係上治療期間ノ判明セサル者四十九名ヲ控除シ千二百九十六名ニ就テ觀察スルニ其ノ治療延日數ハ一萬七千三百五十六日ニシテ一人平均一三四九日トス。其ノ内最モ早ク死亡セルハ發病第一日ノ三百二十二名ニシテ最モ長ク保テタルハ百〇三日目ノ一人ナリ。就中多數ノ死亡者ヲ出ス時期ハ發病十日及十一日目ナルモ概シテ第二週目ニ最モ多ク總死亡者ノ四一六七%ヲ出シ之レニ次ク第一週ノ二四八五%、第三週ノ一九四四%、第四週ノ八七二%ニシテ其ノ以後ハ頓ニ減少シ五乃至十週間ニ死スル者僅ニ五・一七%、十週以後ニ至ル迄生命ヲ保テタルハ僅ニ二名ニシテ〇・一五%ナリ(同上)

乃本病患者ニシテ死ノ轉歸ヲ取ル者ノ二割五分ハ一週間内ニ、六割七分ハ二週間内ニ、八割六分ハ三週間内ニ、九割五分ハ四週間内ニ死亡スル割合ナリ。故ニ反對ノ言ヲ以スレハ罹病後一週日ヲ經タル患者ハ二割五分、二週間經タル者ハ六割七分、三週間ヲ經タル者ハ八割五分、四週間ヲ經タル者ハ九割五分治療ノ見込アリト言フヲ得ヘク、更ニ簡言スレハ經過ノ長キニ隨テ治療ノ見込多シト言フヲ得ヘシ

第一九表 發疹室扶私患者治療期間表

治療期間	發病ヨリ全治		發病ヨリ死亡	
	全治者	全治者百中	死亡者	死亡者百中
一	1	0.3	1	1.4
二	2	0.3	2	1.4
三	3	0.3	3	1.4
四	4	0.3	4	1.4
五	5	0.3	5	1.4
六	6	0.3	6	1.4
七	7	0.3	7	1.4
八	8	0.3	8	1.4
九	9	0.3	9	1.4
十	10	0.3	10	1.4
計	45	1.4	45	1.4

治療期間	發病ヨリ全治		發病ヨリ死亡	
	全治者	全治者百中	死亡者	死亡者百中
一	1	0.3	1	1.4
二	2	0.3	2	1.4
三	3	0.3	3	1.4
四	4	0.3	4	1.4
五	5	0.3	5	1.4
六	6	0.3	6	1.4
七	7	0.3	7	1.4
八	8	0.3	8	1.4
九	9	0.3	9	1.4
十	10	0.3	10	1.4
計	45	1.4	45	1.4

其一度地方ニ蔓延スルヤ流行ノ狀況ニ鑑ミ四月二十二日青森縣ニ防疫員二名ヲ新設シ六月三日福島縣ニモ同シク防疫員二名ヲ置キ六月六日ハ神奈川縣ニ防疫監吏七名ヲ増加シ同月十一日ニハ新タニ北海道ニ防疫員二名ヲ設置セリ

(二) 防疫職員ノ派遣

東京府下ニ一種ノ傳染病流行ノ報アルヤ屢々防疫課長以下防疫官ヲ派遣シ豫防措置ノ指導尙議ニ預ラシメ又病毒ノ各地ニ蔓延スルヤ北海道青森岩手福島等ニ防疫官及防疫官補ヲ出張セシメ狀況視察並ニ實地視導ノ任ニ當ラシメタリ

(三) 印刷物ノ配布

傳染病豫防ノ要ハ病症ノ性質及傳播ノ狀況ヲ知悉シ上下一致協力シ之レカ豫防ノ任ニ當ラシメサルヘカラス然ルニ本病ハ久シク流行ノ跡ヲ絶テタルヲ以テ之レカ性質及豫防撲滅ニ關スル智識ノ全カラサルヲ憂ヒ四月十五日ニハ庶民ノ爲メニ「發疹瘰癧私豫防心得」ヲ又同月二十八日ニハ當事者ノ參考ニ供スル爲メ「發疹チフス」ト題スル冊子ヲ印刷シ直チニ警視廳及道府縣ニ配布シ一面宮内省侍醫寮陸海軍醫務局外務省通商局鐵道院保健課臺灣及關東都督府朝鮮總督府樺太廳傳染病研究所東京市役所同市立駒込病院各港務部及臨時海港檢疫所日本郵船東

洋汽船大阪商船會社新聞雜誌社等ニ配布シ其參考ニ供シタリ後日ノ參照トシテ茲ニ之レヲ添付ス

發疹チフス「豫防ノ心得」(大正三年四月內務省衛生局)

(第一) 發疹チフストハトシナ病氣カ

發疹チフス「ト云フ病氣ハ非常ニ傳染力ノ強イ發疹性熱病テ不潔イ家屋ニ多人數棲フ場所即チ木賃宿養育院監獄工場寄宿舍貧民部落等ニヨク流行リ又食物ノ不足境遇ノ不良時例ヘハ饑饉ヤ戰爭ノ時ニモ流行ルノテアリマス

其ノ症候ノ概略ヲ申シマスト身體ニ病芽カ入ツテカラ一二週間ハ潜伏テ井マスカ其中突然ニ惡寒カシテ程ナク四十度以上ノ高熱カ出テ頭痛カ強ク眩暈カシテ全身ハ倦怠ク薦骨部ヤ四肢ノ諸關節ニ疼痛ヲ覺ユ到底起キテ井ラレス病芽ニ就クヨウニナリ神識朦朧トナツテ譫語ヲ云ヒ顔面ハ潮紅浮腫狀ニ見ヘ眼球結膜ハ充血シ體温ハ降ラス三四日經過中ニ帽針頭大ノ薔薇樣發疹カ胸部カラ出初メテ全身ヘ擴ルノテアリマス

此ノ病氣ニ罹レハ病症ニヨリ差違アレト百人中二十人位ハ死ニマス幸ニ治愈ル者ハ發病後十二三日經ツト熱カ次第ニ降り漸々恢復クナツテマ井リマス

(第二) 發疹「チフス」ハトウシテ傳染スルカ。

此ノ病氣ノ病原體ハ未タ決定シマセンカ、血液中ニ病芽カアリマス、ソレテ虱ヤ(蚤)ナトカ患者ノ病芽ノアル血ヲ吸フタ後ニ他ノ健康者ヲ螫シテ病芽ヲ傳染シマス、又患者ノ咳嗽ノ泡沫ヲ吸込テ罹リ、或ハ患者ニ近付キ看護ナトシ患者ニ接觸ツテ傳染リ、又患者ノ使用ツタモノ例ヘハ衣類寢具類、家具、雜用品等ニヨツテモ傳染スルノテアリマス。

(第三) 發疹「チフス」ニ罹ラナイヨウニハトウシテ豫防スルカ。

(一)發疹「チフス」ノ豫防法ハ、住居ヲ清潔ニ掃除シ、窓ハ明ケ放シテ空氣ノ流通ヲヨクシ日光ノ射入ル様ニツトメ、又食物ヲ改善シ、虱ヤ(蚤)ヲ剿滅スルヨウ注意スルノカ第一テアリマス。

(二)發疹「チフス」ハ非常ニ傳染力カ激イカラ、此ノ病カ流行時ニハ感冒ノ様テモアリ熱モ高ク、譫語カ出ルホトナレハ早ク醫師ノ診察ヲ受ケ、若シ此ノ病氣ト確定スレハ病院ニ入レルノカ宜シイノテアリマス、此ノ病ハ恐シイ病氣ナレト早ク療治スレハ治リ易イノテアリマス。

(三)患者ノ居室ヤ、其中ノ家具類ハヨク掃除シ消毒シテ、疊ヤ敷物ハ消毒ノ上日光

ニ曝露シ、患者ノ衣類、寢具類、雜用品等ハ初メニ熱湯テ煮ルカ、或ハ他ノ方法テ消毒ヲシタ後ニ洗濯シナケレハナリマセン、價值ノ無イ品物ハ燒却ナサイ、患者ノ口ヲス、イタ水、痰唾ノ類モ消毒セネハナリマセン。

(四)發疹「チフス」ノ患者ヤ其發生シタ家ニハナルヘク接近シナイヨウニナサイ、已ムヲ得ス患者ニ接近シタ場合ニハ歸ツテ直ク衣類ヲ全部着換ヘ、日光ニヨク曝シナサイ、看護スル時ニハ必ス看護服ヲ着テナルヘク呼吸器ヲカケ、又患者ト同室テ寢ナイ様ニナサイ。

(五)發疹「チフス」ノ流行時ニハ、二三日テ治ル輕症ノモノカ多數アリマシテ、夫レカ他人ニ傳染レハ重クナリマスカラ、輕イモノニモ注意セネハナリマセン。

發疹チフス

(内務省衛生局編纂)

凡例

(一) 本編の主トシテ左ノ三書ヲ骨子トシテ起章セルモノナリ

(1) Kolle, W., A. v. Wassermann; Handb. d. pathog. Mikroorganismen, Bd. VIII. 2913, 2. Aufl. S. 497.

(2) Mohr, L., R. Staehlin; Handb. d. inn. Medizin, Bd. 1. 1911, S. 291.

(3) Rabner, M., M. v. Gruber. M. Ficker; Handb. d. Hygiene, Bd. III. 2. Abt. 1913, S. 498.

(二) 其他參考トシテ直接引用編纂ノ資ニ供セシムル次ノ十種ナリ。

(1) Abel, R., Handb. d. prakt. Hygiene. Bd. 1. 1913.

(2) Bischoff, H., W. Hoffmann, H. Schwiening; Lehrd. d. Militärhygiene, 1912, S. 337.

(3) Ewald, W., Soziale Medizin, Bd. 1. 1911, S. 253.

(4) Kaiserl. Gesundheitsamt; Das Deutsche Reich, 1907, S. 99.

(5) Kamen, I., Prophyl. u. Bekämpf. d. Infektionskh. 1906, S. 234.

(6) Kolle; W. t. H. Hetsch; D. exp. Bakt. u. d. Infektionskh., Bd. II. 1911, 3. Aufl. S. 911.

(7) Krause, P., Klin. Diagnostik, 1909, S. 45.

(8) Mersug; Lehrb. d. inn. Mediz., 3. Aufl. 1905, S. 173.

(9) Mosse—Tugendreich; Krankh. u. soziale Lage, 1913, S. 140. u. 540.

(10) Preuss. Desinfektionsanw. bei Flecktyphus. 1907.

(三) 邦文書中柴山五郎作氏日本傳染病小史及ヒ橋本節齊氏新內科全書中我邦ノ事情ニ就テ參考トセシ所アリ。

(四) 書中人名ノ發音ハ邦文トシテ示ス上ニ於テ困難ノ點少カラス多少ノ誤謬ハ免レサラン因テ之等ノ所ニハ原語ヲ附セリ。

目次

(第一) 異名同義語.....	一四一頁
(第二) 定義.....	一四二頁
(第三) 流行史.....	一四二頁
(第四) 原因.....	一五三頁
(第五) 症候.....	一六五頁

(第六) 病理解剖的所見……………一七八頁

(第七) 診斷及類症鑑別……………一八一頁

(第八) 豫後……………一八三頁

(第九) 療法……………一八五頁

(第十) 豫防法……………一八六頁

(第十一) 消毒法……………一九二頁



第一 異名同義語

發疹「チフス」Typhus exanthematicus (羅) Flecktyphus (獨) Typhus fever (英) Typhus exanthématique (佛) Tifo axantematico (伊) Ptainisjy tif (露) Tifo exantematico (西) Kilitesc(tarjagas) hagymaz (洪) ニハ異名同義語頗ル多ク、例ハ、發疹熱 Fleckfieber 接觸傳染性「チフス」Typhus Contagiosus 紫斑性「チフス」Petechialtyphus 紫斑性熱 Febris petechialis 惡疫熱 Febris pestilens 戰役「チフス」Kriegstyphus 航海「チフス」Schiffstyphus 饑飢「チフス」Hungertyphus 等種々ノ名稱アリ、其他流行地方名ヲ冠シ洪牙利熱 Febris hungarica ト云ヒ、又異同論確定ニハアラサレトモ墨西哥ニ於ケル墨西哥發疹「チフス」Mexikanischen Flecktyphus 或ハ北米ニ見ル「ロッキ」山熱 Rocky mountain fever 又ハ單ニ發疹性熱 Spotted fever 等モ發疹「チフス」ト類似セルモノニシテ或ハ同一ナランカトセラロ。

第二 定 議

發疹「チフス」ハ急性激烈ナル接觸傳染性疾患ニシテ固有ノ熱型ト皮膚發疹並ニ概シテ重篤ナル神經症狀トヲ以テ特徴トシ、又往々呼吸器ノ加答兒症候ヲ隨伴ス

ル所ノ疾患ナリ。

人類ハ本病ニ對シ最モ感染シ易キ性質ヲ有スレトモ殊ニ非衛生的生活境遇ニ在ル下層社會及ヒ饑飢又ハ戰時等ニ際シテハ好發ス、然ルニ其病原體ハ未タ決定ニ至ラス、從ツテ傳染經路及ヒ豫防法モ的確ナル斷定ヲ下シ得サル憾ナキニシモアラス、サレト一度本病ヲ耐過セルモノハ爾他ノ傳染病ニ於ケルカ如ク免疫性ヲ獲ルモノナリ。

第三 流行 史

發疹「チフス」ハ既ニ「ヒポクラテス」並ニ其他古代ノ希臘及ヒ羅馬ノ醫家ニ知ラレタリシカ中世紀ニ至ルマテハ往々「ベスト」ト混同サレタリ、一五〇五年及一五二八年全伊太利ヲ席捲セシ所ノ所謂「ベスト」カ發疹「チフス」ナリシハ「フラスカトリウス」Frascatoriusノ古典的記載ニヨリ知ラル、カ如ク臨牀鑑別上明カニ他病ト判明シ得ヘキモノナリ、又一五六六年洪牙利ノ「ベスト」一五七四年「マイセン」Meissenニ於ケル「ベスト」等ノ如キハ「ヒルシュ」Hirschノ意見ニヨレハ發疹「チフス」ノ流行ニ數フヘク同様ニ一七五七年及ヒ一七五九年奧國殊ニ維納ニ蔓延セル腐敗熱 Faulfieber、並ニ

一七七一及二年ニ殆ント全獨逸國ヲ侵セシ流行性腐敗熱 epidemische Faulfieber、モ亦然リ、特ニ發疹「チフス」ハ三十年戰爭及ヒ奈翁戰役ニ於テ甚シク遂ニ該惡疫ハ全歐洲ヲ席捲セリ、一七九三、四年及ヒ九六七年ニハ獨逸國ヲ襲ヒ、一八一五年ニハ「ガリチエン」及ビ「ウンガルン」並ニ奧國ヲ一八一六年、一七年及ヒ一八年ニハ英蘭土及ヒ愛蘭土ヲ最モ猛烈ニ侵襲シ、愛蘭土ノ如キハ實ニ全人口ノ八割ヲ擦奪セラレ、死者四萬人以上ヲ算スルノ不幸ヲ見タリ、又一八二六年及ヒ二八年、殊ニ一八四六年及ヒ一八四七年ニハ兩國ニ於テ激烈ヲ極タリ、當時英蘭土ニ在リテハ一百萬人ヲ超ヘ、愛蘭土ニテハ三十萬人以上ノ發疹「チフス」患者ヲ出セリ、又「クリミヤ」戰爭中殊ニ一八七八年ノ露土戰役ニ於テモ本病ノ襲フ所トナリ、多大ノ犠牲ヲ拂ハサルヘカラサルニ至リシハ左表ニ示スカ如シ、サレト當時ハ軍陣倉卒ノ際、病症ヲ確然區別スル能ハス、唯漠然ト「チフス」性疾患トセルノミナレハ、再歸熱腸「チフス」等ハ含有サレアルコトナラン、一八七〇年及ヒ七一年ノ獨佛戰役ニ在リテハ之ヲ認メス、概括的ニ十九世紀ノ戰役ニ於ケル發疹「チフス」カ如何ニ慘虐ヲ極メシカハ左表ニヨリ窺ハレン。

戰役名	疾病ニヨル死亡					合計	戰死
	コレラ	チフス 瘰癧	赤痢	痘瘡	マ ラ ア 瘰癧		
1809年英和 戰役(英人)	—	—	—	—	4175	4175	274
1854—1856 年クリミヤ 戰役 (佛國人)	11193	17515	—	—	1795	31615	20249
(英國人)	4537	—	2134	—	375	7382	1761
1859/67年 伊太利戰役 (佛國人)	—	136	116	—	46	298	3664
1861年ヨリ 1865年ニ至 ル米國內亂 (聯合軍)	—	34843	9431	7058	10063	61395	110035
1864年丁未 佛國埃國間 戰役(普國)	—	193	—	—	—	193	738
1866年獨逸 戰役(普國)	4529	379	—	—	—	4908	4459
1870/71年 獨佛戰役 (獨)	—	8789	2380	278	—	11447	25278
1877/78年 露土戰役 (露國)	—	43985	13095	83	1293	58794	34742
1880/81年 露土戰役 (露國)	—	175	161	—	65	399	176
ヘルツエゴ ワ非ナ内亂 戰(埃國)	—	181	27	12	32	252	71
1884/89年 東京ニ於ケ ル佛人戰 (佛國人)	1416	77	60	—	46	1599	83

一八七七、七八年ノ露土戰爭ニ於テ「チフス」様疾患ニ罹レルモノハ「ニードネル」Nidnel
ニヨレハ左ノ如シ。

「ドナウ」軍隊ニ於ケル患死者

病名	患者數	人員ニ對スル%	死者數	人員ニ對スル%	患者ニ對スル死者%
腸チフス	二五、〇八八	四二・三三七	七、二〇七	一一・二七	二八・七二六
胃腸チフス	三八、三六三	六四・七九	一、六一五	二・七三	四・二〇九
再發チフス	三九、三三七	六四・四三	四、八四九	八・二八	一一・三二六
發疹チフス	三二、四五二	五四・八〇	一〇、〇八一	一七・〇二	三一・〇六五
計	一三五、二三九	—	二三、七五二	—	一七・五六二

高加索軍隊ニ於ケル患死者

病名	患者數	死者數	患者ニ對スル死者%
腸チフス	二四、四七三	八、九〇八	三六・三九九
胃腸チフス	九、五八九	一、〇四四	一〇・八八七
再發チフス	一四、五七六	三、七七五	二五・八九八
發疹チフス	一五、六六〇	六、五〇六	四一・五四五

此戰役間ニ露國軍隊中チフス様疾患ニヨリ總數拾九萬九千五百三十七名ノ患者及ヒ四萬三千九百八十五名ノ死者ヲ出セリ、其損失タルヤ該戰役ニ於ケル最モ慘憺ヲ極メタルモノニシテ、實ニ武器ニヨル損失兵員數三萬四千七百四十二名ニ比シ遙カニ超過セルモノナリキ。

壹萬二千名中ノ患者及死者ハ左ノ如シ。(原書ノ記載明瞭ヲ缺ケトモ其儘掲ク)

病名	患者數	死者數	患者ニ對スル死者%
腸チフス	八四	三四	四〇・四七六
再歸熱	七五八	五四	七・一二四
發疹チフス	一八五	四六	二四・八六四
不確症	三一八	四一	一二・八九三
計	一、三四五	一七五	一三・〇一一

露獨ノ國境ニ在リテハ十九世紀中殆ント年々發疹チフスノ散發ヲ認メ而シテ之ヨリ大都市例ヘハ伯林「プレスラウ」等ヲ襲ヘリ、サレハ「ゴットスタイン」Gottsteinハ一八七七年ヨリ一八八二年ニ至ルマテノ間ニ於テ普國病院ニ收容セル發疹チフス患者ハ一萬人以上ナリシヲ確カメタリ、一八九三年「リール」Lilleニ於テ流行ヲ來シ巴里ヘマテ侵入セリ、其後散發性ノ例及ヒ小流行ハ獨逸國ニモ在リ、特ニ「ハン

ブルヒ」「オーベルシュレジエーン」及ヒ「ゲツチンゲン」ニ於ケルカ如キ之ナリ、佛蘭西西班牙、葡萄牙ニモ散發スレト白耳義、和蘭、スカンデナヴヰア、島ノ如キニハ本病全クナシ、伊太利ニ於テハ曾テ激烈ナル流行ヲ見タリシハ既述ノ如クナルカ現今ニ在リテモ尙ホ年々患者ノ發生ヲ見ル。

近年歐洲ニ於ケル發疹チフスハ全ク相隔絶セルニケ所ニ蔓延ス、即チ愛蘭土及ヒ英蘭土ト「スラブ」地方(特ニ露國及「ガリツエン」)之レナリ、然ルニ兩者共ニ近來衛生ノ進歩ト共ニ漸次減少シ來レリト雖モ、該地方ノ貧民社會ノ大部分ハ尙非衛生的狀態ノ下ニ在ルカ故ニ其跡ヲ絶ツニ至ラス。

最近ニ於ケル歐洲以外ノ發疹チフス流行地ハ埃及、(ツニス)波斯、支那(殊ニ東京地方)北印度、墨西哥等ナリ、北米ニ於ケル落機山熱 Rocky mountain fever 或ハ發疹性熱 Spotted fever ハ發疹チフスト類似ノモノナリト云フ。

本邦ニ於ケル流行誌 我邦ニ於ケル發疹チフスノ流行ハ暫ラク歴史的文獻ヲ除外スルモ其形迹甚タ不明ナリ、ベルツ「ハ明治四年(一八七二)始メテ確實ナル本病ノ患者四名ヲ市ケ谷監獄ニテ見タリトナシ、其後明治二十五年(一八九二)東京ニ小流行ヲ來シ、其際本所病院ニ於ケル若干ノ人員ハ之ニ罹レリト云フハ比較的信ス

ヘキ事實ナルカ如シ。

我内務省衛生局年報所載ノ統計ニ據レハ明治十二年(一八七九)以來衛生局年報ハ明治八年以降存ス而シテ第一第二報告合冊中第二欸傳染病中發疹瘰癧扶私ナル名稱アレト、明治十一年マテハ其患者數ヲ地方長官ヨリ報告シ來ラサリシ由ニテ統計ノ徵スヘキナシ、サレト其記載ニヨレハ夫レ以前ヨリ存在セシカ如ク窺ハル)殆ント年々多少ニ拘ハラズ本病ノ發生ヲ見サルハナシ、然ルニ學者中ニハ我邦ニ於ケル發疹チフスノ流行ヲ否定セントスルモノアリ、素ヨリ此ノ統計ハ一般開業醫ノ届出ヲ基礎トスルカ故ニ、醫學ノ進歩未タ幼稚ノ時代ニ在リテハ恐クハ同一病名ノ下ニ多數ノ異ナレル病症ヲ包含セシメタルナラン、然レトモ近時ノ經驗ト觀察トニ依リ虚心坦懷之ヲ見レハ多少數字上ノ差異ハアランモ、我邦ニ於ケル發疹チフスノ存在ヲ否定セントスルハ寧ロ困難ナラント信ス。

茲ニ參考トシテ我邦ニ於ケル届出ニ據ル發疹チフスノ統計ヲ掲クヘシ。

「發疹チフス」患死者表

(自明治十二年 至同四十五年)

年次	患者數	死者數	患者數	死者數	患者數	死者數
一三	一・五二七	三六〇	二二・五六七	三〇	三九・六六	一五
一四	五六四	一五三	二七・一三	三一	三六・五九	一三
一五	六二九	四三五	三〇・八四	三三	二二・六四	一七・八一
一六	四一二	一一〇	二九・一三	三四	三三・三三	七
一七	三四五九	四四五	一一・八六	三五	一三・六四	三
一八	二・三〇二	三六五	一五・八六	三六	六二・五〇	五
一九	八・二二五	一・五七七	一九・一七	三七	一一・四三	一・四三
二〇	二・四八七	四四八	一八・〇一	三八	一〇・〇〇	一〇・〇〇
二一	一・一三一	二〇七	一八・三〇	三九	二五・〇〇	一
二二	三〇〇	八八	二九・三三	四〇	一一・五〇	一
二三	二五一	六七	二六・六九	四一	三三・三三	一
二四	一・一九四	二〇三	一七・〇〇	四二	六六・六六	六
二五	二八一	六二	二二・〇六	四三	八〇・〇〇	八
二六	二二八	五六	二四・五六	四四	一〇〇・〇〇	一〇
二七	一三九	三三	二三・七四	四五	一〇〇・〇〇	一〇
二八	一八六	四九	二六・三四	計	二六〇・九〇	五・三九五
二九	九二	二八	三〇・四三			二〇・六八

年次	患者數	死者數	患者數	死者數	患者數	死者數
一三	二・三四一	六〇一	二五・六七	三〇	三九・六六	一五
一四	五六四	一五三	二七・一三	三一	三六・五九	一三
一五	六二九	四三五	三〇・八四	三三	二二・六四	一七・八一
一六	四一二	一一〇	二九・一三	三四	三三・三三	七
一七	三四五九	四四五	一一・八六	三五	一三・六四	三
一八	二・三〇二	三六五	一五・八六	三六	六二・五〇	五
一九	八・二二五	一・五七七	一九・一七	三七	一一・四三	一・四三
二〇	二・四八七	四四八	一八・〇一	三八	一〇・〇〇	一〇・〇〇
二一	一・一三一	二〇七	一八・三〇	三九	二五・〇〇	一
二二	三〇〇	八八	二九・三三	四〇	一一・五〇	一
二三	二五一	六七	二六・六九	四一	三三・三三	一
二四	一・一九四	二〇三	一七・〇〇	四二	六六・六六	六
二五	二八一	六二	二二・〇六	四三	八〇・〇〇	八
二六	二二八	五六	二四・五六	四四	一〇〇・〇〇	一〇
二七	一三九	三三	二三・七四	四五	一〇〇・〇〇	一〇
二八	一八六	四九	二六・三四	計	二六〇・九〇	五・三九五
二九	九二	二八	三〇・四三			二〇・六八

今上表ニ就テ少シク解説ヲ加ヘントス、即チ我邦ニ於ケル發疹チフスハ明治十二年七月及ヒ十三年二月ヨリ六月ニ至ル四五ヶ月間ニ堺縣ニハ患者二百十二人アリ、群馬縣ハ明治十二年七月以來始終其迹ヲ絶タス、總計三百五十四人ノ患者アリ

リ、八月九月ハ四十人以上ニ上リ、十三年二月ハ十五人ニ下レリ、明治十三年七月ヨリ十四年六月ニ至ル一ケ年間ニ於テハ全國殆ント患者ノ發生ヲ見サルナク、唯僅カニ滋賀、福井、岡山、徳島、大分ノ五縣ノミ之ヲ免レタリ、患者數最多ノ府縣ハ東京府及神奈川縣ニシテ新患者ノ發生ハ共ニ五六月ニ多ク七八十人乃至三百四十人、其他ノ月ハ多キモ十三四人ニ上ラス。

明治十四年七月ヨリ翌年六月ニ至ル一ケ年間ノ流行府縣モ略ホ前年度ト同様ニシテ患者發生ナキハ滋賀、福井、鳥取、岡山、徳島、大分、沖繩ノ七縣ナリ、而シテ何レモ大ナル流行ヲ見ス。

其後明治十五、六ノ兩年ハ十四年度ト大差ナカリシカ、明治十七年ニ至リ頓ニ増加シ、患者三千四百五十九人、死亡者四百四十五人ノ多キニ至レリ、翌十八年ハ少シク減シテ患者二千三百二人、死亡者三百六十五人ヲ出シ、十九年ニハ更ニ激増シテ實ニ患者八千二百二十五人、死亡者千五百五十七人ヲ出セリ、之ヲ極度トシ、翌二十年ニハ再ヒ減シテ患者二千四百八十七人、死者四百四十八人トナリ、二十一年ハ半減シテ患者一千百三十一名、死者二百七名ヲ示シ、二十二年ニハ更ニ減少ヲ見タリ、以上年々最多數ノ地方ハ兵庫、愛媛、山口、廣島ノ四縣ニシテ多キハ千三百餘名ヲ

出セリ、此四ケ年中ニ於テハ各地方トモ概シテ十九年ニ最多數ヲ占メ、就中京都、大阪ノ如キハ一千餘人ニ及ヘリ。

上述數年間ニ於テ多少流行ノ狀況ヲ呈セシハ熊本縣監獄出張所、宇土郡三角浦、戸口浦、川尻ニ於テ十八年十二月十三日以降十九年一月十五日ニ至ルマテノ患者總數三百三十八人、死者五十七人ニ及ヘリ、又十九年一月十四日大阪府若松町監獄ニ於テ本病患者三名ヲ生シ、次第ニ蔓延シ、遂ニ三月一日マテニ患者二百五十九人ヲ出セリ、其他堀川、中ノ島、堺、奈良、五條ノ各分署ニモ同患者ヲ生シ、一月二十一日ヨリ三月十六日マテニ患者總計本分署ヲ合シテ四百五十一人ニ及ヘリ。

斯クテ明治二十四年ニ一千百九十四人ノ患者ヲ見タリシモ、翌年ヨリ急減シ、二十八年ニ於ケル百八十六名ヲ最終トシ、全國ヲ通シテ患者總數曾テ百名ニ達セス、從ツテ輒今ニ至ル迄學者ハ往々ニシテ我邦ニ於ケル發疹、チフスノ存在ヲ否定シ、其發疹、チフスト稱スルモノハ發疹多キ腸、チフスニ過キスト主張スルニ至レリ、從テ地方開業醫師並ニ衛生行政當路者モ其說ニ傾キ、彼此相俟ツテ益本病ノ届出ヲ減スルニ至リタルモノ、如シ、サレト之ヲ事實ニ徵スルモ東北諸縣ニ於テハ腸、チフスニアラサル發疹性熱病ノ散發セシハ爭フヘカラス、殊ニ昨大正二年ニ於ケル

山形縣ノ報告例ノ如キハ明治十九年以來之ニ類似スル疾病カ庄内地方ニ存在スルヲ認メ昨年四月ノ交ニ於ケル該病流行ニ際シ調査報告ヲナセリ、勿論其數多カラサルコト及ビ症候カ成書ノ記載ト多少差異アル點ナキニシモアラスト雖モ、後述スルカ如ク本病ハ人種的素因ニヨリ幾分カ症候ヲ異ニスルヲ以テ、本病ニ對シ重篤ナル素因ヲ有スル歐洲人ニ於ケル記載ヲ移シテ直ニ邦人ニ比スレハ小異アルハ蓋シ免レサルコトナラン乎。

更ニ本年度ニ於テ東京ヲ初メトシ隣接諸縣及ヒ東北各地方ニ於ケル發疹「チフス」ノ流行竝ニ散發ヲ見ルニ至レリ、而シテ之ヲ真正ノ發疹「チフス」ナリトセンカ東北地方ニ在リシ發疹性熱病モ亦其症候差異ナキカ如ク隨ツテ我邦ニ於ケル本病ノ存在ヲ否認スル能ハス。

今ヤ其蔓延區域ハ一道、一府、十五縣ニ及ヒ患者總數約四千名ヲ算スルニ至レルモ中ニハ詳報ヲ缺ケルモノアリ、即チ各府縣ヨリ正式ニ報告アリタル發疹「チフス」ノ初發月日竝ニ初發以來ノ患者數(五月七日迄ニ報告ノ分)ヲ舉クレハ左表ノ如シ。

地方名	初發以來ノ數	初發月日	地方名	初發以來ノ數	初發月日
東京府	三、二六三	二月中旬	宮城縣	三四	四月廿一日

埼玉縣	六九	四月六日	福島縣	一四四	四月十四日
群馬縣	一四	四月廿九日	青森縣	一六九	二月下旬
千葉縣	二二	三月廿五日	山形縣	八	四月廿三日
茨城縣	四六	四月十四日	秋田縣	二五	四月廿一日
栃木縣	二	四月廿九日	山口縣	一一	四月廿六日
靜岡縣	七	四月廿二日	北海道	一一	三月廿四日
山梨縣	九	四月八日	神奈川縣	未詳	四月十日
長野縣	四	四月廿五日			

第四 原因

細菌學の基礎 日進月歩ノ此方面ノ記載ニ際シテハ徒ラニ古キ歴史的材料ハ之ヲ省略シ、近世ニ於ケル趨勢ヲ述フルニ止メントス。

發疹「チフス」ニ付テハ往々細菌性病原體ヲ記載サレタリ、千九百十年ノ頃「ハラワ」¹「Hlava」ハ本病患者四十九例中二十回、時ニ桿狀又ハ紡錘狀ノ形態ヲ呈スル所ノ連鎖狀球菌ヲ見出シ、其純粹培養ハ幼豚ニ對シ特ニ羸瘦ト熱發ヲ來シ一回ハ皮膚ニ赤色ノ斑點ヲ惹起セシメタリト云フ、一千八百九十四年「グユビーフ」²「Dublet」及ヒ「ブラウール」³「Brauhl」ハ九名ノ發疹「チフス」患者ヨリ纖細ナル双球菌ヲ見出シ、之ニ「チプロコックス、エキサンテーマチクス」⁴「Diplococcus exanthematicus」ト命名セリ、然ルニ其

後千八百九十九年「バルホア」及ヒ「ポーター」Balfour u. Porter モ亦本病ノ多數ノ場合ニ於テ之ヲ認メタルヲ報告セリ、然ルニ此者ハ腸チフス「患者四十九名中ノ四名ニ於テ見出シタル所ノ双球菌ト頗ル類似セルモノナリキ、又「レワツシエツ」Lawaschew ハ或ル一種ノ病原體ヲ記載セリ、而シテ「ベニアツシユ」Bainisch ハ百十八例ニ就テ研究シ之ヲ是認セリ。

一千九百十二年「ラビノウ井チユ」Rabinowitsch ハ發疹「チフス」患者百十八箇ノ新鮮ナル屍體ニ就テ、其各種臟器中ニ平等ニ短カク稍肥大セル桿菌ニシテ、尖端少シク圓形ヲ呈シ、其者ハ多クハ相對的ニ併列スルコトヲ銀浸軟染色法ノ助ニヨリ又ハ「グラム」氏染色法ヲ以テ證明スルヲ得ヘシトナシ、更ニ「ラビノウ井チユ」ハ五十八名ノ患者血中ニ同一ノ桿菌ヲ見出シ、七例ニ於テハ患者血清ヨリ桿狀菌ノ純粹培養ヲ得タリ、之ヲ人工培養基ニ殖續キ行ケハ初メ高キ凝集反應ヲ呈スルモ比較的速カニ減退スルヲ認メタリ、此ノ培養ヨリセル水製浸出液ヲ以テ（其培養一ヶ月ヨリ若カラス、二ヶ月ヨリ古カラサルヲ要ス）セハ、其最大多數ノ場合ニ在リテハ解熱後六日以後ニ得タル該病血清ト完全ニ補體結合ヲ營ミ且又發疹「チフス」患者ノ血液ヲ病中ニ採取セルモノニ在リテハ、桿菌ノ純粹培養ト殆ント等シキモノトシテ確

カニ幼若動物（マウス、ラツテ、モルモット、家兔）ニ對シ病原的作用ヲ及ホシ、動物ハ羸瘦ヲ呈ストセリ。

又一千九百十一年「ブレデツチエンスキー」Predtetchenskiy ハ發疹「チフス」患者ノ血中ニ「グラム」陰性ニシテ、末端鈍角、中央ニ透明帶ヲ有シヨク極染色像ヲ呈スル菌ヲ見出シタリ、ゲラチン液化、寒天及ヒ馬鈴薯ニハ厚キ菌苔ヲ生シ「コンラデー」及「ドリガルスキー」培養基上ニハ始メ青色「コロニー」ノ形ヲ以テ發育シ、後ニ赤色ヲ増ス、典型的經過ヲトリ、著明ノ發疹ト高熱ヲ有スル場合ニ於テハ細菌學の血液検査ハ陽性成績ヲ呈シ、特ニ發疹後五乃至八日目ニ採血セル際ハ最も多シ、桿菌ノ純粹培養ヲ得ントセハ二〇—二五立方仙迷ノ「ブリオン」中ニ五立方仙迷ノ血液ヲ採リテ入ルレハ足レリ、又喀痰及ヒ尿中ニモ細菌ヲ證明シ得ヘク、凝集反應試験ハ發疹「チフス」患者ノ血清ヲ以テセハ十倍乃至四十倍ノ凝集價ヲ現ハス、喀痰及ヒ尿中ニ於ケル細菌證明ニヨリ「ブレデツチエンスキー」ハ又病毒ニ感染セル無血蟲螫傷以外ニ他ノ傳染可能性ヲ有スルコト確カナルヘキヲ信セリ。

一千九百十一年「レーヴ井ン」Lewin ハ全然之ト反對ノ成績ニ到達セリ、即チ上記ノ所見ヲ再試セルニ一箇ノ桿菌ヲモ認メサルノミナラス、反ツテ球菌ヲ見出セシ

カ此者ハ發疹「チフス」ニ向ツテハ何等病原的意義ヲ有セサリキ、堀内氏ハ滿洲ニ於ケル發疹「チフス」患者ノ糞便及二三例ニテハ尿中ヨリ桿菌ヲ分離シ其者ハ同名患者ノ血清ニ凝集スト云ヘリ。

「ブレデツチエンスキー」ト類似ノ所見ニ就テ一九一二年ニ「フ井ユールト」Furthカ記述セリ、即青島「Kingtan」ニテ觀察セシ例ニ在リテハ其三八%ニ於テ双球菌ヲ見出シ、之レカ生物學上ノ所見ハ化膿性連鎖狀球菌ト甚タ類似セルコトヲ確メタリ、其双球菌ノ純粹培養ハ僅カニ猿家兔及ヒ「ラツター」ニ對シ弱キ病原性ヲ有スルノミニ過キス、且ツ人工的培養基上ニ長ク殖續キ行ク時ハ全ク其病原性ヲサヘ失フニ至ル、サレハ「フ井ユールト」ハ記載セル此ノ双球菌ノ原因的關係ニ就テハ唯單ニ注意ヲ拂ヘリト云フノミニ過キス。

「クロードニツキー」Klodnizkyハ發疹「チフス」患者收容室ニテ捕ヘタル南京蟲ヨリ、運動アリ芽胞ヲ有セサル細菌ヲ培養シ得タリ、此ノ「バチルス」グ井オレンツス、バル「グス」Baillus violentus parvusハ發疹「チフス」患者ノ血清ニ逢ヘハ正當確實ニ高キ凝集ヲ呈ス、又發疹「チフス」患者ノ一例ニ於テハ血液ヨリ純粹培養ヲ得タリ、而テ本菌ハ屢々普通培養基上ニ發育シ、且ツ白鼠、モルモット及ヒ家兔ニ對シテハ病原性アリ

「クロードニツキー」ハ其發疹「チフス」ヨリ見出シタル細菌ノ原因的關係ニ就テノ問ヲ明カニシタリ。

一九一〇年「リツケツツ」Rickettsカ墨西哥ノ發疹「チフス」(tabardillo)ニ就テ施行セル所ニヨレハ同病ハ發疹「チフス」ト頗ル近キ疾患ナルカ、病原體ハ小サクシテ運動性ナキ、卵圓乃至「ビスケツト」狀桿菌ニテ著明ノ極染色ヲ呈シ、發病後七乃至十二日ノ發疹「チフス」患者ノ血液中ニ證明サル、尙ホ如上ノ桿菌ハ發疹「チフス」ニ罹レル人或ハ猿ヨリ吸血セル虱(Pediculus vestiment)ノ胃腸管或ハ各種ノ臟器中ニモ多數ニ見出シ得ヘシ、サレト此桿菌ノ人工培養ハ成效セストセリ。

又微生物原蟲カ發疹「チフス」ノ病原體トシテ反覆唱導セラレタリキ、例ヘハ一八九二年「トアノー」及ヒ「カルメツト」Thoinot u. Calmette 竝ニ一九〇三年ニ於ケル「ゴツチユリツヒ」ノ如キ之ナリ、「ゴツチユリツヒ」Gotschlichハ「ユロヅマ」バ「ユグニスーム」Pyrosona bigeminumニ類似セル細胞内寄生小體 Intrakorpuskulären Parasitenヲ埃及ニ於ケル六例ニ就テ檢出シ、本病ノ原因ト見做セリ、「キリーフ」Kireefハ二十五名ノ發疹「チフス」患者ニ就テ各方面ノ血液檢査ヲ遂行セルニ殆ント常ニ陰性成績ニ終レリ、且ツ一例、タニモ「ゴツチユリツヒ」ノ所見ニ同意スヘキ材料ヲ得サリキ、此事ニ關シテハ更

ニ多數ノ患者材料ニ就テ又他ノ地方ニ於テモ之ヲ研究シ「ゴツチユリツヒ」ノ承認セル寄生么微原蟲カ本病ニ於テハ確一的ニ存在スルモノナルカ、或ハ偶然的所見ナルカヲ定メサルヘカラス。

發疹「チフス」ハ實驗的ニモ動物ニ傳染セシメ得ルモノナルコト近來ノ業績ニヨリ次第ニ確メラレタリ、即チ一千九百十年「ニコロール」Nicolleハ發疹「チフス」患者ニ就キテ發疹ノ初メテ出現セシ日ニ採取シタル血液ヲ接種シ先ツ本病ヲ亞弗利加猿(シムバンゼー)Schimpansenニ感染セシメシニ、二十五日ノ潜伏期ヲ以テ發疹「チフス」特有ノ症候ヲ發シテ罹病セリ、此ノ罹病セル「シムバンゼー」ノ血液ヲ更ニ「マカクス」族ノ猿「Macacus sinicus」ニ接種シ、又其猿ノ一種ニ疾病ヲ傳染セシメ得タリ、然ルニ「マカクス」猿ニ就テノ感染試驗ハ直接人血ヲ以テセルモノハ陰性ニ終レリ、ウヰル「Wilber」ノ實驗ニ從ヘハ若モ接種セル血液カ發病後十日以前ニ採取セルモノナレハ各種ノ猿ハ發疹「チフス」ニ對シ感受性ヲ有スト云フ、「マカクス」猿ニシテ全ク定型的ニ本病ヲ經過セシモノハ一回ノ耐過ニヨリ完全ナル免疫ヲ得、同様ニ「ドレイエル」Dreyerハ發疹「チフス」患者ヨリ採レル少量ノ血液〇二五—〇五立方仙送ヲ狹鼻猿ニ注射接種セルニ八乃至十五日ノ潜伏期ヲ以テ本病ニ感染セシメ得タ

リ「ニコロール」Nicolle及「カカンシー」Conseil「カノー」Conor等ハ又「モルモット」カ發疹「チフス」ノ病原體ニ感受性ヲ有スルコトヲ知レリ、而シテタトヘ其際惹起サル、症候ハ幾分カ不完全ナリトハ雖モ、尙ホ且ツ長時間體温ノ昇騰アルヲ以テ特有ナリト云フヲ得ヘシ、更ニ彼等ハ感染セシメタル「モルモット」ヨリ其疾病ヲ猿ニ傳ヘ、而シテ此ノ猿ヨリ再ヒ「モルモット」ニ傳染セシメ得タリ、夫レニヨツテ「モルモット」ニ於ケル病症ニ就テ「發疹チフス」トノ異同ヲ辯別シ、研究者ノ意見ヲ確カメタルハ注意スヘキ所タリ、一九一〇年ニ於テ「ガブイノ」及ヒ「ギラル」Gavino u. Giraldハ又非常ニ多數ノ實驗ニヨリ前者ト同一ノ成績ヲ得ヘキコトヲ墨西哥發疹「チフス」ニ於テ實證セリ、彼等ハ尙ホ三種ノ異ナレル猿族ニ就テ發疹「チフス」傳染ニ關スル感受性ヲ證明シタリ、即チ其猿ハ「チエルコビテークス」Cercopithecus「カリトリクス」Callitrichus「ミセーテス」ウヰルローズ」Myoetes Villosus及ヒ「セーブス」ヒポレンクス「Cebus hypoleucus」之ナリ、猿「モルモット」以外ノ動物ニシテ發疹「チフス」ニ感受性ヲ有スルモノハ認めラレス、即チ其試驗ニ供セシ動物ハ山羊、綿羊、犬、雞、驢馬、及ヒ家兎ニシテ何レモ陰性ニ終レリ、而シテ疾病ノ實驗ニ使用セシ動物ノ血中竝ニ諸臟器中ニ在リテハ鏡檢上或ハ培養上ニモ何等么微體ヲ認め得サリキ、反之テ「リツケツ

ト及ヒ「ヴヰルデル」Ricketts u. Wilder ハ脾臓塗抹標本中ニ頻回「トラホーム」小體或ハ近時「ベルンハルト」Bernhardt「ホエーフエル」Höfer 及ヒ「カンタクツエネ」Cantacuzene 等カ猩紅熱ニ付テ記載セル構造ト確カニ類似セル一定ノ形態ヲ有スル么微體ヲ認メタリ「カヴヰノ」及ヒ「ギラルド」ハ此構造タルヤ么微生體ナラサルノミナラス、全ク發疹「チフス」ニ特有ナル細胞ノ退行變性產物ナリト主張セリ、傳染セル猿ノ濾過血液及ヒ腹腔滲出液ヲ以テセル感染試驗ハ陰性ニ終レリ、「リツクエツツ」「ウキルデル」「ドレイエル」「ガヴキノ」及ヒ「ギラルド」等發疹「チフス」病原體ノ抵抗力ニ關シテハ「ガウイノ」及ヒ「ギラルド」カ確定シタリ、即チ攝氏五十五度ニテ十五分間加熱スレハ病原體ノ傳染性並ニ免疫性ヲ失フモノナリ、〇、五%ノ石炭酸水ヲ一時間働カシムルモ之ト同様ノ作用アリ、「サボニン」溶液ノ二百倍及ヒ四百倍或ハ牛膽汁ヲ攝氏三十七度ニテ一時間作用セシムルモ病原體ハ害ヲ蒙ラス

「ニコルレー」「カンシール」及ヒ「カノール」ハ發疹「チフス」ノ「トレーゲル」トシテ血液中ノ白血球ニ着目セリ、即チ血液ヲ遠心沈澱シテ得タル少量ノ白血球ハ遠心沈澱セサル該血液全量ト同様ノ作様ヲ有スルコトヲ知レリ、而シテ血漿ハ多少ノ作用ヲ有スルモ赤血球ハ一般ニ毫毛病的作用ヲ及ホサス、腦脊髓液及ヒ細胞ヲ有セサル

血清ヲ以テセル感染試驗ハ稍之ト同様ノ結果ヲ得タリ

疾病ノ耐過者ハ試驗動物ニ在リテハ確カニ著シク永續的免疫性ヲ生ス（「ニコルレー」「カンシール」「ガヴイノ」及ヒ「ギラルド」等）

疾病傳搬ノ徑路ニ就テノ問題ハ發疹「チフス」ノ流行學上至重ノ意義ヲ有スルモノナルカ、最近ニ至リテ幾分明瞭トナレリ、而シテ既ニ次ノ場合ニハ醫師ハ殆ント常ニ發疹「チフス」ニ感染スルコトハ久シク知ラレタル事實ナリ、即チ若シ患者ニ接シタル醫師ニシテ入沿セス、又ハ其汚染セル衣服或ハ無血蟲(虱)等ノ附着セル衣服ヲ着換ユルコトナクハヨク感染ス、又研究シタル所ニヨレハ無血蟲ニヨリテ發疹「チフス」ノ傳搬サル、可能性ハ確カニ信スヘキモノナルコトヲ知ラレタリ、此ノ假想ハ「ニコルレー」「カンテー」及ヒ「カンシール」ノ業績ニヨリテ其實驗的確定ヲ得タルモノナリ、感染セル猿ニシテ發疹ノ出テタル直後ノモノニ人虱ヲ附ケ吸血セシメ更ニ之ヲ健康動物ニ移セハ大多數ノ例ニ於テ其健康動物ニ傳染セシメ得ヘシ、又「ウイルデル」ハ一千九百十一年同一ノ手段ニテ疾病ヲ虱ノ螫吸ニヨリテ動物ヨリ動物ニ感染セシメ、或ハ小サキ皮膚傷面ニ病毒ニ汚染セル虱ノ腸内容物ヲ塗擦シ感染セシムルヲ得タリ、南京蟲 *Wauze* 及ヒ蚤 *Föhe* ニヨリテハ之ニ反シテ感染セシ

メ能ハサリキ

尙ホ價值アル者トシテ特ニ舉クヘキハ虱ニテ感染後三日乃至五日間ハ疾病ヲ傳染セシメ得ヘキコト及ヒ病原體ハ第二ノ「ゲネラチオン」ニ於テモ亦之ヲ證明サルヘキコトニシテ、此ノ事實タルヤ不明ノ病原體カ虱ノ臟器中ニ於テ發育ヲ完成ストノ憶說ニ一致スルモノナリ、其他衣虱 *Kleiderlaus* 又ハ頭虱 *Pediculus capitis* モ病毒ヲ傳搬セシメ得ヘシ

茲ニ一言セサルヘカラサル事ハ發疹「チフス」病原體ハ血中ニ在リ、從ツテ無血蟲ノ媒介ニヨリ、健康動物ニ感染セシメラルトノ說盛ンニ行ハルニ至レルコト之レナリ、而シテ多クノ成書ニハ單ニ無血蟲 *Ungezieher* ニヨルトノミ記載サレアルカ、其無血蟲トハ何ヲ意味スルカハ不明ナリ、多クノ實驗研究者ノ說ニテハ人體ニ寄生スル虱即チ人虱ニシテ頭虱、衣虱、毛虱ノ如キカ主ナル媒介者タリ而シテ、南京蟲或ハ蚤ヨリハ媒介サレストナスカ如シ、然ルニ「フラツテン」[Platten]ノ如キハ「アベル」ノ衛生學中ニ明カニ蚤ニヨル傳染ノミヲ記載シ、「カーメン」ハ又其著ニ於テ南京蟲ノミヲ媒介者トシタリサレハ、「ヴァイルデル」ノ研究成績ニノミヨリ、直チニ南京蟲或ハ蚤ヲ否定セントスルハ多少早計ニ失セスマト思料サル、勿論判斷ハ業績ノ價值如

何ニヨリテ定マルモ、夫等ノ確乎タル解決ハ今後ノ研究ニ待タサルヘカラス、之ヲ要スルニ本病ノ細菌性或ハ微生原蟲性病原體ニ就イテノ發見報告ハ多シト雖モ未タ其病原的意義ノ問題ハ解決サル、ニ至ラサルナリ、勿論實驗的方法ニヨリ發疹「チフス」カ傳染可能性ナルコトハ各種ノ報告ニ於テ一致セル所ナリトス

今後世界各國ノ流行地ニ於テ發疹「チフス」患者ノ豊富ナル材料ニ付キ充分ナル研究ヲ重ネ唯個々ノ流行ニ際シテノミナラス、何レノ流行何レノ患者ニ於テモ確乎不動ナル特殊ノ么微體カ發見サレ、細菌學上ノ法則ニ照シテ間然スル所ナキニ至ラサル迄ハ發疹「チフス」ノ原因論ニ就テ最終ノ歸決點ニ到達セリトハ認ムル能ハス、故ニ尙ホ本病ノ病原體ハ不明ナリトノ域ヲ脱セスト云フヘシ

一般的方面 本病ノ原因論中最モ重キヲナスベキ細菌學及ヒ其關聯科學ノ範圍ニ於ケル病原的方面ニ就テハ前述セリ、サレハ以下傳染ノ徑路及ヒ傳染ノ補助原因即チ誘因其他ニ關シ略述スヘシ

一、傳染徑路 本病ノ傳染ハ特殊ノ病原體ニヨリ人ヨリ人ニ傳染シ行クハ各種ノ經驗ニヨリ明ナリ、サレト上述ノ如ク病原ノ本態未タ判然タラサルニヨリ傳染徑路ヲ確言スル能ハス然レトモ次ノ三種ニ別ツテ得ヘシ

(イ)患者ニヨル直接傳染 往時ヨリノ經驗上本病ノ接觸傳染性最モ激烈ナリトセラレ本年度ノ流行ニ於テモ明カニ之ヲ證セリ、而シテ唯ニ接觸ノミナラス空氣傳染アルニアラスヤトサヘ疑ハレシカ、之ヲ精査スルニ多クハ同室又ハ患者ニ接近シタルモノニシテ痘瘡ノ如キト趣ヲ異ニス恐ク患者ハ最モ屢咽喉及氣管支加答兒強度ノ者アルカ故ニ咳嗽ノ飛沫ニヨル所謂泡沫傳染ナリト見ルヲ至當トスヘシ

(ロ)無血蟲類ニヨル傳染 本病患者ノ血液中ニ病原體ノ存在スルハ明カナリ從ツテ無血蟲ニヨリテ間接ニ病毒ヲ媒介サル、ハ疑フヘカラス

(ハ)物品ニヨル傳染 患者ノ周圍ハ病毒ニヨリテ汚染サルヘキカ故ニ患者ノ居室及ヒ其他患者ノ使用セルモノ例ヘハ衣類、寢具類、家具、雜用品等ニヨリ間接ニ傳染サル往時ハ臥床、入浴、洗濯物等ニヨル傳染ヲ重要視サレタリシカ是等ノ中ニハ無血蟲ニヨル媒介ヲモ含マレシコトナルヘシ

二、時及場所の素因 發疹、チフスノ發生ハ冬季又ハ春季カ多ク從ツテ好ンテ此季節ニ蔓延シ、暑氣ノ候即チ夏季ハ少ナシ、尙ホ不潔ナル場所ハ本病ノ好發地タリ、又曾テ本病發生セサリシ地方ニ病毒ノ侵入スル事アレハ其勢猖獗ナル

ハ確カナル事實ナリ

三、社會的狀態 社會的缺陷殊ニ非衛生的住居ニ貧民ノ集合スル所例ヘハ貧民部落、木賃宿、養育院、監獄、工場、寄宿舎ノ如キ往時ハ又軍隊内モ好發地トセラレタリニハ好發シ、且ツ饑饉ノ場合等ニ際シ、食物缺乏ノ時或ハ生活上ノ境遇不良ナル時例ヘハ戰時等ノ如キニ在リテハ往々激烈ナル流行ヲ見タリ

四、年齡體性的關係 六ヶ月以下ノ幼兒ハ比較的免疫性ナリ、殊ニ侵サレ易キハ二十歳乃至四十歳ノ男性ヲ最モ多シトス、女子ハ男子ヨリ罹病數概シテ少ナシ、之レ傳染ノ機會比較的稀ナルカ爲メナラン乎

五、人種的素因 「カンシール」カ埃及ノチユニスニテ觀察セル所ニテハ土民ノ發疹、チフスハ輕クシテ歐洲人ニ比スレハ往々其症候非定型的輕症ニ經過ス之レ恐クハ土着民ハ其際既ニ曾テ本病耐過者ナリシナラントセリ、何レニセヨ本病流行史ヲ緝ケハ歐洲人間ノ流行ハ其慘害ヲ逞フセルハ事實ナルカ如シト思料サル

第五 症 候

一、一般經過 一二週間ノ潜伏期後ニ突然發病シ之ニ次クニ四十度内外ノ稽留性高熱ヲ以テシ、顔面ハ著シク潮紅腫脹狀ヲ呈シ、發病後三乃至五日ヲ經テ特異ノ發疹ヲ生シ經過中幸ニ死ノ轉歸ヲ免ル、モノハ第二週ノ終若クハ第三週ノ始ニ於テ輕度ノ分利性現象ヲ以テ解熱シ、漸次恢復ニ向フモノナリ以下項ヲ追ヒテ其概要ヲ迷ヘントス

二、潜伏期 潜伏期ニ就テハ各學者ノ意見區々タリ「クラウス」Paul Kraus(L. Mohr u. R. Staehelin; Handb. d. inn. Mediz. I. Bd.)ハ本病ノ潜伏期ハ四乃至十四日間ヲ上下シ、最モ多キハ八乃至十二日間ナリ、流行時期ニハ一二ノ場所ニテハ數時間或ハ一日ノ最短潜伏期ヲ見シ例アリトセリ、又「フラッテン」Flatten (Abel Handb. d. Prakt. Hyg. I. Bd.)ハ其潜伏期一乃至二週間ナリトシ「フレンケン」及ヒ「ゴッテュリッヒ」Frenken u. Gotschlich ハ「ヘルサン」Yersin 等ノ說ヲ引照シ (Rabner, u. s. a., Handb. d. Hyg. III. Bd. 2. Aft.) 多クハ二三週間ナリトシ「ヴァンデル」Wandel (P. Krause; Klin. Diag.)「クラウス」說ニヨリ八乃至十二日(四乃至十四日)ト記載シ「ロンベマン」Romberg (Mering. Lehrb. d. inn. Medz.)モ亦八乃至十二日最短四日、最長十四日ナリトセリ

然ルニ之ヲ動物試驗ノ結果ニ徵スルニ「ニコルレー」Nicolle ハ發疹「チフス」ノ定型の症候ヲ有スル者ノ血液ヲ「シンバンゼー」亞弗利加猿ニ接種シタルニ二十五日ノ潜伏期ヲ以テ感染セルヲ公ニシ「ドレイエル」Dreyer ハ發疹「チフス」患者ノ血液〇・二五乃至〇・五立方仙迷ノ少量ヲ「チエルコビターケン」狹鼻猿ニ接種シタルカハ乃至十五日ノ潜伏期後ニ感染セリト報告セリ「コルレ」ワツセルマン「病原么微生物學所載」之ヲ要スルニ動物試驗ノ成績ヲ以テ直チニ人間ニ推及セントスルハ穩當ナラスト雖モ「クラウス」ノ如ク流行時ニハ數時間乃至一日ニ充タサル潜伏期ノモノアリトスルハ遂ニ信シ難ク、一二週間ヲ以テ潜伏期間ト見做スヲ適當ナラント信ス

三、發病期 潜伏期ヲ經過スレハ多クハ前驅期無クシテ突然一回ノ惡寒戰慄ヲ以テ發病シ、輕重ニヨリ病症ニ差アレトモ概論スレハ體温急激ニ昇騰シ三十九度乃至四十一度ヲ示シ、脈搏百乃至百四十至ヲ算スルコトアリ斯クテ自覺症トシテハ全身倦怠、激シキ頭痛及ヒ往々眩暈或ハ惡心、嘔吐、並ニ胃部壓迫ノ感ヲ訴ヘ、其他強度ノ薦骨痛アリ、且ツ足蹠指趾又ハ四肢ノ關節痛モ甚シク到底就瘳ノ已ムナキニ至ル、而シテ他覺的症候トシテ全身皮膚ノ充血ニシテ殊